

モビルスーツ全集⑦

Z計画&アナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツ U.C.0087-0096 BOOK

Contents

010 Introduction Z計画 新たな時代のモビルスーツ像

012 カラー設定画&イラストライナーップ

020 Z計画小史

024 アナハイム・エレクトロニクス社製MSの戦場

028 Z計画の実像

030 各種機体解説

リクター/ディアス/ディジエム/MS-099の系譜/百式/MSN-001/00の系譜/

デルタプラス/Zガンダム/Zプラス(A1型)/MSZ-006の系譜/

メタス/MSA-005の系譜/ネモ/MSA-003の系譜

039 宇宙世紀0088年前後のMSトレンド

052 各種機体解説

ZZガンダム/MSZ-010の系譜/ガンダムMk-III/フルアーマーガンダムMk-III

058 コラム

Z計画の徒花!?

究極のスペックを誇るSガンダム

060 宇宙世紀0093年以降のMS

062 各種機体解説

リ・ガズィ/νガンダム/リゼル/ジェガン

070 コラム

宇宙世紀0090年代のバリエーション機、試作機

072 各種機体解説

ユニコーンガンダム/ユニコーンガンダム2号機/パンシィ/ジェ

078 コラム

UC計画とは?

079 コラム

宇宙世紀0105年代のガンダムたち

080 宇宙世紀0087-0096年 エウーゴ/地球連邦軍の選考

082 宇宙世紀0087-0096年 モビルスーツの武装

086 THE対決

ガンダムMk-III vs 百式/νガンダム vs サザビー

Ζガンダム vs ティターンズ/連邦軍可変機

090 V作戦、GP計画をしてZ計画へ

094 可変MS技術説

098 可変モビルスーツと現実世界の可変航空機

102 MS設定資料

126 MSスペック一覧



MSZ-010
ZZガンダム



RGM-89S
スタークジェガン



RX-93 νガンダム
RX-0 ユニコーンガンダム





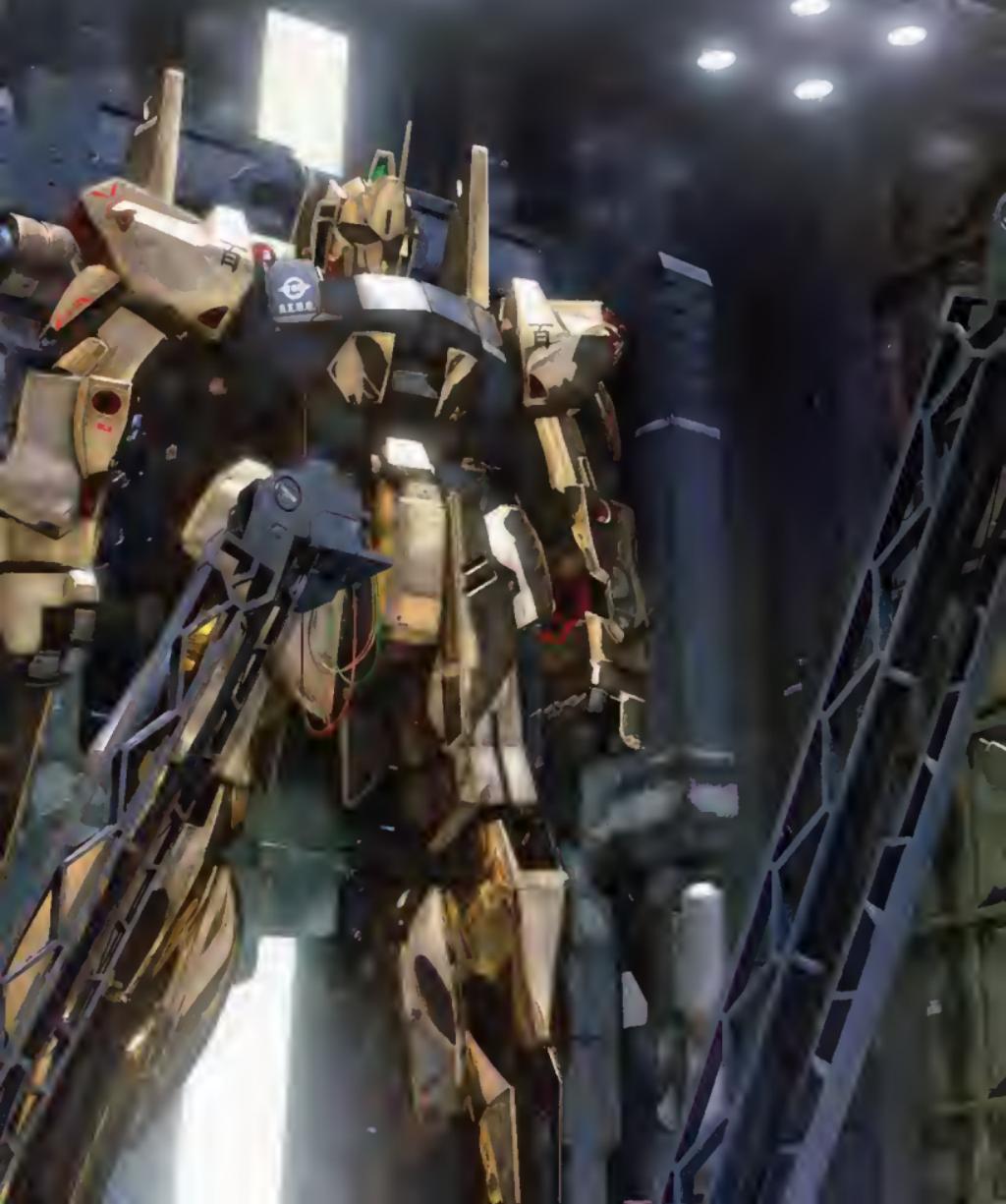


AE

ANAHEIM
ELECTRONICS



MSZ-006 Zガンダム
MSN-00100 白式





Z計画とアナハイム・エレクトロニクス社のMS



「機動戦士ガーダム」のヒットの要因は様々あるが、その中のひとつに「ロボットの兵器化」というのが挙げられるのは論を待たないだろう。

「戦国時代を扱ったエノターテインメント作品でも、当時の合戦においてリアリティのある描写をした作品がほとんどない。いのちの同じで、リアルさより面白さを優先するのでは古き西洋と同じである。」
「ガーナダム」は放送終了後、印刷媒体やファンたち、模型業界などによってそのリアルさは先鋭化されていった。それは、ある意味壮大な「ここに遊び」の一

7

詩

新たな時代のモビルスーツ像

これは、当時の「空要塞マックス」にも登場しており、江口といえた、「ガーディム」の新作を考案するにあたり、当時の「空要塞マックス」の空要塞トランプオードー」、超時空要塞マックス」にも登場しており、江口といえた、「ガーディム」の新作を考案するにあたり、当時の「空要塞マックス」の空要

心になるという、画期的ストーリーは今までになく、登場モビルスーツも話題となつた。番組後半の主人公機である「ガノンダム」をはじめ、変形するモビルスーツが数多く登場したからだ。

『戦士ランダム』という1985年（機動戦士）の3年後（統編）である『機動戦士ランダム』が放送を開始する。

延長といふ。それらを「カントリーマン」の「世紀」といふ。また、それによる「認識」のよきものを深めていったところが、ダーダムブームをもそそぐそろ。

成功した。そして、この時代に作られた様々な設定は、旧作のオローアップも行いつつ、現在の宇宙世紀の設定のベースにならでいる。これは、『ガンダム・ブルドー』と

るなど、ヒットを記録した
変形王ビルスームは、若い新規ファ
ン層を取り込むと同時に、ベリタリー
やS.F.といった要素がさらに加味され
て、設定面が充実したことによって「カンパニー」
設立後初のヒット曲となる。『星の王子さま』

ミリタリーフィルムの「アーネスト・シャーリー」は「ロボット」が変形するの「アーネル」ではない」という論調も見られた。しかし、「エガーダム」は新しい世代を巻き込み、翌年には主人公を代えた続編「機動戦士ガンダム」も製作され

（アーリー） 当然のことだ。また、
カンダムは合体形態も変形
と、要素も玩具的展開を考えると
順番もええ（アーリー） カンダムの

な題材。
「カノン」、「Z」、「機動戦士ガンダム」、「シヤー」、「機動戦士ガンダムUC」、といった後、作品に登場するAE社製とされるモビルスーツについてまとめてたものだ。
それは、現在における宇宙世紀0087～0096年のAE社製のモビルスー
トについて学ぶだけでなく、先人たちによって補完、発展していくた
め、「ガンダム」、「ワールド」の歴史を振り
返る、もある。

また、底製めうらると、後の作品などで強化、複雑がされるのも特徴といえど、こうして「ガーネーム」の「ド」は、現代も其充しきい。本書では、ガーネーム「開発計画である」と記画と、その成果そして物語中で「ガーネーム」を建造したとされる架空のメーカー「アナハイム・エレクトロニクス（A.E.E.）」のモビル・スィスクス（A.E.E.）を取り上げた。メーカーや、物語などの設定は、一もガーネーム的。

カラー設定画& イラストラインナップ

Z計画機ならびにU.C.0096年代までのアナハム・エレクトロニクス社製のMS

機動戦士Zガンダムから最新作UCまでの映像作品、関連企画などに登場したZ計画機とU.C.0096年頃まで（一部の機体はU.C.0100年代）のアナハム・エレクトロニクス社が開発したモビルスーツのカラー設定画、およびカラーイラストを掲載。本誌内で解説をしているものには該当ページを表示。並び順は映像作品を先にして、関連企画、それぞれ登場年代でまとめている。

















Z 計画小史

第二世代モビルスーツと可変機の登場
そしてその終焉



時代がモビルスーツ開発を 加速する

宇宙世紀0080年に終結したジオン

独立戦争（一年戦争）により、ジオン
公国はジオン共和国となり、地球圏
には一応の平和が訪れた。しかし、か

つてのジオン軍の急進派は、木星と火

星の間にジオン公国が建設した小惑星

基地アクシズに築き、一大勢力を構築。

地球圏でも一部の勢力が徹底抗
戦の構えでギリラ活動を繰り広げるな
ど、必ずしも安定してはいなかった。

特に宇宙世紀0083年に勃発した

ジオン公国軍エギーユ・デラーズ中

将率いるデラーズ・フリートによる軍

事テロ「星の屑作戦」は、あらためて

ジオン軍

の

勢

力

を

増

す

た

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。

。



二つ目のイノベーションは、ムーバブル・フレームだ。従来までのモビルスーツが、モノコック式（連邦軍はセミ・モノコック式）の機体であったのに対し、外装と駆動部（フレーム部）を分け、機体の可動範囲の自由度を高めることにより、機体の運動性能を飛躍的に向上させる技術である。また、AMBAC機動の向上という意味でも、革新的な技術といえた。

三つ目となるのがインターフェイス系のテクノロジーで、全天周開モニタートリニア・シートである。これにより大幅に視認性が向上。コクピットユニットも脱出ボットを兼ね、情報面、パイロットの居住性やサバイアビリティ向上の面でも大幅に改善されることになる。

これらのテクノロジーにより、モビルスーツは、新たなステージを迎えた。

一方、ティーンズの開発したRX-178ガンダムMK-IIは、非ガンダリウム合金使用機であり、厳密には1・5世代機であるものの、時に第2世代以上の

パフォーマンスを見せたように、ムーバブル・フレームの採用は新世代機開発の鍵であり、それは結果的にもう一つの革新的な要素をモビルスーツに与えることになった。可変モビルスーツの開発である。

もともと、可変機という存在はモビルスーツよりもモビルアーマーに試験的に取り入れられて開発が進んだテクノロジーだった。これがムーバブル・フレームの応用でモビルスーツにも使用できる目次が立ったのだ。そして、アナハイム・エレクトロニクス社の可変モビルスーツ開発計画とそれがZ（ゼータ）計画である。

その全貌は知られていない Z計画とは？

実際にZ計画は名前だけがよく知られているが、その詳細な概要となると、実はあまり知られていない。可変機であるMSZ-006ガンダムを開発するための計画とも言われるが、Z計画自体もその後のZガンダムやSガンダムの開発も含まれているとも言われるため、その表現は正確性に欠けるだろう。

一方で、アナハイム・エレクトロニクス社による第二世代機のMS-009リック・ディアスやMS-0010百式の開発もZ計画の一部であるともされる。このこと

から、少なくとも最新テクノロジーによる、新たなモビルスーツのコンセプトの立案、そして実践というのが計画の趣旨である事は間違いないだろう。その到達点が、可変モビルスーツそのものか、それをステップにしつつ新たな機体を作り続けるものなのか、途中から変化していくものなのか、実は歴史の中だ。

ともかくも、アナハイム・エレクトロニクス社は最新テクノロジーを使用した第二世代の機体を開発した。それがRMS-099リック・ディアスである。この機体はムーバブル・フレームの使用に関しては、限定的だったものの、その性能に関してはまさかの事なき第一世代モビルスーツである。

このリック・ディアスは計画当初Yガンダムと名付ける零もあったように、同時にティーンズが開発したRX-178ガンダムMK-IIと、その性能自体は互角だったものの、その設計思想は一步先をいくものだった。アナハイム・エレクトロニクス社は、本機を量産機系のトップ・モデルとして位置づけ、第二世代のモビルスーツとして普及版と言えるMSA-003

アイスの技術をさらに追求する形での技術開発も行われた。それが可変モビルスーツである。

ムーバブル・フレームが可変MSを可能にした

この可変機は、モビルアーマーの優れた直線方向の機動性と、モビルスーツの優れた空間方向への機動性を併せ持つことがコンセプトとなる。本来、作戦に対する用途が限定されていたモビルアーマーに対して、モビルスーツの汎用性を与えるという方向で開発が進んでいたものである。一見するに可変モビルスーツと可変モビルアーマーは区別がつきにくいが、モビルアーマー形態が可変機の優れた高火力型（戦闘爆撃機的）と考えればいいだろう。

一方で、可変モビルスーツはスラスターの効率的使用によるモビルスーツが不得意とする直線方向の移動力の向上、および作戦行動時間の向上を主眼としていると考えていいだろう。モビルスーツより大型で、性能的にも余裕のあるモビルアーマーを最初に可変機として計画が成されたのは頃けの話である。そうして開発された初期の可変モビルアーマーは、マグネット、コートイングなどの従来ある技術を使⽤して製作されるか、極めて簡易的な変形機構を採用していた。

[Z 計画の代表的な M S]

第2世代MS

MSN-0099

リック・ディアス

別名のヤガンドームは、実用機種でフレックス性能が強化されたとされる(結局、クワトロ大尉が黒色を示して採用されなかった)。各種の設計面で革新的だったといわれる。



第2世代MS

MSN-0010

百式

可変MSとして当初は計画されていたが、途中から変更となりクワトロ大尉の実用的な専用機となった。両の百式は開発者のナガエ博士が、百年活躍できるよう願いを込めて名づけられたとされる。

第3世代MS

MSN-006

Zガンダム

単機による大気圧突破という戦略の性能を有する機体。機動性、攻撃力とも高い。ただ、多機能という反面、専門に特化した相手には苦戦を強いられる場面も見られた。



第4世代MS

MSZ-010

ZZガンダム

第4世代MSの代表機といえる。もっとも、この世代の機体は数も少なく、カタログ一覧に開示されたため、本機を第3世代MSに区分する記述もみられる。



一方、モビルスーツを変形させるることは課題も多かった。それは、変形によるデッド・ウェイトなどの許容範囲が少なく、結果的に中途半端な機体になる可能性があるからだ。また、変形にかかる時間も問題であった。しかし、ムーバブル・フレームにより、設計の自由度が上がり、モビルスーツの可変型という可能性が見えてきた。

開発の道程 Zガンダムへ至る

かくしてアナハイム・エレクトロニクス社において、Yガンダム(リック・ディアス)に続いて製作されたのは、MSA-0010(デルタ)ガンダム、

(エ)「エブシャイ」ガンダムという機体がいたという説もある)と、別アプローチの変形機構がトライアルされた。その後のMSA-005メタスになる機体であった。これらの機体は最初から変形機構を意識して試作されていた。しかし、MSA-005メタスの方は変形機構自体はうまくいったものの、変形実験機程度の位置づけであり、モビルスーツとしては必ずしも満足のいく性能ではなく、一方でデルタガンダムの変形機構は問題を抱えていた。

そのためデルタガンダムは、変形機構をオミットした形でひとまずの完成を見る。それがMSN-00100百式だ。この機体の性能はリック・ディ

アスと大差はないが、エウゴのクワトロ・バジーナ大尉が操縦したプロトタイプの他に、少数が改良されつつ生産もされている。おそらくムーバブル・フレームの機能も良好で、機体設計という意味ではリック・ディアスよりも優れていたのだろう。実際、第一次オ・ジオン戦争まで第一線機として活躍した。

第三世代機 Zガンダムの誕生

難航していた変形機構だが、幸運が舞い込む。ティターンズの最新鋭機、RX-178ガンダムMK-IIの南獲に成功したのだ。本機は1・5世代機

ともいえるものだったが、ムーバブル・フレームの洗練度はアナハイム・エレクトロニクス社のそれを上回っていた。デルタガンダムの経験を活かしつつ、ガンダムMK-IIのフレームの技術を参考にして開発されたのが(ゼータ)ガンダムである。また、これに團獲作戦時にエウゴに参加した義勇兵の少年、カミーユ・ビダンによって、大気圧突入型であるウエーブライダーという新しいアイデアが加えられた。

かくして「Z計画」の成果としてMSZ-006Zガンダムが完成した。この機体は強力なジェネレーターの搭載と、軽量の機体により、宇宙世紀080年代の終わりまで第一線級の能

力を維持した。また、そのコンセプトはRGZ・91リガズイ・RGZ・95リゼルなどの後の機体に影響を与えた。一方で、各艦隊の可変機という構造上の革新が進んだためであるといえるだろう。これら可変機は第三世代バブル・フレーム技術の確立によるジエネーラーに軽量の機体という同じような構造を持つており、これはムード・マニピュレーターを用いた機体に比べて機と呼ばれる。

乙ガンダム以降続く
ガンダム・プロジェクト

くして、エガンダムの完成によつて、可変モビルスーツ計画はひと区切を迎えるかと思ひきや、エガンダム別の方向性の機体の開発も並行し、われ、エガンダムのロールアウトも若干年後、MSZ-0102が完成する。これは変形という新しいコンセプトで、合体という古いコンセプトに合したもので、かつてのコア・プロットシステムとGバーツというRX-78ダムの要素を再び投入したものだ。の $2\frac{1}{2}$ ガンダムの高出力、高火力

力を維持した。また、そのコンセプトはRGZ・91リガズ・RGZ・95リゼルなどの後の機体に影響を与えた。

一方で、各陣営の可変機も、大容量ジェネレーターに蓄電の機体という同じような構成を持つており、これはムーバブル・フレーム技術の確立による構造上の革新が進んだためであるといえるだろう。これら可変機は第三世代機と呼ばれる。

エジソン・ダム、S・ガンドダムなど第8世代機といわれるエボリューションは、全体数こそ少ないニューティア専用機で第四世代機というものは無理があるだろう。そういう意味では可変機(=ムーバブルフレーム技術による機体設計の洗練化)の登場により、設計的余裕度は増し

一マーハー化という形で適性化が図られている。まさに夢の機体だが、実際には設計的にも無理があつたようで、後にフルアルマードで、その限界点は、ほぼ同一のところにあるからだ。

もう一つはMSA-001-Sガンダム。これは増加装備を付けることでモビルアーマーと性能を得ようとする試みであり、まさに「ミニ・アンド・ドーピング」とでもいいくらいだ。これ以降の機体は型式番号がMSZかMSAに変更されているが、これはアーナハーム・エレクトロニクス社製のモビルスーツの番号が適用されたと思われる。狹義の意味ではZ計画とは、ガンダムおよびΖガンダムの二機の開発計画といえるのかもしれない。

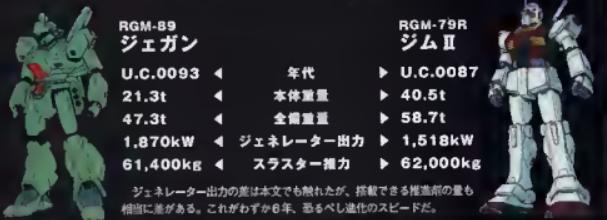
ZΖガンダム、Sガンダムとともにカタログスペック上はΖガンダムを大きく上回っているが、それがモビルアーマーの実的な性能を表しているからではない。同じ時代の最新テクノロジーを投入した機体である以上、その限界点は、ほぼ同一のところにあるからだ。

Z計画の
残したものとは?

乙計画の成果とは、おそらく主には機体構造関係の進化なのだろう。そして、次の世代の基礎技術としての実現は、乙ガンダムの軽量化であった。アバハイム・エレクトロニクス社からRGM-89Jエガンで、第四世代までの「何でも付けてみる」的な進化から一転、シンプルな機体であった。

それを利用して様々な技術的取り組みをする、というのがいわゆる第四世代の「恐竜の進化」の正体といえるのかかもしれない。
Z計画の総括としては、通常の汎用型である「ガソリンダム、火力型」である「Zガソリンダム」、そして撃墜防衛用である「ガソリンダム」というラインナップは、V作戦や、GP計画と同様、最新技術を利用したモビルスーツのフル・ランナップ開発方針であるともいえることができる。

〔主力 MS で見る スペックの違い〕



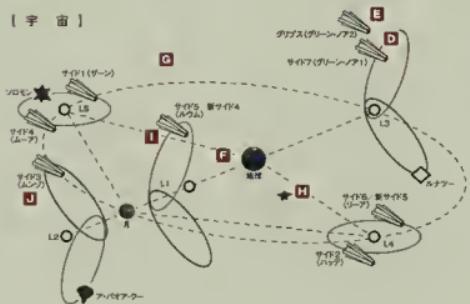
それはひとことで、Z計画の成果である3機の使用を経たアナハイム・エレクトロニクス社のものだ。そこで、新たに時代のニーズに合わせて、このDX-X-93-Vガンダムもまた、この考え方の延長線上に開発されている。そして、こういった「ミニマリスト」な考えは、30年以後に、小型化という形でさらなる進化を見せるのだ。

アナハイム・エレクトロニクス社製MSの戦場

【地上】



【宇宙】



H アクシズ

U.C.0093年、シャアの反乱とも呼ばれる第二次ネオ・ジオン戦争の際に、地球寒冷化作戦を実行するためフィフス・ルナにおいて活動の席が空き、サイコフレームを内蔵するヤングダムの力で、後年アクシズ・ショックと呼ばれる現象が発生される。

■ 新サイド4 (旧サイド5)

新サイド4のコニー、イングス・アリアル7で行われたビストリートと「袖付き」の間の秘密交渉を阻止せんと、ロンド・ベル隊のMS隊と、特殊部隊のエコーズが侵入した。コニー内では、両勢力によるMS戦が展開され、民間人などにも被害が出ていた。

■ サイド3

ハマー・カーン率いるネオ・ジオンは、地球連邦政府との交渉によっていた。サイド3のコニー、コア3を攻撃した。第一次ネオ・ジオン戦争では、ネオ・ジオンの乱でも、ニュータイプ部隊と最新鋭MSによる差し戦闘が繰り広げられた。

■ グリップス (グリーン・ノア2)

サイド7のコニー、カーネは密閉型コロニーと2つ乗り合わせた形状だが、U.C.0087年のクリスマス戦役において分離され、その形状からコニー・レザーハード改改された。グリップス戦役の事実上の決戦地となった。これによりティターンズは導入。

■ 大気圏内

グリップス戦役において、エウーゲンジャムハイ基地に降下作戦を行った。降下作戦を敢行する部隊はそれを阻止する防衛の戦闘が度々行われている。U.C.0093年の第二次ネオ・ジオン戦争では、落するアクシズを食い止めようとする水薙の攻防が行われた。

■ フィフス・ルナ

資源小惑星のひとつ、第二次ネオ・ジオン戦争では、地球寒冷化作戦を実行すべく、フィフス・ルナを地球に降下させようとするネオ・ジオンと、ロンド・ベル隊のMS隊が出撃し、この地域で戦闘を行った。しかし、フィフス・ルナに落ちた。

■ アフリカ

U.C.0088年、ハマー・カーン率いるネオ・ジオンがダカール制圧のために降下。ZZガンダム、2ガンダムなどが破壊されたエコーズのガングダムチームはこれを追撃、最終MSで砂漠地帯での戦地的な戦いを行った。その後、戦闘はティターンズは導入。

■ 太平洋上高高度

U.C.0096年。ビスト財団によりミネバ・ラ・ザビを移送するガルダ級の機体にて、ユニコーンガンドムとバシィの兄弟機が戦闘を行った。その際、可変MSであるデリタ・スズやアンクンガも空中戦を行った。「袖付き」によりミネバは対処されることに。

■ サイド7

サイド7のコロニー、グリーン・ノア1はティターンズのMS試験場となっていた。ガンドムMK-IIの試験を行っていた際、エコーズのクワトロ・バジニア率いるリック・ディアス隊と接触し、戦闘に突入した。その後、ガンドムMK-II機が強襲された。



U.C.0080年～0090年代において、高性能な試作機から量産機まで多彩なMSを開発したアナハイム・エレクトロニクス社。「同社製MSが戦わなかつた地はない」といえるほど、様々な地で様々な戦いが繰り広げられた。その軌跡を振り返ってみよう。

■ オーストラリア

地球連邦軍のトリントン基地がある。一年戦争の時代からコニー一落下に見舞われ、U.C.0083年のデラーズ戦争では、デラーズ・フリートによるガンドム強襲事件が空爆。U.C.0095年でもジオ・公国連邦軍が同基地の爆撃を企て、三度戦火にのまれた。



グリップス2

U.C.0088.02 グリップス2攻防戦

ティターンズとエウゴ、そして火薬から飛来したアクシスを交えた三つ巴の戦いとなったグリップス戦役末期。コロニー・レーザーへ改修されたグリップスを制圧したエウゴは、これをもってティターンズ艦隊の殲滅を計画。しかしティターンズとアクシスはこれを阻止せんと攻撃、その結果、戦力耗減。グリップスの内部では、Zガンダムや百式がキュベレイヤー・0といつてニュータイプ用機と戦闘を繰り広げる。百式はこの戦闘にて大破(搭乗者は行方不明)。Zガンダムはジ・Oに突変を仕掛け、機体小破しながらもジ・Oを撃破している。



サイド3 (ジオン共和国)

U.C.0089.01 サイド3最終決戦

ハーマン・カーン率いるネオ・ジオンと、ハーマンに反旗を翻したグレミー・トトの軍勢、そしてエウゴが入り乱れて戦った第一次ネオ・ジオン戦争末期。グレミーはブルーザーの搭乗するクイーン・マンサやニュータイプ驾驶员による精鋭部隊を展開。有利に戦闘を展開するに見えたが、ル・ルカのZZガンダムに虎を突かれてコクピットを狙撃。クイン・マンサもろとも戦死。ハーマンはキュベレイドでジニーのZZガンダムと「一騎打ち」を行う。ZZガンダムの合体機構を使ったトリッキーな戦法や、バイオセンサーの能力により、ジニーはハーマンとの戦闘を勝利した。



サイド7 グリーン・ノア1&2

U.C.0087.03.02 ガンダムMK-II奪取作戦

サイド7のコロニー、グリーン・ノア2はティターンズによって軍事基地化が進められ、新型MSであるガンダムMK-IIが行われていた。そのグリーン・ノア2の様子を偵察に来ていたクワトロ・バジーナ率いる3機のリック・ディアスで構成されたアガマのMS隊は、任務中にこの試験現場に遭遇。ティターンズの新戦機であるガンダムMK-IIの奪取を計画する。コロニー内外では両軍による戦闘が行われたが、民間人の少年カミーユ・ビダンの助力もあり、奪取計画は成功した。



↑奥くまで進み込んだガンダムMK-II。ワープ・ドアの赤いマーク。ディアス、グリップス戦後間に受けられた。おけるMSは、初期MSと同様の戦いが繰り広げられた。

旧サイド5 インダストリアル7

U.C.0096 ラプラスの箱争奪戦

開ければ地球連邦の存在を知らかねないという、「ラプラスの箱」。ピスト財団の現当主、カーディアス・ビストはインダストリアルにおいて、その箱の運となる存在、ユニコーン・ガンダムの調達に関する会談を「袖付き」のガランシェール様と行う。しかしその会談を察知した連邦軍はロンド・ベル様(エコーズ)を派遣、ガランシェール様のMSと戦闘になる。コロニー内部ではリセルとガランシェール様のクシャトリヤの戦闘により多大な被害が出た他、カーディアス・ビストも混乱した状況の中で死んでしまった。



↑クシャトリヤとリセルの激しい戦闘。絶対的な性能をそれはほど重視していないリセルは一対一では不利であった。



[フィフス・ルナ]

U.C.0093.03.04 フィフス・ルナ攻防戦

新生ネオ・ジオンを率い、地球の人類を強制的に宇宙に上げるための「地球寒冷化作戦」を行なうシャア・アズナブル。その手始めとして小惑星フィフス・ルナを地球に落とさせる作戦が実行される。作戦にはギュネイ・ガスのヤクト・ドーガが参加しており、フィフス・ルナの推進器を破壊し落下を阻止しようとする。ロンド・ベルのアムロ・レイのリ・ガズィとの戦闘が繰り広げられた。アムロのリ・ガズィは性能差をおしてヤクト・ドーガを追いつめるが、シャアがザビーで攻撃し、形態は逆転。結局、フィフス・ルナの落下阻止は失敗し、落下地点となったチベット、ラサを中心には大きな被害が出る。



▲ザビーに搭乗して対戦したシャアには「おもちゃ」と形容されてしまったり、ガズィ。ヤクト・ドーガに対しては有利に戦えたのだが……。

[大気圏内]

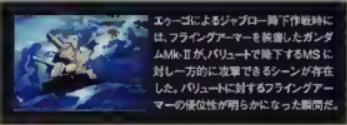
U.C.0087 & U.C.0088

衛星軌道からの降下は地球上の拠点へ直接兵力を投下できる有力な作戦ではあるが、降下の直前に全く無防備になるとなど危険性も高い。Ζガンダムはこのような降下作戦に対し有効な兵器として開発されたが、実際に想定されていた程大気圏突入が必要とされる面面はなかった。しかし、大気圏突入装置を持たぬまま大気圏に落としたMSを救助するためなどに、Ζガンダムの大気圏突入能力が役立っている。また、ZZガンダムが登場している第一次ネオ・ジオン戦争時でも、衛星軌道での戦闘にはΖガンダムの方がZZガンダムより適しているとして重用されることがあった。



▲ハンブルビの毒ヘビ攻撃により地盤に落とした百式をΖガンダムが機体上面に駐せ、無事降下したことあった。

▲第一次ネオ・ジオン戦争においても、キュベレイ Mk IIとΖガンダムがサルベージし地球へ降下している。



エーゴによるジャブロ二階下作戦時にエーゴによるジャブロ二階下作戦時には、フランクアーマーを装備したガンダムMk IIが、パリードで降下するMSに対し一方的に攻撃できるシーンが存在した。パリードに対するフランクアーマーの優位性が明らかになった瞬間だ。

[アクシズ]

U.C.0093.03.12 アクシズ落下阻止戦

フィフス・ルナに次いでさくらアクシズを地球に落下させる作戦をとったシャア。しかしロンド・ベル隊はその動きを察知し、阻止するためにアクシズを破壊しようとする。アムロのΖガンダムとシャアのザビーはアクシズ周辺で一騎打ちを行い勝負するも、アクシズは破壊作戦時の爆発の威力が強すぎ地理に落下をはじめ。これを防ぐためようとしたアムロのΖガンダムのサイコフレームが共振し、アクシズ・ショックと呼ばれる現象が発生。アクシズは落下軌道からそれるという奇跡が起きた。



▲ザビーとΖガンダム、共にファンネルを装備したハイエンド魔同士の対決。最終的に火弾砲で勝負がつくという意外な結果になった。

[アフリカ大陸]

U.C.0088.08 ~ ネオ・ジオン進撃戦

地球連邦政府の首都があったダカールに、ネオ・ジオンが降下、これを制圧した。アーガマ隊はカラバと共に脅しつづ、アーガマ、ガンダムチームの二手に分かれネオ・ジオンを撃撃する作戦となる。その迂回の際に、ガンダムチームは砂漠を拠点とするジオン公国従軍や、アフリカ解放を目指す黒の部隊と戦っている。最新MS対旧式MSの改修機という、珍しい戦いが行われた。



▲Ζガンダムは、海中の戦闘も行った。至近距離での戦闘の爆発で断る装甲により、水圧もなる程度吸収する様子。

▲砂漠にてΖガンダムチーム。敵の地の利を活かした戦術により劣勢を強いられることもあった。また、砂漠の砂塵は堅固の盾だった。



太平洋上高高度 ガルダ

U.C.0096 ガルダ機上攻防戦

ミネバをのせたガルダと、そこに合流すべく運ばれてきたユニコーンガンダム。しかし事前のブライトによる捲回により、ユニコーンガンダムはガラシユール隊と共に、ミネバ（とマリー）が救出作戦を展開。これに応戦する形でパンシィが起動し、ユニコーンガンダムの兄弟対決がガルダ機上で行われた。戦闘後、ガルダから離脱したガラシユール隊一行はユニコーンガンダムの力を借りて宇宙へ上がり、ネル・アーガマと合流した。



▲機動の特殊兵装を持つパンシィ。空間機動能力もパンシィの方が優れており、状況としては不利であった。



▲サイコフレームの力を最大限に引き出すことにより、底船一隻を引き上げるほどのパワーを発揮。アクロス、ショックを彷彿とさせる光がユニコーンガンダムを包んだ。

過去におけるトリンントン基地での戦闘

U.C.0096のラプラス戦争以前にも、U.C.0083には潜入されていた機師頭とガンダム試作2号機がジオン公国陸軍によって奪取されるという事件がおきており、ガンダム試作1号機とアルビオン隊がこれを追撃。アナハイム・エレクトロニクス社の新規ガンダム開発が戦争状況に、同社およびジオン公国陸軍にとって、トリンントン基地は因縁の地から始めていよいよ。



オーストラリア 連邦軍トリンントン基地

U.C.0096 旧ジオン軍残党襲撃

ラプラスの箱を開ける「鍵」であるユニコーンガンダムが指定した座標が連邦軍トリンントン基地であったため、ジオン公国残党軍はトリンントンおよび沿岸基地の襲撃（隠匿）を計画。MAシャンプロを中心とした部隊がトリンントンに上陸したが、サイコミュの暴走からシャンプロは市街地において破壊の限りを尽す。それを止めるため上空から降下したユニコーンガンダムのバーナージは、シャンプロと対峙、MAパイロットであるロビ・ガーベイを説得しようとするも失敗。最終的にはデルタプラスの放ったビーム・マグナムによりシャンプロは活動を停止した。



▲シャンプロとユニコーンガンダムに搭載されたサイコミュが共撃し、サイコフィールドが形成された。



▲デルタプラスはサブ・フライト・システムとしてユニコーンガンダムを駆せ共撃。シャンプロに止めの一撃を放ったのもデルタプラスだった。



▲トライスターが乗るジェスタ。ユニコーンガンダムの撃破を目的に開発されたが、シャンプロとユニコーンガンダムの戦いには読み入れない様子だった。



▲時代的には旧式MSではあるが、トリンントン基地配備のネモは、ジオン公国残党軍のMS（こちらも旧式ではあるが）を相手に応戦した。

Z計画の実像

「可変機構を持つMS」であるΖガンダムをはじめとして、既存のMSとは異なる「Ζ」セブトを持つ機体が作られたΖ計画。甚間でいわれるような、Ζガンダムを開発するためだけの計画なのかな?」このMS開発計画の本当の目的とは何だったのだろうか。

MSがもつ数多の可能性を探るためのプラン・Z計画

IIを収穫、解析してからである。

度の高い可変機構に加え、単独でオプション装備無しでの大気突入を可能

とする点が挙げられる。しかしこの能
力、特に単機での大気圏を突破できる

も転用する」という手法は、一年戦争における連邦軍が推し進めていたMX

ZBLANS ANAHEIM ELECTRONICS 028

反ディターンズ)組織であるエウーネーとの共同によって進められたビルディング開発プランだ。Z計画の実質的スタートラインは、クフトロ・バジ

多様な「ガンダム」を開発する、という表面的な部分はともかく、最終的な目的は今ひとつ不明である。当初計画された「オガソウジ」はリック・ディアコフのアシ

ウーゴが、地球を本拠とするティターンズ（地球連邦政府）と戦う際に必要だったとしてもある。その後、リック・ディアス、百式

A社は、Z計画によってRX計画と同じ道筋をたどることで、自社のMS開発技術のノウハウを歴史や理論ではなく、血肉としてようとしたのかも

つてMSの装甲が堅牢になつただけではなく、機体を構成するフレーム材質に応用することで、その剛性が向上した。その結果、ムーバブル・フレームと呼ばれる関節部の可動範囲が大きく自由度の高いフレームが実現され、最終的には機体そのものに変形機能を持たせる機構へと発展した。なお、ムーバブルは、Z計画は、明確な到達点を

よう見えるが、実際にはそうではない。話は簡単で、Z計画とは最新の技術を使いMSの様々な可能性を切り拓

エガンを生み出すにいたる、遠大な
MS開発の筋道における最初の一歩で
あつた、ともいえるだろう。

Z計画における その成果と実態

リック・ディアス

シグマ



当初は、 γ ガンダム（開発用コードネーム）として開発される。新素材であるガラスリヤム γ 合金の、装甲材としての可能性を追求したが、ムーバブル・フレーム技術は未完成。U.C.0083年で開発されたガンダム試作2号機のフレキシブルスラスターによる機動を重視しない、翼翼によるAMBAC制御を目的としたバインダーを装備する。

百式

デルタ



当初は δ ガンダムとして開発される。ビーム全盛時代の防御方法として、軽量化による運動性の向上とビーム・コーティングという課題にトライ。バイオニア技術はさらに昇華され、完全に慣性制御のみを行う装置となった。また、後年になると可変機として計画されながら変更を全機にされた「可変MSとしての δ ガンダム」を、完成したムーバブル・フレーム技術によって実現。後にデルタプラスが開発。

Zガンダム

ゼータ



完成したムーバブル・フレームによる変形機構をもつ可変MS。単機での大気圏突破という特殊な機能と、MSJの高い戦闘能力という昔の機能を併せ持つ。後に様々な形で量産機や派生機の開発計画が試みられるが、どれも決算打ちはならなかった。後年になると一部可変という特殊なり・ガズィに引き継がれ、可変MSのリゼルへと統合されていくことに。その後の開発系譜は途絶えることになる。



ZZガンダム

シーザー



Sガンダムと共に、狹義の意味ではZ計画によって開発された機体ではない。だが、新たなコンセプトを追求し、新機軸の合体可変機として誕生している。機能を究極まで突き詰めるという姿勢は、AE社がMS開発ノウハウを得るために不可欠だった。ただ、アイデアとしては早速で、技術的にも「早すぎた」観が否めず、本格的な後継などは存在しない。開発コードは θ ガンダムであった。

Sガンダム

イオク



当初は「 ζ 」ガンダムとして開発が進められていた。ZZガンダムと同じような合体可変機ではあるが、基礎となるコンセプトは異なる。オプション装備による強化案の実現ともいえるが、その後の展開はなく、一代限りのMSになった。



主なパイロット

クワトロ・バジーナ

エウゴのメンバーとして活動する、シャア・アズナブルの彼の妻。赤い彗星時代を彷彿とさせる赤いリック・ディアスに産業。



アボリー・ペイ

一年戦争の頃から活動を共にしているシャアの部下。高いリック・ディアスパイロットとして活躍。ブラン・ブルダーカのアッシャーに撃墜される。



ロベルト

アボリーとともにアーガマ族のリック・ディアスパイロットとして活躍。ブラン・ブルダーカのアッシャーに撃墜される。



◆1 頭部：既存のMSと異なり、面部にコクピットをもつ。頭部内のレイアウトの自由度を先に確保し思われる。今後、コクピットは脱出ボタンとしても機能する。

◆2 バインダー：AMBACによって機能を行なための、リック・ディアス（および砲式）に特徴的な装置。下面にはスラスターが実装されている。

◆3 ランドセル：通常のMSのようないわゆる、實戦用にビーム、ピストル（ナビーム・サーベル）やクレイ・バズーカ用のラックとなっている。なお、スラスターは腰部分に配置。

◆4 腕部形状：ざんぐりとした招き手公認系の腕部がうかがえるシルエットだが、ガンダリウム合金製の腕部が用いられる。腕部などの装甲は頭部に比べ軽量。

◆5 腿甲：アクシズの冶金技術で生まれたガンダリウム合金製脚部をAE社が発展させたガンダリウムY合金が用いられる。脚部などの装甲は頭部に比べ軽量。

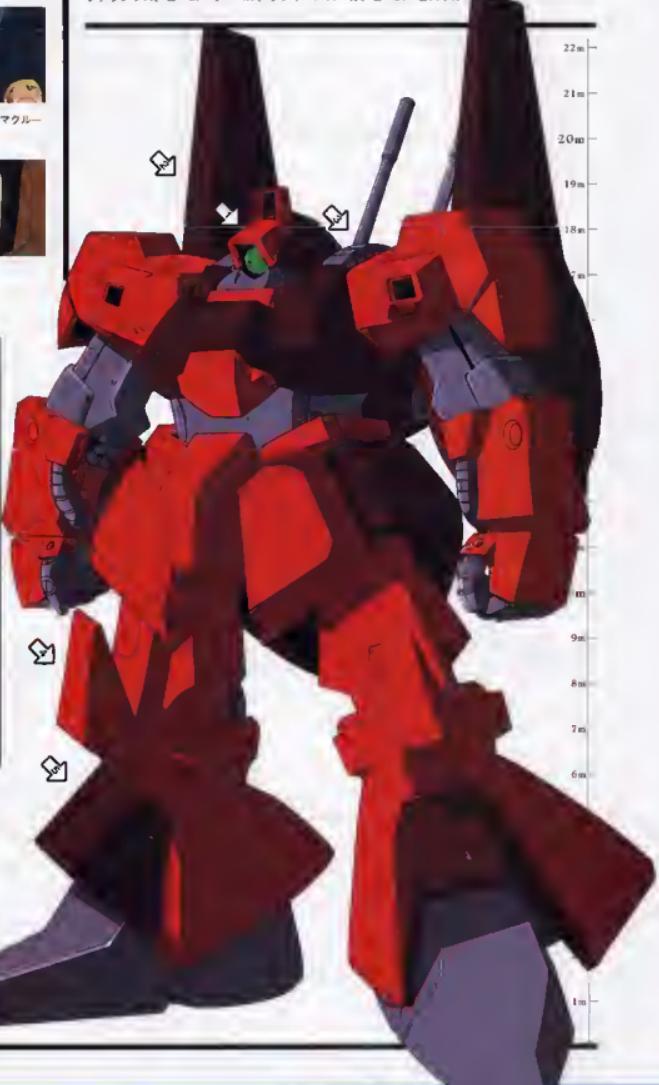
RICK DIAS

RMS-099

リック・ディアス

Spec

●頭頂高：18.7m ●本体重量：32.2t ●全備重量：54.7t ●ジェネレーター出力：1,833kW ●スラスター総推力：74,800kg ●センサー有効半径：11,500m ●装甲材質：ガンダリウム合金 ●武装：バルカン・ファランクス、ビーム・サーベル、クレイ・バズーカ、ビーム・ピストル



新世代スタンダードMS?

アナハイム・エレクトロニクス(ANE)社が開発したMS。クワトロ・バジニアことシャア・アズナブルがアクシスから持ちこんだガンダム(ヤ)合金の精錬技術や、連邦軍のみならずスペーントークの国家・組織全般にMSを供給するANE社における、「旧ジオン公国系エンジニアの設計から、外見はMS-09ドムを思わせるフォルムを持つ(当初はYガンダムという名前がつけられる予定だったが、名称にそぐわないルックスであったためリック・ディアスになったとされる。これについては諸説ある)。ANE社と旧ジオン公国系の関係性が窺える機体でもある。本機の大きな特徴としては、まず方角リリュウム合金が装甲として使用されていることが挙げられる。さらに、本機は材質以外にもスペードアーマーやリアクティブ・アーマーといった装甲の構造による強度向上が図られている。ビーム兵装全盛となりつつある時代において、装甲にこだわった希少なMS(ただし、実戦においてはやはりビーム兵装の前にはそれほど有意義な工夫とは言えなかった)。なお、これだけ本機を持つ本機だが、ガンダリウム合金の使用により、旧機体に比べ非常に軽量で、運動性も高い。

また、ガンダム試作2号機に通じる構造として、バイインダーを装備しているが、ガンダム試作2号機と異なり、大型スラスターは内蔵していない。バインダー接続部の強度の問題や、プロペラ・消費量の増大といったデメリットと比較し、本機の重量と想定される用途であるならAMBACを中心とした機能を持たせるのみで充分、という開発陣の結論かもしれない。

リック・ディアスは計画段階ではYガンダムであり、Z計画の起点となつたMSである。しかし、直接的にはZガンダムと関係はない。あくまでANE社の「(Y)ガンダム試作2号機開発に間わった」エンジニアが、エウーゴに要求された対艦・対MS戦闘用MSとしての要求を満たす汎用機として、當時最新のエジンアーリングと設計思想において作り上げた機体だ。Z計画の結果、ひいてはANE社がU.C.0080s-0090年代にかけて様々なMSを開発し、最終的に行き着いた先はジエガーンとなる。だが、ジエガーンも製造時期のリック・ディアス同様、汎用ながら高い性能を持つ量産MSである。

Z計画の起点と終点のMSが用途・性質として近いものになるのは偶然ではなく、ANE社が求めたものは、結局のところ「理屈の高性機能MS」だったことの証明といえるのではないだろうか。



◆ 設定画はP106へ





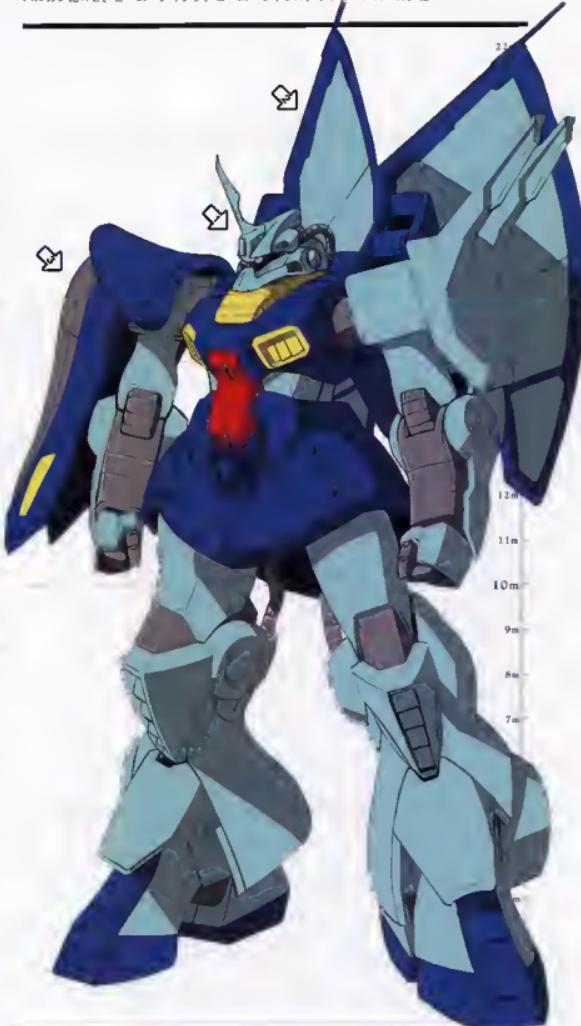
D I J E H

▶ MSK-008

ディジエ

Spec

頭頂高: 18.4m ①本体質量: 33.9t ②全備質量: 51.8t ③ジェネレーター出力: 1,892kW ④スラスター純推力: 74,000kg ⑤センサー有効半径: 11,700m ⑥装甲材質: ガンダリウム合金 ⑦武装: パルカン砲×2、ビーム・ナギナタ、ビーム・ライフル、クレイ・バズーカ、他



リック・ディアスを陸戦用に向けて再設計
連邦軍のジャブロー基地への降下作戦を展開したエウーゴが、宇宙へ帰る際、戦局の悪化もあり運搬できないMSが多数地上に残された。これらのMSが地球圏を活動の場とするエウゴの支援組織のカラハへと引き渡された。その隸属たるMS-099リック・ディアス（アボリー機）を、カラ

バが地上戦仕様に最適化したのがMSK-008ディジエだ。スペック面はリック・ディアスに比べジェネレーター出力が若干向上し、スラスター推力が約20%高い。これはMS単体で大気圏内を飛行するための改善ではなく、機動性の向上を狙つたものだろう。MSは地球圏を活動の場とするエウゴの支援組織のカラハへと引き渡された。しかしディジエではスペック以上に、外見の変化が大きい。蝶の羽のような

特徴的な背中のフィンは放熱（＝冷却）効率を高め、サブ・フライ特・システム搭乗時、一種の整流板として働き、安定性を高める効果もあると見られる。宇宙でこそ意義のある装備のバインダーを、サブ・フライ特・システムを多用する地上用MSに向けて再設計したデバイスといえよう。実戦においてはアムロ・レイが搭乗しており、本来はアムロ専用機としてガンダムタイプの頭部を採用予定だったという説もある。

→1 全体的な外観イメージ。肩に頭部の形状などを旧ジオン公国軍のゲルググを彷彿とさせる。リック・ディアス同様、コクピットは頭部に位置。

→2 リック・ディアスのバインダーに替わり、特徴的なフィンを背面に備える。

→3 右腕全体を覆うカバーのようなシールドを装備。左肩部アーマーはミサイルラック。

リック・ディアスや百式と共にクレイ・バズーカ、ビーム・ライフルなど、武装は標準的。なお、ビーム・ナギナタを装備。

◆ 設定画はP107へ

RMS-099

の系譜

●派生型試作機

MSA-099-2

リック・ディアスⅡ

脚部のスラスターが増設され、バインダーも大型化し機動性を向上させたモデル。グリフォン戦役後期の高機動MSに対する目的で開発されたが、試作機が開発されたのみで実戦投入はなされていない。



●派生型高機動機

RMS-099B

シュツルム・ディアス

リック・ディアスのバインダーを大型化し、ビーム・カannonを内蔵させた武装強化型。スラスターも強化され、強襲型と分類できる。少數が製造されたがグリフォン戦役では使用されるところなく、後に複数してネオ・ジオンで運用された。

●派生型陸戦用機

MSK-008

ティジエ

エウーネが地上に残していったリック・ディアスを、カラバ重力下での運用に適するよう改進したモデル。リック・ディアスと同じく旧ジオン系の技術者が改修にあたっており、連邦軍のMSとは離れた外見をしている。



●試作機

RX-098

プロトタイプ リック・ディアス

アナハイム・エレクトロニクス社が独自開発していたリック・ディアス。装備的にはガンダリウム合金は使われておらず、重量増やジェネレーター出力の不足などに悩まされていた。後にノウハウを得てリック・ディアスが開発。



RMS-099

リック・ディアス

不完全ながらムーバブル・フレームの構造や、ガンダリウム合金の採用。さらにバインダーによる機動など新技術を盛り込んで開発されたMS。特にグリップス戦役において活躍。



●その後

●直系の後継機なし
●技術面などはMSA-003ネモなどへ
フィードバック

後のMSの礎となつた
リック・ディアスファミリー

リック・ディアスはアナハイム・エレクトロニクス社（AE社）の独自設計によるMSだが、ムーバブル・フレームを本格的に採用する以前の機体だつた。しかしながら、ガンダリウム（Y）合金を使用し、これまでのMSに比べれば軽量なことや、バインダーを利用した新しいセンセプトなどから同時代のMSと比しても劣らない性能を持ち、少數だが量産もされている。ただし、リック・ディアスの直接の後継機としては、数種の試作機が登場しなかつた。AE社としてはより優れたムーバブル・フレームを持つMS N-00100百式 同様にRMS-108マササイやMSA-003ネモといった純然たる量産機がすでに開発されており、本機をさらに改良して派生機を積極的に開発する必要はなかつた。逆にいえば、可能性はなかつ式やネモも「後継機」といええる。これらMSの開発には、リック・ディアスの運用データが大きく役立てられているのは疑いようがない。

そういう意味では、リック・ディアスというMSの体系そのものが「試験機」という役割を担っていたともいえ

るだろう。

設定図はP107へ



主なパイロット



クワトロ・バジーナ

一年戦争時はシャア・アズナブルの名で知られたエウゴーの一人。百式は彼の搭乗を前提に調整されたとする説もある。グリップ戦役終結まで本機に搭乗していたが、最終決戦時に行方不明に機体は回収。



ピーチャ・オーレグ

ガーデムチームのメンバーとして第一次ネオ・ジオン戦争を戦ったジアン星の少年。彼以外にも仲間であるモンド・アガケなどが搭乗して出撃している。

SPEC COMPARISON

スペック比較

	MSN-00100	MSZ-006	AMX-004
全高	18.5m	19.8m	18.4m
本体重量	31.5t	28.7t	35.2t
ジェネレーター	1,850kW	2,020kW	1,820kW
スラスター推力	74,800kgf	112,500kgf	61,600kgf

◆1 ゴーグル型に見えるが、スクリーンの下にはデュアルカメラが内蔵されている。

◆2 デルタガンダムとして開拓されていたが、いわゆるランダム化ではなく独自性の高い意匠を持つ。機体の先進性を強調し、過去のイメージからの脱却を図る。

◆3 金色に輝くという、MS史上に手類を見ないカラーリング。これは前ビームコーディングの影響といわれる。戦場では目立つ存在だが、パイロットの重量で差別化が切った。

◆4 リック・ディフェスと比べて大型化され、推進器も内蔵しているハイランサー。無精なANBACを行なうためだけの装備だ。重量増をガンダリウム合金の恩恵で、推進器を高効率化・全備重量との差を少ないと、ゆえに推進器の構造変化による影響を受けない。パイロット式を選択したのかかもしれない。

HYAKU-SHIKI

▶MSN-00100

百式

Spec

①全高: 18.5m ②本体重量: 31.5t ③全備重量: 54.5t ④ジェネレーター出力: 1,850kW

⑤スラスター総推力: 74,800kgf ⑥センサー有効半径: 11,200m ⑦装甲材質: ガンダリウム合金

⑧武装: パルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、クレイ・バズーカ



ビーム全盛時代におけるMSのあり方を求める

リック・ディアイスを開発したアバーム・エレクトロニクス（AEE）社が、開発したガンドームームーバーパル・フレームを解析し、そのデータをM.S.開発主任がデータベースさせたM.S.開発主任はM・ナガノ博士であり、百式というネーミングも「百年保つように」という博士の願いが込められている。

ジエネレーター出力や推力といったスペックに大きな違いはないが、機体のコンセプトには異なる部分もある。ある程度装甲にも配慮したリック・ディアスとは異なり、ガンダリウム合金製の装甲を持つものの、脚部などバイタル・パート以外の部分は潔いほどに装甲を排除した。これはビーム戦斧に対

A社が運用において百式をどういったかは明確な面もあるが(実績的にはオーラー、マニエーダー、ムーバブル、フレームを用いる)、ムーバブル、フレームが全盛となる時代におけるビーム兵装が全盛となる時代におけるMSのあり方を模索した試験機、と位置づけることはできるだろう。

しては装甲で防ぐのではなく運動性を向上させて回避するというコンセプトによるもの。フレームが露出している脚部は、軽量化を追求した結果だ。また、補助的に耐久性を高めるため、車体下部に強化板が装着されている。全車に輝く機体カラーライはそのコーティングによるものである。(ただし実際の効果はあまり高くなかった様子)。

35000

直木の機械性から見るMS開発

百式は開発時からエウゴのパイロットであるクワトロ・バジーナが搭乗することが想定され、高い運動性と引き換にバーナー装備らしい強襲性といわれる。実際には個人のためにMSを開発するというのではなく、戦闘力、技量の高いパイロットを訓練し積んで搭乗するMSとして設計されていた。と考えるのが然だらう。なお、グリーン戦役で大破した百式は、修復の際、この強襲性も改善されたよう、軍用MS搭乗員のないジアンク星の少年でも手素に操縦できた。百式は改良後に量産化も計画されており、尖ったコンセプトモデルを生産モデルとして量産化するという、RX-78ガンダムの頃から見られたスキームが想定されている。



当時のエゥーゴで用いられていた標準的な仕様のピーム・ライフル。ディジエなども使用していた。後部の半円状の部分はエネルギー・パック。

クレイ・バズーカ

リック・ディアスと同型の口径300mmの実体弾バズーカ。基本的に対戦戦闘などに向いた兵装だが、多種な弾頭が用意され散弾なども使用可能。



メガ・バズーカ・ランチャー

MSの全長はどのサイズを説く、巨大なビーム武装(それゆえ独自にスマスターを持つ)、超長距離爆撃により戦闘爆弾やMS配給車一網打尽にする。連射武器にはエネルギーも外部供給しなければならぬ(旧式のMSなどでも供給自体は可)、運用には複雑な面もある。



0100の系譜

ガンダムMk-II強奪により
ムーバブル・フレームの技術が完成

●可変実作機

δ（デルタ）ガンダム

「Z計画」において当初企画されていた。ムーバブル・フレームを用いた可変MS。このMSの開発プランを変更して非可変MSの百式が生まれたため、迎のMSとなってしまった（見取り図すら存在しない）。ただし、後にデルタガンダムはシミュレーションを用いた開発が行われている。

MSN-00100 百式

デルタガンダムの開発プランを変更し、ムーバブル・フレームを探用しながらも可変機構としたMS。グリップス戦役、第一次ネオ・ジオノ戦争で活躍した。



開発計画は 凍結

可変機構を オミット

●U.C.0090ごろ？

MSN-001 デルタガンダム

「Z計画」で作られる予定だったるガンダムを、後年に開発プランの通りに製造していたら、というシミュレーションで作られた復讐のMS（実機は存在しない）。



●その後

派生型は多いが直系の後継機はない

●可変実作機

MSN-001A1 デルタプラス

宇宙世紀0090年に開発された。百式（δガンダム）を可変MSとして再設計したMS。ラプラス戦争においてロンド・ベル隊において実戦運用された。



●可変実作機

MSN-001X デルタガンダムカイ

デルタガンダムのシミュレーション開発データとデルタプラスの実戦データを合わせて開発された。サイコ・ユニバースム「ナイトロ」を搭載している。



※U.C.0095ごろ実戦投入される

※U.C.0096ごろに実戦か？

時代、モデルを作られ続ける
試験機が作られ続ける

そもそも百式は、ベースになつたδ（デルタ）ガンダムの開発プランを、ムーバブル・フレーム技術の未成熟ゆえに変更した結果生まれた試作MSだ。そのため非可変機として開発されたが、装甲を大胆にオミットして、軽量化をはかるというコンセプトや、当時のアニメーション・エレクトロニクス社が注力しハイム・エレクトロニクス社が注力しバイオ・データ技術によって汎用性の高い高性能MSとして活躍している。

これを踏まえると百式のバリエーションは、大きく二通りに分けられる。一つは、「高性能な非可変MS」といいう要素を受け継ぎ、発展させようとした機体でMSR-100S百式改やFA-100Sフルアーマー百式改といったMSだ。

しかし、これら改良モデルの派生機は、百式の持つ尖った性能をフラットにして、より一般的な量産MSとして成立させようとして試みられていた。加えて一連の開発は、一年戦争時代から地球連邦軍、ジオン公国軍が連絡を行つてきた派生機開発の手法を、そのままではめとすらいえるものであった（フルアーマー百式改は、増加装甲の他にメガ粒子砲の装備などが行われており、ΖΖガンダムのテストべッドとしての側面もあった可能性は

MSN - 0

● 洋生型エース専用機

MSN-100S

百式改量産型

基本的に百式と同様だが、コストダウンのためかボディ形状は百式に近い。ランダムの下部スラスター・バインダーも省略された。

● 洋生型試作機

MSN-100S

百式改

百式の改良機。頭部パルスレーザー、肩部ビーム砲を新設。グリップス改修で大破した百式を復元する際、この仕様になる予定だったともいわれる。

● 洋生型陸戦用機

MSK-100S

陸戦用百式改

カラバが運用していた百式の派生機。機体各所に防塵・防水性能が施されている。武装はミサイルやグレネードなど戦闘機甲兵装が多い。

※カラバにより運用

● 洋生型増加装甲試作機

FA-100S

フルアーマー百式改

増加装甲で全身を強化した百式改。胸部にはメガ粒子砲も内蔵している。重量増を補うため、スラスターなどが大幅に強化された。



ある）。一部の機体は少数生産されたものの、結局、主力MSのような量産には至らず姿を消した。もう一つは、百式を本来の可変MSとして成立させたグループだ。U.C.0087年当時の「バブル」フレーム技術では実現できなかつたものを、後年（U.C.0090年頃と推測される）の技術によって実現させた機体群を指し、MSN-001A1デルタプラスやMSN-001Xデルタガンダムカイが該当する。ただ、デルタプラスはラプラス戦争においてロンド・ベル隊によって実戦を経験するものの、どちらも少量生産の試作機で、量産には至っていない（そもそもこれらを量産しようとしていたのが疑問だ）。また、後継機が作られ続け、長く運用されるということもなかった。結局のところ、高性能な非可変（量産）MSとしてのボジションはジエガンに、可変MSとしてのボジションはリゼルが受け持つこととなり、バインダー式の空間機動性が高いというコンセプトの百式の直接の系譜は途絶えてしまった。

「これも非可変機として生まれた百式からデルタガンダムカイまで、百式は常に試験機的な要素が強かつたということだろう。『Z計画』の完了とともに試験機たる百式が姿を消すのも、ある意味、当然の道程なのかもしれない。



主なパイロット



リディ・マーセナス

ロンド・ベル隊のMSパイロットであり、連邦議会の有力者リカルド・マーセナスの嫡子。デルタプラスに着乗し、パラオ攻撃戦やトリンントン基地防衛戦に参戦した。

スペック比較

	MSZ-009 Ζガンダム	MSN-001A1 デルタプラス	PGZ-05 リゼル
機体高	19.8m	19.6m	20.5m
本体重量	29.7t	27.2t	25.8t
ウェーブレーター	2,050kW	2,350kW	2,250kW
スラスター推力	112,600kg	92,400kg	81,500kg

→1 ウィングバイダー。首から駆動しているバイダーは、2バズル式のウィングバイダーへ進化し、MS用ではAMBACとして機能。ウェイブライダー（航行制御）では可変翼となり、大気内での運動性を確保している。なお、リゼルでは採用されていない。

→2 駆体モジュール。アナハイム・エレクトロニクス社の独自機器の多用により、この点も重量化の懸念があったとされる。ジンガムと共に強化を持っていた可変機ギヤとは対照的。

→3 スラスター配置。ウィングバイダー（青部）はデルタA1に似る。翼部のスラスターが主翼で、尻尾エンジンの配置順に近い構造。推力は大きく、サブ・ライト・システムとして駆体上面にMSを載せたまま1GTでの飛行が可能。

→4 実形機構。原型機のデルタガンダムは、当初の設計では実形機構の武装を意図していた。デルタプラスでは、それが実現された。ただ、構造などは実質的にΖガンダムに近い。

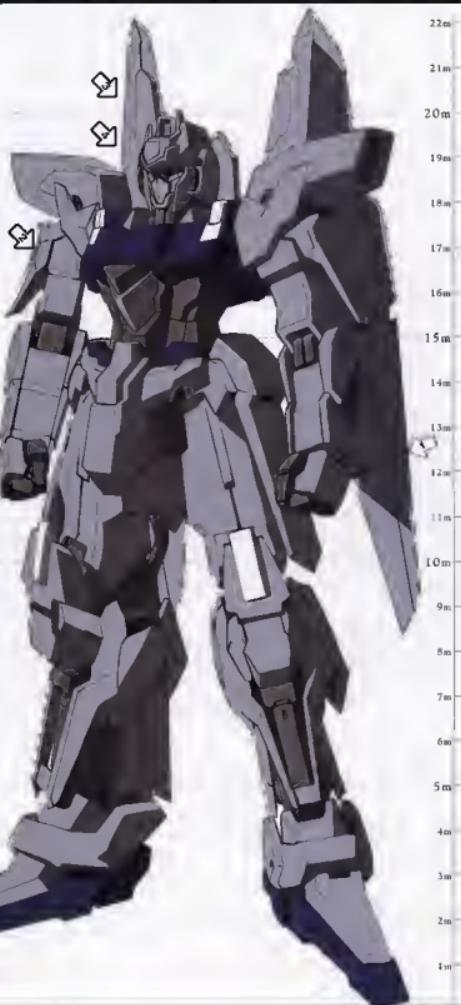
DELTAPLUS

MSN-001A1

デルタプラス

Spec

①頭頂高：19.6m ②本体重量：27.2t ③ウェーブレーター出力：2,350kW
④スラスター推力：92,400kg ⑤センサー有効半径：16,200m ⑥装甲材質：ガンダリウム合金
⑦武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、シールド、ビーム・キャノン、他



▲ウェイブライダー形



技術革新による再設計で
生まれ変わったものの……

「Z計画」における「(テルタ) ガンダム」(利式番号はMSN-001)は、当初は可変MSとして開発が予定されていた。しかしムーバブル・フレーム技術の未成熟から、不可変機へプランが変更され、MSN-001は百式で開発されることになった。その後百式をベースにして、Z計画で

いる。特に大気圧突入能力は「コスト」と必要性を天秤にかけ、オミットされることが多かった。しかし本機では大気圧突入能力が付与され、高い推力によつて、 $1/4$ G下での運動能力の確保といったところが、この「ガンダム」と同様の「コンセプト」および能力が実現されている。それでいて、 $1/2$ Gガンダムのように過度な性能を半ば無理やりに持たせる、といった設計ではなかった（当時のA/E社なら、そういったことも技術的に可能だつたはずだ）。

つまりデルタプラスは、旧来のハイエンド機の性能を、進歩した技術で実

の開発時期には、すでに第一次ネオ・ジオン戦争も終結しており、先のΖ計画における成果として、MSZ-00

年に完成した。

「これまでZガソルダム後継を目指したZ-008 ZIIなどの派生機は、Zガソルダムが持っていた能力を分解して取捨選択し採用する方式で開発されて

試作機のロールアウトから6年もの間、本機が活躍する機会がなかったという事実は、それを如実に物語つてゐるのではないだろうか。

デルタブランチとロンドンベル隊

試験機であるデルタプラスが実戦へ投入されたのは、開発から6年も経過したU.C.0096年のラ・ブ拉斯戦争時の(UC.0093年の第二回ネオ・ジオン・オペレーションの際に使用されなかったようだ)。配備先是連邦軍の外郭団体、ロンド・ペル隊だった。同隊は、一種の独自裁量権が与えられた連邦軍隊ゆえ、本部のような試験機や、特殊機などへの補給や整備をまかなければ下地があったこと、加えて機動性の軽い力でオルタが配備の理由として挙げられる。黒い楕の性格上、マルチアーロの高性能能率で、単体で大気圏再突入可能で活躍の場を違はない汎用性の高さは、地球圏と宇宙の双方で行動するロンド・ペルにうってつけだったのだろう。



← 設定画はP119へ

デルタプラスの搭載兵器

頭部バルカン砲
防空などに使用される60mm
バルカン砲。MSではごく標
識的な兵器



ピーム・ライフル

鉄身の長いビーム、ライフルはリゼルの流用、ウェイブライダー時でも機体にマウント用ホル



シールド

先端にはビーム・キャノンを一門備え、2連装グレネード・ランチャーと、ビーム・サーベルを収納する、ウェイブライダー時のメインウェポンになるため、防衛装置というよりは変形用のサブユニットといえる。



ピーム・サーベル

シールドに2本収納されている近接格闘用の兵装。ビーム・サーベルの発信器には照射角可変機構が内蔵され、ビーム・ガンとしても機能する。

携行する武装や装備などは、Ζプラス系の機体と同様の構成である。ゆえに可変MSの要目は満たしているといえるだろう。グレネードを実装している点はΖガンダムを彷彿とさせ、時代的にも後継の機体といううのが頷ける。

MSZ-006

Zガンダム

Space

●頭頂高：19.8m ●本体重量：28.7t ●全備重量：62.3t ●ジェネレーター出力：2,020kW
●スラスター推進力：112,600kg ●センサー有効半径：14,000m ●装甲材質：ガンダリウム合金
●武装：バルカン砲×2、ビーム、サーベル×2、ビーム、ライフル、ハイバー、メガ、ランチャーゲレネード、ランチャーハーク

カミニース・ビダン

カミーユ・

Zガンダムのパイロットであり、開発時には可変機構などのアイデアを提供。高いニュータイプ能力を持ち、本機に内蔵されたバイオセンサーの力を最大限に引き出した。



ルー・ルカ

第一次ネオ・ジオン戦争でZガンダムの主パイロットを務めた、エウゴの志願兵でありガンダムチームの一員。チーム内で唯一の正規軍人であり、アラミドの仲間たち。



スペック比較

	RX-78 ガンダム	MSZ-006 Ζガンダム	PMX-003 ジ・O
全高	18.5m	19.8m	24.8m
本体重量	33.4t	28.7t	57.3t
ミニレーティング	1,930t/kW	2,020t/kW	1,540t/kW
スラスター推進力	81,200kgf	112,600kgf	135,400kgf

→1 装飾：名称は「ガンダム」だが、これまでの「ガンダム」と名付けられたMSとは若干童貞を異にする頭部。V字アンテナは4本になり、変形の際は折りたたまれる。

＊2 ムーバブル・フレーム：機体を構成するムーバブル・フレームにより、ウェイブライダーへの複雑な変形も可能となっている。各部関節の可動域も広い。

◆3 フライングアーマー ロングテールスタビライザー：フライングアーマーは大気量吸入を可能とするユニットで、任意にバージできる。ロングテールスタビライザーは、AMBACによって機体の姿勢を制御する（スラスターも内蔵）。

■ウェイブライダー：機体各部には大気圧実験のために耐熱処理が施される。また、複数の可変機構を持ちながらも重量は非可変であるリック・ディアスや百式より1割強ほど軽く推力/重量比に優れる。いずれもアナハイム・エクストリートニクス社で造られたノウハウが活かされている。



大気圏突入が可能な 究極の強襲用MS

アナハイム・エレクトロニクス社が開発し、エウーゴに供与した、実戦に耐えうる完成度を持つ初の可変MS。可変MSは変形することにより各スターのベクトルを得ることを目的としており、グリーブス戦役時には陣営を問わず多くの可変MSが作られた。

エガンダムの場合は、オプション装備なしでの単体による大気圏突入能力を付与されているのが大きな特徴だ。エウーゴは地球連邦軍(ディターノズ)との内紛状態にある。宇宙を活動の中心とするエウーゴには、地球に降りし敵対点を制圧するという必要性が生じるのは自明だ。本機は、そういう事態から一年戦争でジオン公国軍が多用し、高い効果を挙げた宇宙からの空挺降下をMS単体で可能にした。

エガンダムは、降下作戦において、率先して大気圏内に突入し、味方MS部隊の援護をしつつ、敵の降下部隊を殲滅するという目的において開発されたMSといえる。対するディターノズおよび地球連邦軍は、こうした降下部隊に対抗すべく、ORX-005ギヤブランやN.R.X.-04アッシュマーといった迎撃用可変MAを開発していた。本機は特殊機であり、究極の強襲用

MSといつていい。通常のMSが装備するランダムセルに代わり、フライングアーマーと呼ばれる大気圏突入用のユニットを装備。このユニットで大気圏突入時に機体下部の圧縮された大気を受け止め、大気圏突入を可能にする。このため機能上、エガンダムの飛行形態はウェイブライダー(WR)と呼ばれる。

実戦においては、開発時に想定されていたような陸下作戦がエガンダムの実戦投入後は行わらず、大気圏突入の能力が活かされる機会は少なかった。

しかし、可変機ならではの直線方向の機動性や、MS形態において高次元でバランスのとれた空間機動性能、そしてバイロットであったカミーユ・ビダムの能力により、アーダマの中核的な戦力となり活躍を見せる。結局のこと、MSNにおいて重要なMSだ。エガンダムは特殊なコンセプトより、高い機動性、運動性と火力であり、エガンダムは大気圏突入可能型という機能を除いても、その2つを満たしている。時代の要請に応えた機体といえる。

同じくシンプルに運動性と火力を追求し、さらにいえばこちらは可変機でしかない。グリーブス戦役において対MS最強の呼び声もあるPXM-003ジ・0と本機が死闘を繰り広げたところなのも、まったくの偶然ではないだろう。

Zガンダムとサイコミュ装備

ニュータイプの力を利用するサイコミュ装備の、MSへの実装には満足だった地球連邦軍だが、アナハイム・エレクトロニクス(AE)社では機体制御にサイコミュを用いるバイオセンサーを開発。Zガンダム(およびMSZ-006ZZガンダム)に実装している。多様なMSを試験的に開発する以上、サイコミュ技術の開発もまた絶えて進ることのできない要素だろう。それでもニュータイプ専用MSとしてZガンダムをパッケージングしなかったのは、専用とすることで流CAMSとしての可能性を狭めてしまうことや、AE社による連邦軍への配慮があつたのかもしれない(もしくは、実験的要素が強い可能性も)。

なお、U.C.0093年にロールアウトした連邦軍初のニュータイプ専用機である、RX-93vガンダムに搭載されているサイコフレームは、ネオ・オオクンからも譲られたものが、それを短時間で実装できたのも、こうした密なサイコミュ研究の成果があればこそ、ではないだろうか。



◆グリーブス戦役末期の機體では、度々バイオセンサーによる効果を発揮したと思われる戦闘を見たエウーゴの機体として活躍したZガンダムだ。が、グリーブス戦役のなうな現象を引き起こす場面は見られなかった。搭乗者たちは、通常では考えられない不可解な現象を引き起こしている。



◆第一次ネオ・ジオン戦争勃発エウーゴの機体として活躍したZガンダムだが、グリーブス戦役のなうな現象を引き起こす場面は見られなかった。搭乗者たちは、通常では考えられない不可解な現象を引き起こしている。

武器・装備

ビーム・ライフル

百式のビーム・ライフルと比べ約2倍の出力を持ち、大型のビーム・ライフル。エネルギー・パック方式で駆動部分が伸縮する。出口からビームを形成し、銃剣として白兵戦も行える。

ハイ・メガ・ランチャー

ジェネレーターに内蔵している拡張型のメガ粒子砲。全長はZガンダムの約1.5倍程度と巨大で制御用のスラスターを内蔵。ビーム・ライフルと比べ被弾力は大きいが取り回しが難しい兵装。

2連装グレネード・ランチャー

両腕に内蔵されている実体弾兵装。ビーム・ライフルのような主兵装とはならないが、吹き飛ばす効果などに使用されることが多く、威力や破壊力もそれなりに高く有用である。

ビーム・サーベル

腹部の両サイドアーマーに装備されている。ウェイブライダー形態ではビーム・ガンとしても使用できるが、本来の用途がビーム・サーベルのためビーム砲としての威力は低め。

大気圏突入という特殊な機能を有する本機だが、武装面などはこの時代の標準的なものを装備している傾向。ただし、伸縮式のシールドなどもそれに該当する装備の一つだが、本機の場合、これを失うとウェイブライダー形態には変形できないというデメリットを抱えている。

Z

P

I

U

S

▶ MSZ-006 A 1

Zプラス (A1型)

Spec

◎頭頂高: 19.86m ◎本体重量: 36.2t ◎ジェネレーター出力: 2,070kW ◎スラスター総推力: 24,200kg ◎センサー有効半径: 10,000m
◎装甲材質: ガンダム合金 ◎武装: バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・キャノン×2、ビーム・スマートガン

主なパイロット

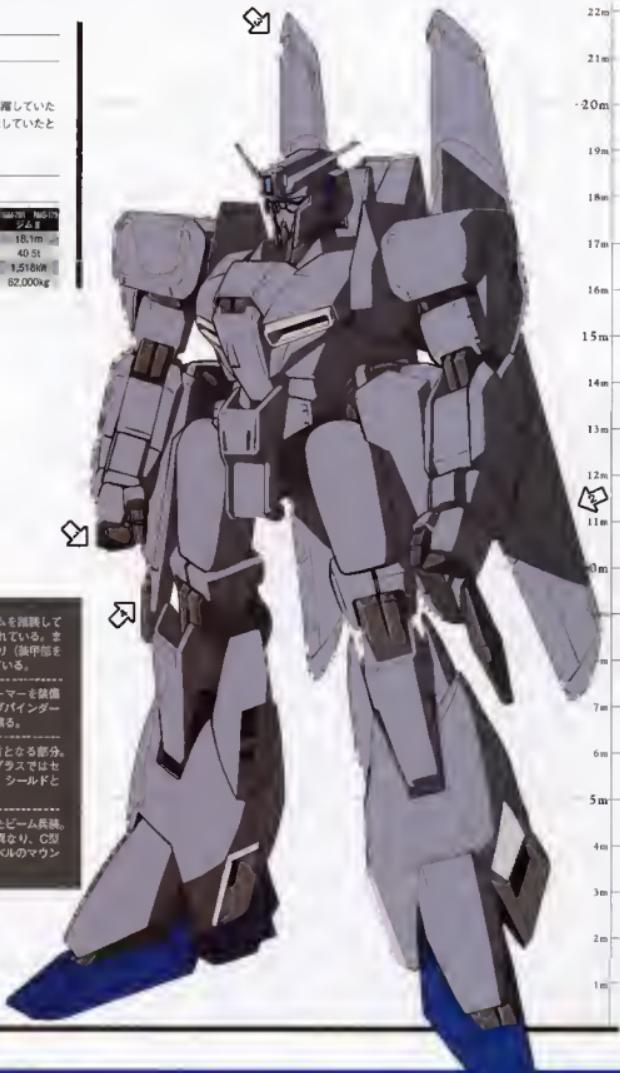
アムロ・レイ

カラバのエース・パイロットとして活躍していた彼だが、一般にはZプラスA1型に搭乗していたという。

スペック比較

	MSZ-006 Zプラス	MSZ-006A ZプラスA1型	MSZ-007 Z
◎ 頭頂高	19.8m	19.86m	18.1m
◎ 本体重量	28.7t	36.2t	40.5t
◎ ジェネレーター	2,070kW	2,070kW	1,518kW
◎ スラスター総推力	112,600kg	24,200kg	62,000kg

- ⇒ 1 構体形状。大きめにはZガンダムを踏襲しているが、腹部などを簡略化されている。また、可動部のクリアランスを大きくとり（装甲部を小さくする）、変形に適した構造としている。
- ⇒ 2 リアユニット。フライング・アーマーで武装していたZガンダムと異なり、ワイング・バイオーダーで武装。A1型の総推力はZガンダムに勝る。
- ⇒ 3 サブユニット。飛行形態で構成となる部分。Zガンダムではシールドだったが、Zプラスではセンサーなどを内蔵したユニットとなり、シールドとしては設計されていない。
- ⇒ 4 ビーム・カノン。頭部に内蔵されたビーム兵装。A型とC型ではケーブルの取り回しが異なり、C型は露出が少ない。また、ビーム・サーベルのマウントも兼ねている。



Zガンダムの持つていた 能力を抽出し最適化

MSZ-006Zガンダムは、オプションレンズでの単機大気圏突破を可能にするという限定的な用途を想定され開発されたMSだったが、飛行形態がもたらす高い機動性とMS形態でのバランスの良さ、そしてバイロットであるカミーユ・ビダンの能力によりリップス戦役では大きな戦果を挙げた。端的に述べれば「成功したMS」であり、後継機や派生機の開発が企画されるものもある意味当然といえる。

Zプラスは、そのZガンダムを元に開発された可変MSである。可変機構はZガンダムのものを踏襲しつつもより最適化（簡略化）され、信頼性が向上している。また、その他の特徴としてZプラスは細かく仕様が異なるエディルが非常に多いが、大きめに分ければA型系とC型系に分けることができる。ZプラスA1型は、カラバガアナハイム・エレクトロニクス（AE）社に発注したZガンダムの派生モデル。カラバは活動の場が地球上であるため、A1型は大気内専用の設計が図られ大気圏突入能力は備えていない。Zガンダムでは背部にフライング・アーマーを装備する構造だが、A1型（後述のC1型も基本は同様）はバインダーハー変形用サブユニット（飛行形態において

で機首となる部分）という構成。この

バインダーはMS時にはAMBACを行なうほか、飛行形態ではZガンダムより大型の可変翼に変更されている。

ただ、これらの改良は飛行形態で戦

闘機のように高度な空中戦を行うためのものではなく、MS単機での飛行による長距離攻撃を目的としたものである。つまり用途としては通常のMS十サブ・フライ・システムよりも効率的な運用が可能な状況だったと考えられる。

もう一方のC1型は、地球連邦軍がAE社に宇宙用MSとして発注、再設計を施した宇宙戦専用機。背部にスラスターが追加され、さらにバインダーにブレントタンクの増設が可能。なお、突入前に調整を行う必要はあるが、C1型は大気圏突入も行なうことができる。Zガンダムに近い機体といえるだろう。

このように見ていくと、ZプラスはZガンダムが持っていた要素を分解し、必要に応じて抽出、再設計、最適化した機体ということができる。様々な派生機が開発されたのも、要素の分解だけではなく、新しく付与する（組み合）ことによって、様々な可能性を探った結果といえる。



アウドムラとZプラス

カラバには地球各地にある支派の他に、ガルダ級アウドムラといつ特殊な「移動基地」を有している。地球を周囲で飛行を続けるアウドムラにZプラスを中心としたMS部隊を駐留させ、必要があればアウドムラで現地に向かいつつ宇宙MS部隊が発進。初動にあたるというのが、カラバが想定したZプラスの運用法だろう。Zプラスによって画がされたアウドムラの遊撃部隊はアムロ・レイが率いていたともいわれる。つまり、カラバにとってはそれだけ重要な部隊であったと見ることができる。カラバがアウドムラを有していないければZプラスは生まれなかつかもしれない。

モナZプラスのバリエーション

Zプラスにはそれぞれタイプが異なる派生機が開発されている。各タイプとも現場の要求に応じて仕様が見直され、その都度、変更されていると考えられる。

ZプラスA1 カラバが運用していたZプラスの中で、最もスタンダードなモデル。

ZプラスA2 背部にハイ・メガ粒子砲を装備した派生型。A1型から6機が製作された。

ZプラスC1 地球連邦軍が発注した宇宙用のZプラスの中ではスタンダードなモデル。

ZプラスC1/2 両部をA2型のハイ・メガ粒子砲内蔵タイプに換装したモデル。

ZプラスC4 低速道から大気圏上層部への運用に特化したモデル。Zガンダム同様のフライング・アーマーを備える。

ZプラスD 飛行形態における運動性を追求したモデル。ウイングバインダー・後端および機首サブユニットに小型のフィンを追加。さらに熱核ファンジェット・エンジンを2基追加している。

一覧には件のアムロ・レイは、Zガンダム3号機に搭乗していたとする説があるが、ZプラスA1（テスト機カラータイプ）に搭乗していたという説もある。

S Z - 0 0 6

の系譜

MSZ-006-X1~X3

試作機

プロトタイプZガンダム

ムーバブル・フレームの研究のため開発された試作機。リック・ディアスやネモの頭部を用いた、合計3機が存在した。



MSZ-006

Zガンダム

アナハイム・エレクトロニクス社のムーバブル・フレーム技術とカミーユ・ビダンのアイデアが昇華した機動可変MS。



point

ガンダムMk.Ⅲは機動とフライングアーマーの開発、カミーユ・ビダンなどのアイデアにより可変モビルスーツとして設計された。これにより単機での大気圧突入が可能。

●U.C.0093

RGZ-91

リ・ガズィ

サブ・フライ・システムと可変MSの中間的な、パック・ウェポン・システムというオプション装備で飛行形態を実現。重量はなされなかった。



point

Zガンダムと既成機とは異なる実験的部屋にある。わずか3年の間でRGZの形式ももつMSは可変機を表すものとなる。

●U.C.0096

RGZ-95

リゼル

point

これ以後は進歩軍の主力MSにおいては、可変機という系譜が主流となり完全に外れ、直系の後継機も見られない。

必要な機能とコストを
秤にかけて計画されたが……

Zガンダムは、グリップス戦役においてもっとも成功した可変MSのひとつといえる。Zガンダムの特徴を端的に述べると、変形によって推力のベクトルを揃え、高速度・高加速を得られるという点だ。フライングアーマーと呼ばれる装備を標準化することで、オプションなしで単機の大気圧突破能力を持つ点。そしてMS形態においても軽量、大パワーという機体の特性からくる、運動性・火力ともにハイレベルであるということが挙げられるだろう。

その一方で、大気圧突入の際、重要な機体の人念な耐熱処理およびその機能維持、そして複雑で製造・整備コストともに高くなる可変機としての構造、さらにはバイオセナーサーなどの搭載により、製造から運用までのトラブルでのコストは高くなってしまう問題点もあった。

Zガンダム（Z計画）の成果としての生産型（普及型）のMS開発においては、これらの問題をどう処理するか、というのが常にテーマになつていたといえる。そこには「可変機の量産化」か「高性能機の量産化」かといった取捨選択があり、それは多くの場合、可変機構を簡略化するか、廃止するといふ選択を迫られている。例えばZIIで

MSZ-006-3

Zガンダム 3号機

カラバが試験的に運用して
いた機体で、基本仕様はZ
ガンダムと同じだがオプシ
ョン装備が簡略化に用意され
ている。



M

MSZ-006C1 Zプラス(C1型)

※地球連邦軍で運用

MSZ-006A1 Zプラス(A1型)

※カラバなどで運用

開発中止

point

機体の開発自体は中止されたZIIだが
、航空戦闘機としての機動性の高
さや機器の可変機構は、リゼルなど
の開発に活かされた可能性もある。

MSZ-007

量産型Z ガンダム

ZガンダムのMS形態における
能力を一番目したプラン。そ
のため非可変機であり、西式
系の量産プランと統合するた
め計画は吸収された。



MSZ-008

Z II

宇宙空間での運用に特化され
ている。そのため大気圏再突
入および重力下での飛行能力
は持たない。可変機構はメタ
スに近い構造を持つ。



大気圏突入
能力を
排除

あれば大気圏突入能力を廃し、ZプラスA1型などでは大気圏内での飛行能
力に特化したり、あるいはリ・ガズイ
のようにバック・ウエポン・システム
を採用する、といった手法がとられた。
しかしながら、このような後継機候
補も、結局決定打にならなかつた。宇
宙世紀0080年代末～0090年代
にかけて、一定数が生産され実戦にお
いて実績を作った可変機はリゼルとい
えるが、これはZガンダムや、メタス
の影響はもちろん受けているが、基幹
となる機体は通常型であるジエガンと
いつてもいいだろう。さらに、そのリ
ゼルでさえも最終的には系譜が途絶え
ている。
その背景には、サブ・フライ・シ
ステム（汎用のフライングアーマーを
含む）の発達と、MSの推進器に関する
技術そのものが向上し、非可変機で
も十分な運動性能を持たせることができ
るようになつたことがあるだろう
(「ヨコ一」ガンダムなどはその例と
いえる)。しかし、それらサブ・フライ
・システムや高機能なスラスター
の発展には、当然、可変機開発によつ
て得られたノウハウが活かされている
はずだ。その後姿の消え可変機宇宙
世紀0150年代に登場する機体は
別機軸だが、その開発技術は無駄
ではなく、機体の設計思想の変化でし
かない、ともいえるのだ。

**Z計画から派生した
AE社初の可変生
MS**

Z計画において、変形機構に関しては、様々なトライアルを行っていたアナハイム・エレクトロニクス（AE）社は、本命である、後にMSZ-006 Zガンダム（この時点では「Zガンダム」となる機体とは別に「ムーハブル・フレーム」を用いた変形機構のトライアル・モデルを開発していた。それが本

機である。
メタスの特徴は可変フレームが今までのそれと較べて簡易型であったこと。結果的にZガンダムよりもパワーが低く、構造上戦闘に向かない機体となる。大気圏も含む広域での使用を前提としたZ計画の要求に対し、MA形態が宇宙空間限られたため、本格的な採用は見送られた。

その一方で、MA形態での宇宙戦闘機としての戦闘力、機動力は優れていた。

▶ MSA-005 メタス

Spec

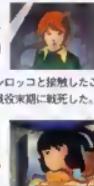
● 脳高さ: 18.1m ● 本体重量: 27.8t ● 装備重量: 52.4t ● ジェネレーター出力: 1,640kW
● スラスター推進力: 77,000kg ● センサー有効半径: 11,300m ● 装甲材質: ガンダリウム合金
● 武装: ビーム・サーベル×6、アーム・ラング・ガン×2



主なパイロット

レコア・ロンド

元はノジスタンスとして活動し、エウーゴに志願したMSパイロット。ティターンズのバブテマス・シリコと接触したことで反対する。グリップス戦役末期に戦死した。



ファ・ユイリイ

カミユ・ビダムの幼なじみだが、後にエウーゴのMSパイロットとして訓練を受け、メタスを操縦する。第一次ネオ・ジオノ戦争初期までアーガマ隊のクルーとして活躍しサポート機としても活躍した。

◆ 設定画はP108へ

MSA-005

の系譜

●派生型試作機

MSA-005S

メタス改

エゥーゴから供与されたメタスをカラバが独自に改修した。背部ユニットにハイ・メガ・キャノンを装備し火力の強化が計られた。腹部のフレームにもカバーが施されている。

※カラバにより適用

●派生型試作機

MSA-005K

ガンキャノン・ディテクター

メタスのフレームを利用して試作開発された中距離支援機。両肩にビーム・キャノン2門を搭載し、UC.0096項には連邦軍でも一部の機体を運用している。

※カラバにより適用

●U.C.0093

RGZ-91 リ・ガズィ

※ロンド・ベル隊で運用

●U.C.0096

RGZ-95

リゼル

U.C.0096年代に活躍した可変MS。系譜としてはリ・ガズィの後継にあたり、可変機構などはZ-IIやメタスが参考にされた。型式番号でくれば、かつてのZ計画の申し子といえなくもないが、実質的には「可変するジエガン」という表現が相応しいだろう。

再評価され次世代で花開いた
メタスの基本構想
結果的にMSZ-006 ZガンダムはMSとして成功はしたもの、構造の複雑さからくる生産性の悪さ、運用上の問題は抱えていた。
一方で様々な問題点があつたメタスの簡易的な変形機構は、熟成させればむしろ将来性があると判断され、積極的に研究開発が行われた。
その中で知られているのが、Zガンダムにメタス系の変形機構を組み入れたMSZ-008 Z-IIだ。この機体は、トータルコストに優れ、性能面もZガンダムに劣らなかつた。試作機が実戦にも試験投入され、評価は上々だったとされる。たたか結果的にはMSZ-010 Zガンドムの開発が優先され、計画そのものは廃止されたという。しかし、この成果は、宇宙世紀0090年代の可変機 RGZ-95リゼルなどにフィードバックされている。

メタスの変形機構やフレームは柔軟性が高く、MSの機能拡張にも用いられた。MSA-005Kガンキャノン・ディテクターは、名前こそガンキャノンだが、フレームはメタスのものがベースとなつていた。砲撃時に体を変形させて、より安定化した砲撃を可能とするもので、可変機構を利用したユニークな機体といえる。

●Z計画における可変機構想

0 ガンダム系

Z ガンダム系

どちらの系統も可変MSとして開発されていたが、これ以外の可変機構を探るべくメタスの開発も進められた。

●異なる可変機構の構造

MSA-005

メタス



※エゥーゴで運用

point

メタスの概念とよく接觸機は存在しないが、旗尾を可変機構はZ-IIに取り入れられたほか、UC.0096年代になると見渡され、リゼルなどに取り入れられるようになる。リゼル自体の位置つけはリ・ガズィの後継にあたり。



➡ 設定画はP108へ



N E M

▶ MSA-003

ネモ

Spec

頭頂高: 18.5m ◎本体重量: 36.2t ◎全備重量: 55.8t ◎ジェネレーター出力: 1,620kW ◎スラスター総推力: 72,800kg ◎センサー有効半径: 10,020m ◎装甲材質: ガンダリウム合金 ◎武装: パルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル

22m
21m
20m
19m
18m
17m
16m
15m
14m
13m
12m
11m
10m
9m
8m
7m
6m
5m
4m
3m
2m
1m



開発されたのが本機だ。

ムーバブル・フレームを導入したエウーゴの主力MS

グリップス戦役直前、ティターンズに対抗して戦力強化を図っていたエウーゴは、旧式化が進むジムIIに代わる主力MSの開発を企図。

本命は最新鋭機であるリック・ディアスや開発中のΖガンダムであったが、コストのかかる最新鋭機と並行して、普及型も必要となっていた。こうして

技術的にはジムIIなどの地球連邦軍系のMSがベースになつておらず、並行してジオン公国軍の技術がベースになるRMS-1108マラサイも開発されている(こちらはティターンズが採用)。

ムーバブル・フレーム、ガンダリウム合金など、第二世代MSの要件を満たし、推力の増強も図られるなど、次世代の主力機にふさわしい高い基本性能を獲得している。

また汎用性にも優れ、宇宙空間から大気圏内まで多様な状況での戦闘に対応できた。このためジャブロー・侵攻作戦後、地球上に残されたネモはカラバに譲渡され、主力を形成している。このように量産主力機として申し分ない性能と美編を誇るネモは、グリップス戦後、ラプラス戦時までの間、エウーゴから連邦軍へと引き継がれ、宇宙世紀0090年代後半まで運用された機体も多い。

→1 メインカラフなど、頭部はジム系と似たデザインを廃棄。搭載したセンサー類などは強化されている。

→2 ムーバブル・フレームの採用で機動の可動範囲も広く、強度面などの基本性能も向上している。

→3 ネモ専用のスライド式シールドを装備。サイズを縮めることで腕の動作を庶民しないように配慮。

→4 AE社は、射撃管制システムやスラスターなどの設計をジム・スナイパーIIとで実験のある他に依頼したといわれる。

◀ 設定画はP109へ

MSA-003 の系譜

point

ネモが開発されるまでの間に、いくつかの派生機が存在するといわれるが実でない。なか、開発にあたるネモⅢの型式番号はMSN-004とされる。

●派生型中距離支援機

MSA-004K ネモⅢ



ネモの火力支援型。左肩部にピーム、キャノンを装備。開発はグリップス戦役実戦まで遡れたといわれる。一部の機体はU.C.0096年まで運用される機体もあった。

●データをフィードバック

MSA-003 ネモ



●ネモと同時に開発

RMS-108 マラサイ



ジョン系技術をベースにムーバブル、フレーム技やガンドリウム合金を取り入れた機体。エゥーゴ用としてネモより先行して開発が進んでいたが販売取引によってティターンズやネモ、ジョンが使用することになる。

●ティターンズで運用される

point

ネモの派生に当たる後継機はないが、U.C.0096年まで準弩軍の機体として、一部配備されているものが確認できる。また、技術面などは他の准弩軍の主力機であるジェガンに継承される。

●U.C.0093

RGM-89 ジェガン



ジムⅡに代わる主力機として活躍が期待されたネモだったが、グリップス戦役やその後の第一次ネオ・ジョン戦争などにおける活躍や、戦果についての記録は少ない。しかし基本性能の高さは間違いない。ネモをベースに改修した支援機が何種か開発されている。またグリップス戦役で続々登場したティターンズの新型MSに対抗して、ネモの強化が計られたといわれるが、どうやら計画だけで終わつたようである。ジムⅡが改良が可能な推力系を中心強化され、支援機としての道を見いだし、宇宙紀90年代まで使用されたことから、ネモも近代化改修などで息を繋いだのかもしれない。

技術的にはネモの直系はRGM-89ジェガンであると考えることができるが、ジェガンは軽量化により生産型としては破格の性能を実現している。宇宙紀80年代のアーナイム・エレクトロニクス社製MS全体の研究成果とも考えることができるだろう。

主力MSの位置づけを再考 MS戦略的進化の中のネモ

ジムⅡに代わる主力機として活躍が期待されたネモだったが、グリップス戦役やその後の第一次ネオ・ジョン戦争などにおける活躍や、戦果についての記録は少ない。しかし基本性能の高さは間違いない。ネモをベースに改修した支援機が何種か開発されている。ビーム・キャノンを搭載した支援砲撃機のネモⅢは、グリップス戦役末まで開発が遅れてしまったが、その後、その火力を活かし連邦軍に再編成された機体もあり、基地防衛に配備されるなどしている。

またグリップス戦役で続々登場したティターンズの新型MSに対抗して、ネモの強化が計られたといわれるが、どうやら計画だけで終わつたようである。ジムⅡが改良が可能な推力系を中心強化され、支援機としての道を見いだし、宇宙紀90年代まで使用されたことから、ネモも近代化改修などで息を繋いだのかもしれない。

➡ 設定画はP109へ

宇宙世紀0088年前後のMSトレンド

モビルスティック

グリーブス戦役初頭、ムーバブル・フレームや全周囲モニターとリニア・シート、そしてガンダーリウム合金が採用されたいわゆる第2世代MSが登場し、さらにその進化は短期間で劇的に進んでいく。ここでは宇宙世紀0088年以降にZ計画で誕生した機体群と、それと相まみえた敵陣営のMSを追いつつ、MSのトレンドの推移についてまとめてみた。

Z計画を刺激した
他障営のMS

特にその中のでも、機体性能はサインコ・ガーディアンなどは、その後に続くMSの高出力、高火力化の先駆けといえるかもしれない。いずれにせよこの時代に登場した特殊な機体群のMSは、少數の高性能な機体を必要としていた時代の要請にも適合し、グリーブズ戦役以後、第一次オジオ＝戦争のわざかな間だが、様々な実験的な要素を帶びつつ、多くの機体が登場することになる。

グリーブス戦役末期から第
二回戦争にかけて、多くの陣営で
ユーライプもしくは強化人の陣営で
機が次々と開発され、MSは可変型
第三世代MSから、サイコミュー搭載
の第四世代MSへと、その開発は移
していく。

ニユートタイプ能力なしには成立しない高性能機

地球連邦軍系の場合、無線誘導兵器



PMX-003
5:0



MRX-009
サイコ・ガンダム

MS開発の
工。ボツクな機体

迷彩率のムラサメ研究所で開発された極
度分類上はMAで面積40メートルと
いう巨大像。兵器管制や機体制御にサイ
コミュを応用する。

を中心して、様々な新機軸を搭載した機体を投入していた。特にその中でも、機体制御にサイココ・ガソルダムなどは、その後に続くMSの高出力化、高火力化の先駆けといえるかもしれない。いずれにせよこの時代に登場した特殊な機体群のMSは、少數の高性能な機体を必要としていた時代の要請にも適合し、グリーブス戦役以後、第一次オーギオン戦争のわざ

第三世代MSから、サイコミック搭載機体への搭載スベースや維持運用に負担をかけることになるが、当時の情勢はそれを補つてあまりあるほどの存在価値を、大型MS & MAに見出していくと考えられる。

グリーブス戦役末期から第一次オーギオン戦争にかけて、多くの陣営でユータイプ、もしくは強化人間の専用機が次々と開発され、MSは可変型の機体

がセットで考えられていたとしても、不思議ではない。こうしたMSの世代区分については諸説ある。

とりニア・シート、そしてガンドリの進化は短期間で劇的に進んでいく。それと相まみえた敵陣営のMSを

U.C.0087～0093年代のMSのスペック比較

機体名	本体重量 (t)	ジェネレーター出力 (kW)	スラスター推力 (kg)	世代
RMS-093 リック・ディアス	32.2t	1833kW	74800kg	2
MSZ-006 ZZガンダム	28.7t	2020kW	112600kg	3
PMX-003 ジ・O	57.3t	1840kW	135400kg	4?
AMX-004 キュベレイ	35.2t	1820kW	61600kg	4?
MSZ-010 ZZガンダム	32.7t	7340kW	101000kg	4
AMX-014 ドーベン・ウルフ	36.8t	5250kW	87300kg	4
NZ-000 クイン・マンサ	143.2t	21370kW	287100kg	4
MSN-04 サザビー	30.5t	3960kW	133000kg	4
RX-93 νガンダム	27.9t	2980kW	97800kg	4

中でも群を抜いているのがクイン・マンサだろう。頭頂高39.2mの巨大ながら分類上はMSのため、被格な性能となっている。

ジョンの所轄機ゆえ、一騎当千のサイコミュ兵士に翻った腕は否めない。



その後は、地球連邦軍系で第四世代の最後の機体、RX-93「ガーネーム」が開発され初めて「ファーネル」系の武器が導入されるが、これすら当時のネオ・ジオン系の「ファーネル」とは、そのコノセントがかなり違っていた。

そして時代が移るにつれ「ファーネルが最強」という、半ば都市伝説のような既成概念が、「ユータイプ専用機」そのものの将来を行き詰まらせた、とも考えることができるだろう。

第四世代MSの頂点に立つたとしている。確かにバイロットを務めたシュー・アーシタのニュータイプ能力の高さはあるが、エコガーダムはオーレルシステム改のような非効率ともいえる戦闘開発を行ったことでの勝利といえるではないだろうか。

ビットやファーネルによるオールレジ攻撃に代表されるような、サイコミュを兵器として前面に押し出した開発は行ってない。むしろ、機体の制御面を重視していたフジがある。その代表例がバイオセナーサー搭載機のMSZ-010 ZZガーダムだろう。結果的にはニュータイプ専用機であるAMX-004キュベレイやNZ-000クィーマンサといったサイ



ネオ・ジオンが開発したニュータイプ専用機。ファンネルによるオールレンジ攻撃が可能。サイコ・ガンダムと違い、こちらはMSに分類される。



AMX-014
ドーベン・ウルフ



AMX-107
バウ



AMX-004
キュベレイ



主なパイロット

ジドー・アーシタ

マイド1のシャングリラ・コニーで、ランク星を營んでいた少年。奇遇したアーダマからMSを盗み、そうしたのがきっかけで、アーダマのパイロットとなつた。ZZガンダム、ZZガンドームのパイロットとしてエウゴの力方に乗り、最後はネオ・ジオンのハマーン・カーンと一緒に討ちでこれを倒した。



ZZガンダムの戦闘

第一次ネオ・ジオン戦争初期、アクシズ(ネオ・ジオン)のマシュマー・ゼロ星の攻撃を受けるアーダマに緊急配備される。その後、ガンダムチームの中核をなし、エウゴ(連邦軍)の中核として最前线で戦つた。大型MSのキンマンサや、アクシズを走るハマーン・カーンのキュベレイなど、数多くの戦を撃破。この時代最強の機体であることを示した。



スペック比較

	ZZジム	ZZガム	ジム
全高	19.86m	19.8m	16.0m
全幅	32.71	28.71	36.61
ジエネレーター	7,340kW	2,020kW	1,580kW
推力	101,000kg	112,500kg	81,200kg

ZZ GUNDAM

▶ MSZ-010

ZZガンダム

Spec

◎頭頂高: 19.86m ◎本体重量: 32.7t ◎全幅重量: 68.4t ◎ジエネレーター出力: 7,340kW
◎スラスター総推力: 101,000kg ◎センサー有効半径: 16,200m ◎装甲材質: ガンダリウム合金
◎武装: ダブルバルカン、ハイパー・ビーム・サーベル、ダブル・ビーム・ライフル、ハイ・メガ、キャノン、ダブル・キャノン、21連装ミサイル、ランチャー×2



- 1. ガンダムタイプの頭部だが、頭部にハイ・メガ・キャノンを搭載する。そのため、他のガンダムにはないボリュームを持ったデザインになっている。
- 2. その全高が20mを越える大型機だが、機体重量はその割に想像外の軽量な設計に終わっている。後に増加装甲を取り付けている。
- 3. 「コクピット」には、Zガンダムと同じバイオセンサーが搭載。ミニアタイプが搭乗することで、ある程度の意図による機体制御も可能。
- 4. 「コア・ロック」システムの導入で、パイロットの生存性を高める。可変合体機構を活かした機体運用で多目的な任務に対応が可能。

進化を促した重MS

宇宙世紀0083年に実施された方
ンダム開発（GP）計画で、ガンダム
試作2号機やガンダム試作3号機など、
MSに規格外の攻撃力を付加した機体
を誕生させたアナハイム・エレクトロ
ニクス社が、その経験を活かしつつ、
後のZ計画において、汎用MSの範疇
に収めながら、究極の火力強化型、強
襲攻撃型の思想を推し進めた機体とし
て開発されたのが本機だ。

同計画の高機動を主眼としたMS-Z
・006 Zガンダムとはかなり性格が
異なり、高出力、大火力の決戦兵器に
近い性格である。ニュータイプの搭乗
も視野に入れ、旗艦サイコミュの発展
型であるバイオセンサーを搭載するな
ど、この時代のMSのトレンドを取り
入れている。まさにMS単体の攻撃力
の頂点を極めた機体といつても過言で
はないだろう。

本機の第一の特徴は、強力なビーム
兵器の搭載である。特に頭部のハイ・
メガ・キャノンは当時のMSの火器と
しては破格の威力を持ち、携行兵器も
軒並み高出力を確保する。これらの高
出力の源は、搭載された3基のジェネ
レーターによる。ハイ・メガ・
キャノンなどは連射ができるものでは
なく、初戦時には1発撃つただけで、



機体が作動不
良を起こして
いる。このこ
とから、當時
とてもかな
り無茶な設計
をしたことが
窺える。

第二の特徴が合体変形機構だ。これ
は一年戦争時のRX-78ガンダムのコ
ア・プロトック・システムと、パワーワー
ップ計画として開発されたGハーツを
統合したようなコンセプトといえるだ
ろう。ただ、システムとしては一種の
先祖返りともいえ、フルに性能を発揮
して運用されたかといふと疑問も残る。
それでも、この時代における極端の
MSといえる性能を確保したのは間違
いないことだろう。しかし、標準的な
MSサイズ3基のジエネレーターを
搭載し、なつかしきその重量で、同時代
最軽量といえるMS-Z・006 Zガ
ンダムの5トン増し程度に収めている
のだから、設計面に無理があったこと
も否めないだろう。

それは結果的に「フルアーマー化」
という名目で、機体自体の強化も全儀
なくされ、各部に増加装甲が施された
点からも明らかだ。汎用型の空間機動
兵器形態は分離した状態で行われることがほとんど。
全ユニットが合体した巡航形態がGフォートレスだ。この状態から
MS形態のZZガンダムへ変形する。ただ、Gフォートレスの状態で運用
される場面は少なかった。

ネオ・コア・ファイター



→ 設定画はP110へ

Z Z ガンダムの合体変形

ハイ・メガ・キャノン

頭部のみの粒子砲で、一回にその
出力は50MWとも、コロニー・レ
ーザーの20%相当の威力を持つといわれるが、定かではない。
MSの固定武装としては最強クラスだが、エネルギー消費も大きく、
連続使用は難しい。



ダブル・ビーム・ ライフル

本機が搭載する主武装で、コア・
トップ形態時などは櫻首ユニットと
なる。連射が可能なうえに威力も高い。



ビーム・キャノン兼 ハイバー・ビーム・ サーベル

背部に搭載するビームで、コア・
トップ形態時などは櫻首ユニットと
なる。マウントから外せば強力
なビーム・サーベルとして使用で
きる。



21連装 ミサイル・ランチャー

ビーム兵器以外に実弾も多数搭
載する。オプション用装備にコア・
トップ用のミサイル・ランチャー
も存在する。





●試作機

MSZ-009

プロトタイプ
ZZガンダム

ZZガンダムの武装や機能などのテストをするために開発された機体。コア・ブロック・システムは搭載されていないが、機体は上下に分離可能だ。



フルアーマー化による機体強化

生産を図る



MSZ-010

ZZガンダム



●派生型量産試作機

MSZ-013

量産型ZZガンダム

量産化を目指してコストダウンを計った機体。変形合体機構や、コア・ブロック・システムは廃されている。ハイ・メガ・キヤノンの発射可能数も2回に制限されている。

●その後

直系となる後継機はなし。合体変形という特殊な機構を備えた機体は、U.C.010頃に再び登場するが、その因果関係は不明である。

S Z - 0 1 0
の系譜

より強力なMSを求め、進化を続けたZZガンダム
一般的にMSZ-010 ZZガンダムはMSZ-006 ZZガンダムの後継機と取られることがあるが、それはおそらく機体「コハセブト」という意味での後継機ではない。ZZガンダムの量産型などがZZガンダムのロールアウト後に開発されていることからも、実質的な後継機ではないことが分かる。

双方ともZ計画から誕生した機体ではあるが、開発「コンセプト」が大きく違う。機動性に特化したZZガンダム、火力に特化したZZガンダム。その方向性の違いは明らかだ。もし後継機とするならば、戦術思想の変化によるものという可能性はある。これは、グリップス戦役時から第一次ネオ・ジオン戦争時、MSに必要なのが、機動性か高火力か、という問題だ。

一年戦争時、地球連邦軍のRX-78 ガンダムが他のより抜きん出でていたのは、ビーム兵器とその装甲の堅牢さが挙げられる。一般的に極度の軽量化を求める航空機を除き、搭載武器は自身の装甲（防御力）が耐えられる程度のものを付与されることが多い。だが、MSのビーム兵器の場合、その威力の前には、当時の最高素材であるルナ・チタニウム合金では役不足であった。つまり、敵の砲撃は、受けけることは不

●改修強化型

MSZ-0105

強化型ZZガンダム

フルアーマー化のためにZZガンダムに強化改造を施した機体。大型のランドセルへ換装し、スラスター能力の向上、機動力のアップが図られている。

MSZ-0105

ZZ-GR



●派生型試作機

FA-010A

FAZZ

フルアーマーZZガンダムの重火器支援システムの運用試作機。このデータはフルアーマーZZガンダムの開発に活かされた。なお、アーマーは兼用でない。本來のZZガンダムの構造とはこのような機体なものかもしれない。

●フルアーマ化

FA-010S

フルアーマーZZガンダム

強化型ZZガンダムにフルアーマー装備を装着した形態。ハイ・メガ粒子砲、ミサイルなどを追加し、攻撃力を強化。また増加装甲には射ビームコーティングが施され、防護力も向上。



●武装強化型

FX-010

スーパーGフォートレス

Gフォートレスに対しても、ハイパーエガランチーやミサイルポッド、プロペラントタンクなどを追加装備するフルアーマー装備が考案された。

point

強化型ZZガンダムの簡単そのものは強化されていない。FAZZはフルアーマーZZガンダムを機体としている。そのため、強化型ZZガンダムのような機体は存在しない。

M

可能で、「避ける」か、「撃たれる前に撃墜する」以外の方法はなかった。

Ζガンダム、ΖΖガンダムとともにその両方を追求した機体という意味では共通するが、ΖΖガンダムはどちらかといえは機動性を主軸にし、ΖΖガンダムは高い攻撃力を主軸にして開発されている。要は、V作戦におけるガンダムとRX-77ガンチャノンの関係に近い。違う点はΖΖガンダムの方が求められている性能が、より高次元で複雑なこと。

軍縮時代の戦争は、大規模戦闘にはなりにくく、むしろ単機の性能を上げることで戦況を開拓する。こうした戦

訓は、「デラーズ紛争を経て実証されており、ゆえにΖΖガンダムには、究極といえるまでの総合性能が求められたのだろう。

実際に、ΖΖガンダムの派生機に目を向けると、本機とは打って変わって「由於正しきガンチャノン」といったコンセプトに回帰している。一方、ΖΖガンダムも高火力に主眼をおこフルアーマーZZガンダムへ改修された。こうしたことから、本機のコンセプト自体、いかに機能が盛り込まれて過激すぎたことかがうかがえる。

そして、これ以降になると、高火力を備えたガンチャノン的な思想を抱えたMSは、標準機体に増加装備する、という新たな形に収束していく。

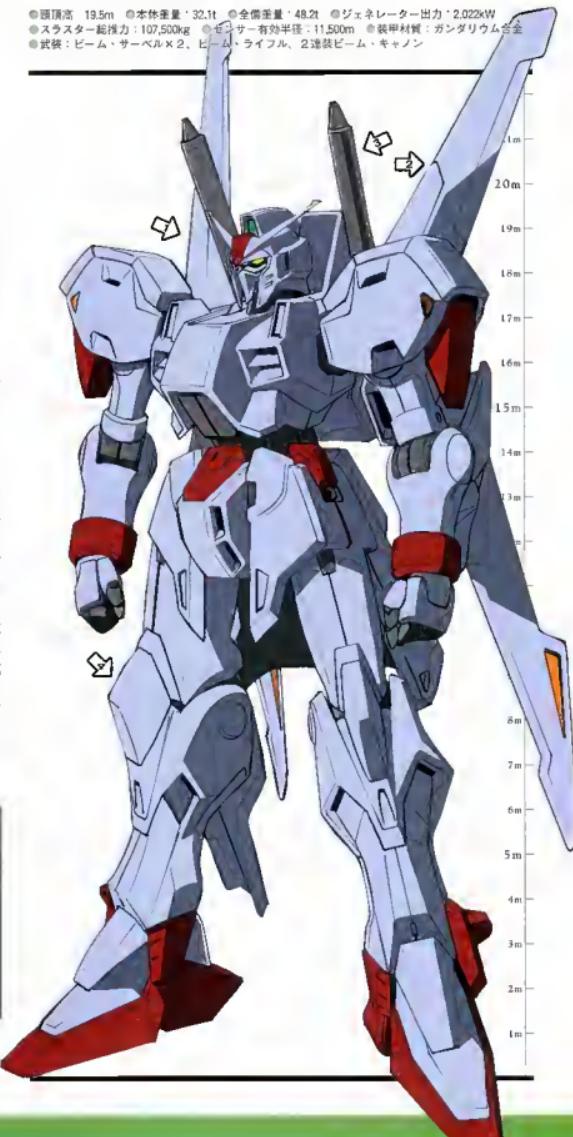
GUNDAM MARK III

▶ MSF-007

ガンダム Mk - III

Spec

①頭頂高 19.5m ②本体重量 32.1t ③全備重量 48.2t ④ジェネレーター出力 2,022kW
 ⑤スラスター総推力 107,500kg ⑥センサー有効半径 11,500m ⑦武装材質 ガンダリウム合金
 ⑧武装 ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装ビーム・キャノン



てしまうこと、そしてムーバブル・フレームの採用がかえって機体の強度を低下させてしまう部分もあるというも

のだった。

そんな中で A.E. 社のフジタ博士は

ムーバブル・フレームを単純化する

とともに機体強度も上げる研究を開始し、

完成させたのがガンダム Mk-III と

される。

より人体に近いムーバブル・フレ

ムを搭載し、また関節部なども大幅に

見直され、人間に近い運動を行なうこと

が出来るばかりでなく、スラスターなどの増強により機動力も高まっている。

攻撃力の面では、肩部にビーム・サ

ーベル兼用のビーム・キャノンを2門搭

載するなど、火力面も強化されている。

しかし、実際のところ、本機は試作

段階でも完成したかは、はつきりした

記録がなく、機体名は後に伝えられて

はいるが、単なるベーパーブランとい

う説もある。

→ 1 / シルエットや頭部形状は Z ガンダムに通じる。共通部品が使われる予定だったと指摘される。

→ 2 / Z ガンダム、百式とも違う形状の背部スター。AMBAC も考慮されていると思われるが、詳細は不明。

→ 3 / 背部搭載のビーム・キャノン。Z ガンダムのビーム・ライフルと同様、ビーム・サーベル兼用が可能。

→ 4 / 頭部形状は可変 MS のようだが、可変機構はない。MS 形態での高機能化が計画されていた。

▶ FA-00ワグIII

フルアーマーガンダムMk-III

Spec

①頭頂高：19.5m ②本体重量：47.2t ③全備重量：62.1t ④ジェネレーター出力：3,000kW

⑤スラスター総推力：141,200kg ⑥センサー有効半径：11,500m ⑦装甲材質：ガンドリウム合金

⑧武装：ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ハイパー・ビーム、キャノン×2、ビーム・キャノン×2、シールド・キャノン×2、グレネード・ランチャー×2



機動性を生かしつつ、戦闘力を強化を狙つた、フルアーマー装備を搭載

ガンドムMk-IIIの開発を進める中で、火力と防御力を向上させ、機動力をは損なないよう追加装甲、フルアーマー・システムも構想されていた。左右の脚部にハイパー・ビーム・キャノン、両肩部にはシールド・キャノンなど多数の火器を搭載することによ

つて、強力な砲撃力を獲得している。またこれら追加されたビーム砲には、シールド・キャノンに搭載されたジェネレーターからエネルギーが供給されるように設計されていた。一方、追加された装甲にはスラスターが増設され、加えてプロペラントタンクも追加搭載されるなど、増加する重量分を補って

元々の高い機動力を維持している。本機はその高い機動力と火力を生かすことによ

つて、中距離からの砲撃戦で大きな戦果を上げられると期待されていたといわれている。しかしベースのガンドムMk-IIIの開発がグリップス戦役末期だったこと、想定以上に早く戦況が変化していく影響もあり、本体のガンドムMk-IIIもテスト機製造までは進展したかはつきりしない状況では、本機も設計段階で計画打ち切りとなつたと思われる。

- 1 /両肩に装備されたシールド・キャノン、或防一体の装備で、内部にジェネレーターを搭載する。
- 2 /両脚外側のハイパー・ビーム・キャノン、その形状からZZガーダムに匹敵する威力が予想される。
- 3 /背面には推力動用の増加スラスター、そして増加プロペラントタンクなどが装備されている。
- 4 /フルアーマー装備は、装備時も機体の重量バランスが変化しないように設計されている。

SガンダムとZZガンダムの関係とは?!

一年戦争時に活躍した連邦軍のRX-78ガンダムのコンセプトの中で、支援機であるGバーツの要素まで含めて、MS単体の中に搭載しようと試みたのが、開発コード「0(シータ)ガンダム」として、MSZ-010 ZZガンダムであった。

このコンセプトをベースにしながら、別の方向性を摸索し、オプションパソによって、さらなる機能の拡張性を狙つたのが、開発コード「イオタ」ガンダムと呼ばれた。MSA-001 IS(スベリオル)ガンダムである。

コア・ブロック、システムによる変形合体機能を採用。複数のジェネレーター搭載による大パワーなど、機体構

造的にZZガンダムとの共通点も多い。

だがMS単体での能力を高めるZZガンダムに対し、オプションバーツの装備を前提に、多様な任務へ対応できるプラットフォーム、というのがSガンダムのコンセプトだ。

つまり、ZZガンダム的なMSの基本構造や能力の再現を、オプションバーツを使って最適化する、というのがその発想の原點と思われる。実際、両機のスペックはよく似ている。

一説にはZZガンダムの基本構造をベースにした再設計機という説もあり、

これはこれで頷ける話でもある。

ニュータイプ機ではないが 第四世代機!?

Sガンダムは様々な強化ユニットを装備することで、機動性、武装共にMS単体とは思えない性能が発揮できる。それは、もはや人が乗ることをも排除するかのような體だ。

本機は、世代的には第四世代、すなはちニュータイプ専用機が属する世代に分類されるが、ニュータイプ専用機ではない。これは本機に搭載されている、独自の自律制御システム「ALICE」に依るところが大きい。

実際、追加装備の多様さと、機動性の高さから、従来型のハイロットによ

ZZ計画の徒花!?

究極のZZスペックを誇るSガンダム



ZZガンダムの開発と同時期、さらに先進性を追求した別コンセプトの機体が誕生した。ZZ計画の1機とされ、「究極の機体」といわれる割には、アーガマ、ネエル・アーガマなどのエウーゴの最前線部隊に投入されたわけでもなく、その実体は謎に包まれた部分が多い。また、本機のようなコンセプトを継ぐ機体も後世には残されていない。ここでは、そんなSガンダムについて考察してみよう。





MSA-0011
Sガンダム

無人MS構想の一環から、機体制御システムに自律型のALICEを搭載する。オプションパーツを組み替えることで多様な任務に対応可能だ。

乙計画から生まれたとされるが機体の型式番号などはMSZではなくMSAというエゥーゴ系のもので、数字も4桁と独特だ。このあたりも本機の出自の複雑さを物語っている。



MSA-0011[Ext]

Ex-S ガンダム

Sガンダムのオプションパーツをすべて装着した形態で、重装型という位置づけ。大気圏内から衛星軌道への離脱が可能な、Gクラーザーへ変形する。

本来はGクルーザーが主形態でMS形態になれる、という方が正しい。実際、航続距離や推力などMSには必要ないほどの高性能ぶりだ。

機体制御には無理がある。そこで、バイロットとガンナードという複座型にするか、シテッドが採用しただろうが、御システムへ追加された。おそらく、Sガンダムの機械識を上回り、当然の操縦には困難を極める。安定した運用には、御を介した方が向いののである。そのほぼフルオートで、視野に入れられて、フスキ一粒子下の無

にノ化はれ制めが常X制あ三は、
より制御の知能のばと、A.I. な発想の
その回軟な対応ブルが柔らかで、
には採用システムと
者でも駆どがで第三を第四あるのび

ICE搭載が求められるに至り、ICEに辿り着くのが帰結だろう。
而面、作戦の途中で、心が難しいことや、起きた際、問題が生じて使用されたら、それゆえにA-1、新練バイロットの代位の機体に分派さると言われば、代位の機体に分派さると言われば、

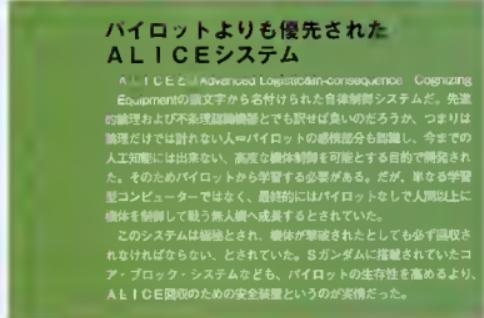
自律型の人工
知能。そう考える
居いたのも自然
千変万化などの柔
軟、咄咄のトラ
ウト生じるのは明
LICEは正式
まで操縦支援シ
ト。ようだ。
経験の少ない
のよう。に扱うこ
とでこそが本機
器にする理由でも

Sガンダムに見える
軍縮という時代背景

さて、本機の性能に目を向けてみると、その元気な走りは、**ドン・ロビンソン**のダム試作3号機（**アンドロビラム**）や、**旧シンガポール軍**の**MA-08ビッグ・ザム**に通じるような、拠点攻略もしくは防衛用の機体であることが分かる。謎なのは、なぜそのような能力をMS一機に詰め込んだのか？ という点だ。大型MAレベルの性能を、たかだか20メートル級の機体に収めることには、設計的にも無理がある（ゆえにオーバーラン）が、**バンジョン追加型**を選んだのだろうが

るのは明かで、総合的にアのネオを歩んだ。それが、そ、過度う発想がされたのだ。それらの、で、その、いるとも

黒的に、おそらく対MS戦で、
、軽量、空間機動性の高い
選択に無理がありすぎたこと
ことは、後の時代に証明されて
いる。



パイロットよりも優先された ALICEシステム

ALICEとAdvanced Logistic-in-consequence Cognizing Equipmentの國文から字が付けられた後悔制御システムだ。先進的論理および不条理論理論などでも訳せば良いのだろうが、つまり論理だけでは對れない人間のパロットの感情部分も論理化し今までの人工知能には出来ない、高度な機械制御を可能とする目的で開発された。そのためパロットから学習する必要がある。だが、既なる学習型コンピューターではなく、最終的にはパロットなしで人間に上位機械を制御して戦う人間へ進化へ成る所とされていた。

試作機時代は終わりを告げ
ジエガンへと収束する

地団全土に及んだ一年戦争から7年、グリーブス戦役や第一次ネオ・ジオノ戦争が相次いで勃発したが、これらの戦争は一年戦争に比較すれば紛争程度の小規模なものであった。さらに第一次ネオ・ジオノ戦争以降には大規模な戦闘が発生しないであろう状況もあって、急速に軍備が進んでいく。この時代における軍需とは、すなわち兵器体系の頂点に君臨したMS開発に影響を与えることを意味する。

グリーブス戦役、第一次ネオ・ジオノ戦争が勃発した宇宙世纪0087年～0088年、0088年は、連邦軍内部の開発拠点や研究施設、ジオンから接収した工廠、民間企業アナハイム・エレクトロニクス社といったMS開発施設が乱立し、群雄割據の時代であった。一年戦争後、MS開発製造の基礎技術が確立されたことから、いわば最先端事業といえたこの時代に確立された技術は、長くMSの基礎技術を支えることになる。

その一方で、ハイスペックや先端技術を追い求めた結果としてMSの開発コストは急騰、たった1機の試作機のために新技術が投入されることが珍しくなく、異常ともいえる状況が続いた。だがこうした状況は長くは続かず、前述の軍縮の波もあって、のち

に恩恵的進化と呼ばれるMS群は姿を消していく。

宇宙世纪0090年代初頭のトレンドは、優れたスタンダード機の開発であり、用途に合わせてオプションやバリエーション機を使用するという方向性である。これは多機種が乱立した宇宙世纪0087年～0088年の振り戻しといえる状況にあたったといえる。

こうした状況は連邦軍の象徴的である。これは多機種が乱立した宇宙世纪0087年～0088年の振り戻しといえる状況にあたったといえる。

ガンドムも例に漏れず、ロード・ペル隊のパイロットとして戦場へ復帰したアムロ・レイの要望でも、「ガンドムの復活」はしばらく実現することはなかった。現場の声が届かない状況は、連邦政府の腐敗を予感させるものだ。事実、宇宙世纪0120年代以降、連邦政府は緩やかな衰退の道をたどつていく。

僅かながら生き残ったガンドムの系譜は、グリーブス戦役で活躍したジエガンダムの系統のみとなつた。ジエガンダムはグリーブス戦役期において、カミーユ・ビダンの搭乗によって完成したが、本来は強襲型として優美な側面を持つMS。また大戦中はサブ・フレーム、システムとしての能力もクローバーアップされていた。その背景にあるのは機動性であり、この点の能力に注目して立ち上げられたのが、RGZの型式で始まるジエガンダムの再設計機群である。

RGZ-91・ガズィは量産性を考慮

して変形機構を排除し、生産性とコストダウンを実現した。RGZ-95リゼルは変形機構を活かしつつ、サブ・フレームとして発展。連邦軍再編の一端である「UC計画」にジエガンダムタイプが採用されたのは、ジオノズムドな性能を求められたグリーブス戦役期に對する象徴としてのジエガンダム」とい。機動性に特化させることで系統を残した。

ガンドムといえば、時代ごとに最高の性能を与えられる連邦軍の象徴的ような側面を持つが、この時代ではそうした状況にも微妙な変化をもたらしている。すでにガンドムの名を冠したMSの開発は連邦軍からアナハイム、エレクトロニクス社が中心となつておる、「ガンドム」をあらわすニュアンスも微妙な変化を遂げていた。

第二次ネオ・ジオノ戦争期、アムロの要望によつて完成したRX-93ガンドムであつたが、同機のコクピットフレームに採用されたサイコフレームは、ネオ・ジオノンから技術供与によるもの。サイコフレームをコクピットフレームに配するという構造を採用したジエガンダムとMS-04サザビーは、強い関連性のある機体といえる。この時代、MSの技術体系はすでに混沌としており、両機は連邦系ジオノン系という垣根が消滅したことを現す象徴的な機体であるといえるかも知れない。

そして宇宙世纪0096年、ジエ

以降のMS

レームは、ユニコーンガンドムのムバブル・フレームを模倣するフル・サイコフレームとして発展。連邦軍再編の一端である「UC計画」にジエガンダムタイプが採用されたのは、ジオノズムドな性能を求められたグリーブス戦役期に對する象徴としてのジエガンダム」

撲滅に対する象徴としてのジエガンダム」を活用するためのニュアンスを感じとられ、何とも皮肉な話である。

宇宙世紀0093年以降のMSカテゴリーとその状況

ガンダム系MS群

軍艦の流れは、かつて連邦軍の勝利の象徴であったガンダムにも影響を及ぼした。高コスト化を招くハイエンド機の開発が凍結された宇宙世紀0090年代前半には、ガンダムの開発すらも停滞。

シャアが復活した第二次ネオ・ジオン戦争でも、連邦軍上層部は理解を示そうとせずロンド・ベル隊の再三の要求にもかわらずギリギリまでマングニムの開発にGのサインを出そうとはしなかった。

一方で象徴としてのガンダムを利用する動きは、連邦軍軍備再編計画である「UC計画」でも見てとれ、ジオニスムを躍進させたための先兵として「ガンダム」の存在が利用されている。

可変MS群

MSにとて地上における移動力の都合は、大きなテーマだった。ジオン公国軍が地上で敗北した背景の大きな要因としてMSの移動力の問題も無視できないからだ。こうした状況を受け、グリップ戦役期には様々なタイプの可変MSが登場した。だが複数の難易度や生産コスト、複雑な構造によるランニングコストなどの問題も多く、可変MSの時代は覚束期に終わる。こうした中、僅かに生き残った可変MSの系譜はZガンダムの流れだ。Zガンダムの強襲能力に着目したりガズィ、サブ・フライト・システムとしての能力に着目したりセルなどの次世代機が登場している。それでも宇宙世紀0100年代には、こうした系譜も絶滅してしまう。

主力MS群

クリフス戦役、第二次ネオ・ジオン戦争という2つの船頭時代。地球連邦軍では内訌の影響などもあり、明確な主力機がジムIIのまま数年が過ぎた。これには政府内と各工廠との癒着などの問題もあり、明確な主力機が定まらないまま、試作機の乱立という状態であった。こうした時代の反骨者から、宇宙世紀0080年代後半から次世代のスタンダードMSの主力が進み、アナハイム・エレクトロニクス社による初のRGMシリーズ、ジェガンが開発される。一年戦争からグリップ戦役、第二次ネオ・ジオン戦争で確立した技術の答えがジェガンといえるかもしれない。宇宙世紀0090年代にはジムIIから主力機の座はジェガーシュトライクへ移行しつつある。



巨大MA群

グリップ戦役、第二次ネオ・ジオン戦争におけるトレンドであった巨大MA・MS群も高コスト化を招く存在として勢いを失っていた。だが物量の少ない小勢力では、1機で数十機分の活躍をこなす切り札として機能し、シャア率いる新生ネオ・ジオンではローブジール、「袖付き」ではクイン・マンサの流れを受け継ぐシャトリヤが一定の成果を上げている。メンテナンスや運用面のコスト問題さえなければ、十分効果的な活躍をする存在である。



再編成を促される連邦軍のMS群 宇宙世紀0093年

恐竜的進化と呼ばれる時代を経て、急速な軍縮化が進む宇宙世紀0090年代。試作MSが群雄割拠した時代は終わりを告げ、次世代のスタンダード機が主力MSの座を獲得した。この流れは、ガンダムにも波及し、その位置づけはハイエンド機の代名詞から連邦軍の象徴としての立場となっていく。



アムロレイ

一年戦争、グリーブス戦役と活躍した伝説のエース。ロンド・ベルのMS隊隊長を務める。Ζガンダムが完成するまでの間はリ・ガズィに搭乗していた。フィフス・ルナ高下限止作戦では、格上のヤクト・ドーガを追い詰める戦いを繰り広げた。



ケーラ・スウ

ロンド・ベル隊の女性パイロット。アムロに次ぐエースで、以前からリ・ガズィに興味を示すなど、高性能のMSを欲していた。リ・ガズィを手に入れ、アクシズの先鋒として出撃するも、ギュネイの人質となり、命を落とした。

SPEC CORPORATION			
スペック比較			
MS-06F	MS-06F	MS-06F	MS-06F
Ζガンダム	Ζガンダム	Ζガンダム	Ζガンダム
高さ	19.8m	20.5m	21.0m
本体重量	28.7t	24.7t	28.0t
・ジェネレーター	2,020kW	2,560kW	3,340kW
スラスター推力	112,000kg	67,000kg	62,000kg

→1 / 背部・アンテナ: ガンダムのようなツインアイカメラを装備するが、V字アンテナは搭載されず、外観の印象はガンダムタイプからやや離れる。

→2 / 胸部: 外部のシルエットは、基礎技術のベースとされたガンダムのシルエットを色濃く残している。だが変形構造自体はないと、Ζガンダムのように胸部が大きく展開するような構造ではない。

→3 / 腹部: リ・ガズィは同じΖガンダムの再設計機であるリゼルよりも、Ζガンダムの面影を強く残している。両者もそのことが言え、グレネードランチャーを搭載するなど、共通性が見てとれる。

→4 / 腿部: 腿部もΖガンダムのシルエットを踏襲する。バッハ・エボン・システムとの合体時には、隨易の変更機構により脚部・つま先が折りたたまられる。

▶ RGZ-91

リ・ガズィ

Spec

・頭頂高: 20.5m ①本体重量: 24.7t ②全機重量: 55.2t ③ジェネレーター出力: 2,550kW
 ④スラスター総推力: 67,000kg (14,200kg×2, 11,000kg×2, 8,600kg×2)
 ⑤センサー/有効半径: 18,900m ⑥装甲材料: ガンダリウム合金
 ⑦武装: バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装グレネード・ランチャー×2、ハンドグレネード×3、バック・ウェポン・システム、他



Zガンダムの再設計機

RGZ-91・ガズィは、Zガンダムのコンセプトを元に、量産化を視野に入れて開発されたMSである。そのため名称もREFINE GUNDAM (ZETA)と、Zガンダムの再設計機を示すものとなっている。

とはいえるが、量産化は、複雑な構造と、生産コストがネックとなつた。Zガンダムという大きな影響力のあった機体を量産するというコンセプト自体は、ZプラスやRGZ-95リゼルをはじめ、多くの可能性が生まれており、きわめて有効といえた。その中でリ・ガズィが採用したコンセプトは、変形構造の核となるユニットを別体化したバック・ウェポン・システム (BWS) であった。

BWSは武装 (メガ・ビーム・キノン門、ビーム・キャノン2門) プロペラント・本体で構成され、リガズィと合体することで、かつてのウエイブライダーを思わせる宇宙戦闘機型のシリアルットになる。直接スラスターは装備されていないが、BWSとの合体によってスラスター噴射を一方方向に集中させ、可変MSの構造と同じメリットを実現する。

可変システムを簡易にしつつ、Zガンダムのメリットを最大限に活かすこと

と。それがリ・ガズィに課せられたた

一マだったのかもしれない。Zガンダムの長所といえば、ウェイブライダーによる機動性と、ハイ・メガ・ランチャーの攻撃力だったからだ。

Zガンダムは基礎的な機体性能が高かったこともあり、オールラウンダーのように扱われたが、本来は高速移動を活かした強襲 (大気圏外からの強襲も想定) や、長射程の攻撃能力による要害・対艦戦に適した機体といつてい。ビーム・キャノンの搭載や、作戦行動時間の増大を目指したプロペラントタンクの搭載など、Zガンダムの一般的なMSと何ら変わらない機体となつてしまふ点は否めない。

またリ・ガズィが前線へ投入された宇宙世紀0090年代では、すでにZガンダムの性能自体も過去のものとなり、ジエガ、ギラ、ドーガなどと較べて、ハイエンド機といふには性能的アドバンテージはわざかだ。それでも性能的に不利なネオ・ジオンのサイコミュー搭載型最新MS、ヤクト・ドーガ、強化人間のギュネイ・ガストと互角に渡り合えたのは、ハイロットが「アムロ・レイだった」ことが、最大の理由かもしれない。

最大の特徴であるバック・ウェポン・システム

バック・ウェポン・システムは、変形構造を外延ユニット化したもの。リ・ガズィ本体に装着することで、Zガンダムのウェイブライダー形態を彷彿とさせる形態となる。だが大気圏内再突入能力はなく、Zガンダムの強襲能力に焦点した再設計機であることがわかる。アクシズの先鋒を務めたシンからも、その運用方法が浮かび上ってくる。ユニット自体は背面から上半身を覆うもので、胸部をはじめ機体前面はシールドでカバーする構造となっている。ユニット自体には、武装、プロペラントが搭載されているのみで、推進用のスラスターなどは設置されていない。だが、可変MSの概念がそうだったように、機体のスラスターを一定方向に固定することで推力を集中させ、宇宙戦闘機的な運用が可能となっている。



設定画はP114へ

リ・ガズィの搭載兵器

ビーム・ライフル

ジェガンなどが使う次世代の連携ライフルと違い、Zガンダムのビーム・ライフルの発展形である。



ビーム・サーベル

これにジェガンなどの連携ライフルとは違う専用装備で、使用時に握部分が展開する。ランブルルの左右に一本ずつ収納されている。



グレネード・ランチャー

前脚部それそれに2本ずつ収納されている。腹部にもオプションでグレネード・ランチャーが装備可能である。



大口径ビーム・キャノン

バック・ウェポン・システムに搭載される固定武装。大口径ビーム・キャノンは、かつてのビーム・マガランチャーを思わせ、艦船にも大ダメージを与えることが可能である。





主なパイロット



アムロ・レイ



機体構成図

スペック比較

	RX-78 ガンドム	MG RX-78 サザン
全高	20.5m	22.0m
本体質量	24.7t	27.9t
ミサイル	2,550kW	2,990kW
スラスター	57,500kg	97,800kg
ミサイル	133,000kg	

→1／頭部：ファイン・アンテナ、パルクル・ボットなど、実戦的な部品構成が「ガンドム」を作れる。シアアとの戦いを想定して、導き出された形態なのだろうか。

→2／ランドセル：ファイン・ファンネルやニューアルバーナス・カーカなどのウェポン・ラックも兼ねる。ファイン・ファンネル装備のままで、ビーム・サーベルは左腕に装備。予備のサーベルは左腕上に装備される。

→3／コピット：シアアによりもたらされたサイコフレームも採用。これまでのサイコミッシュシステムよりも、強れた性能を実現する。シアアは「構成しないMS」と戦って勝利しても意味はないと思じ。アムロに随して向むかひをアーナイム・エクストロニクス社の「vガンダム開発チームにもたらした。

→4／オディ：可変システムなど、特徴を接種しない。これは時代的にMS本体のスペック向上に主眼が置かれた時代であり、音をうらうことよりも鈍感に性能アップを目指した結果であろう。これはジ・ガンにも見えることで、vガンダムにもシガムの基礎技術やハーフが使用されていることがうかがえる。

V G U N D A M

► RX-93

vガンダム

Spec

①頭頂高: 22.0m ②本体質量: 27.9t ③全備重量: 63.0t ④ジェネレーター出力: 2,980kW

⑤スラスター総推力: 97,800kg (18,300kg×4, 12,300kg×2) ⑥センサー有効半径: 21,300m

⑦装甲材質: ガンダリウム合材 ⑧武装: パルクル砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、ニューアルバーナス・カーカ、ファイン・ファンネル×6、ビーム・キャノン、ミサイル×4



アムロ自身が携わった初のNT専用ガンダム

連邦軍のエースパイロット、アムロ・レイ自身が開発に加わって完成した、初のニュータイプ専用ガンダム。開発はアムロの要請によってアナハイム、エレクトロニクス社の月のフォン・ブルーウィン工場で進められており、ロンド・ペルへと配備された。まさにアムロのために誕生したガンダムといえる。

特徴として、ガンダムタイプとして初のサイコミュ兵器であるフィン・ファンネルを搭載している点にある。フィン・ファンネルは、その名称どおりフィン状のファンネルで、ジェネレーターを内蔵し、通常のファンネルよりも大型だ。そのため搭載数も6基と少なめだが、通常のファンネルよりも強力なビームを放つ。サイコミュに連動してヒリアを展開するなど防御機能も備えている。

ニュータイプ専用装備を効率よく運用するために、ネオ・ゾンカからもたらされたサイコフレームが投入されているのもエポックだ。サイコミュチップを銷込んだ金属IIサイコフレームをコクピット周辺のフレームに採用することで、サイコミュの反応速度や機体の追従性向上に効果を發揮し、実戦の記録ではそれ以上の効果も見られた。このようにレガンダムは先端の装備

を搭載しているが、その開発には狂余曲折があった。宇宙世纪0090年代は、無数の実験機が猛威を奮ったグリーブス戦役期のMS。Zガンダムの再設計機、リ・ガズィの配備にすら難色を示す状況下で、ようやく開発がスタートした機体であった。わずか3カ月で完成させたという背景には、いち早く実戦への導入を求めるほかにも、十分な予算が確保できなかつたという理由があつたのかもしれない。

充実したニュータイプ用装備、その反面、苦しい台所事情を加味すると、レガンダムは既存の、もしくは研究開発中の機体をベースにしつつ、それをさらにサイコミュとファンネルに特化させた機体であつたという可能性も充分あるだろう。それは同時にクラフスの機体であるザザビーリーもカタログスペック上で差を生じることからも伺える。

実戦投下後、レガンダムはシャア搭乗のサザビーを撃破し、シャアの反乱を収束させるきっかけを生む機体となつた。さらに地球へ落としていくアクシズを、サイコフレームの共鳴現象によって押し返すなど、MSという存在の領域を超えた能力を發揮した。

フィン・ファンネルの効果

▼ ガンダムが装備するフィン・ファンネルは、ボディを折りたたんだ時の形状でビームを放つなど、その構造からも特殊な装置であることがわかる。一般的なファンネルよりも大型化しているのは、ジェネレーターを搭載しているためで、稼働時間が長く、出力も向上している。また、パイロットの危機を感知すると、バリアを展開することも可能である。ヤクト・ドーガとアジールという2機のニュータイプ専用機を相手にした際には、アムロが危機を感じた瞬間、5機のフィン・ファンネルがピラミッド状のバリアを形成、vガンダムを攻撃から守った。一方、通常のファンネルのように機体に既して充電することはできず、また大型ゆえに攻撃を受けやすいというデメリットも存在する。



設定画はP116へ

▼ ガンダムの搭載兵器

ビーム・ライフル



▼ ガンダム専用ライフル。長射程からも圧倒的な威力を誇り、薬筒の空鎗などと称される。低威力の連射モードに切り替えるなど、フレキシブルな運用が可能。



フィン・ファンネル

放熱板を思わせる板状のファンネル。從来よりもかなり大型で、活動時間やヒート出力も高い。大型ヒートにデメリットも多いが、脚部用としても機能するなど、これでのファンネルの常識を越えた使用法が可能。

ニューアイバー・ハイバー・バズーカ

大型実弾兵器。背面ランダセルにマウント可能。マウント状態でも発射することができる。

シールド

防護用装備としての機能だけではなく、ビーム・キャノンとミサイル4発を搭載する。

ビーム・サーベル

ランデルに装備されるメイント装備と、左腕に装備される予備サーベルがある。メイント装備は、ジェッジ等が使用する標準装備とは異なり、高出力の軍用品。



RUE 33

Spec

- 頂部高: 20.5m ●本体重量: 25.8t ●全備重量: 57.6t ●ジェネレーター出力: 2,220kW
- スラスター推進力: 81,500kgf ●センサー[※]航続半径: 14,920m ●装甲材質: ガンダリウム合金
- 武装: パルカン砲×2、ビームサーベル[※]、ビームライフル、グレネードランチャー、シールド内蔵式ビームキャノン、他

リティ マーセナス

ロンド・ペルに所属するパイロット。連邦政府初代首相ローナン・マーセナスの家系であるマーセナス家の嫡子。家に対する反発から軍人となったリセルをはじめ、ガンダムの系譜を継ぐMSを乗り継いでいく。

古事記スゴニク比較

	PSM-605 スチールジャッガ	PSZ-96 リセル	NZ-006 ウシャットリヤ
頭部高	19.2m	20.5m	22.3m
本体重量	28.4t	25.8t	29.7t
「ジネラーレ」	1,870kW	2,200kW	16,540kW
スロットル能力	62,000kg	B1,500kg	197,800kg

→1. **頭部**：頭部形状はゼンガンドームを思わせるが、センサユニットなどのパーツ類をジェガンと共通化することでコストダウンを実現している。隊長機などのC型は出力の影響か、もしくは別構造なためか、各部センサー色が一致感とは異なる。

→2／ボディ：メタスの変形構造を踏襲するも、メインパイプ3本で接続された簡潔な構造は改められ、Zガンダム+メタスのメリットを、あわせもつ ような構造となっている。

→3. 胸部：上胸部にはグレネード・ランチャーを装備。Ζガンダムの系譜を感じさせるポイントになっている

→4ノ脚部：乙ガンダムのシルエットを思わせる脚部には、メインエンジネーターが取められている。だが構造は乙ガンダムとは大きく異なり、膝を折りたたんで構成する。



Zの系譜を継ぐ もう1つの再設計機

グリーブス戦役後に活躍したZガンダムは、その基礎性能の高さから様々な手法で量産化が試みられてきた。しかしさらなる軍縮の波にさらされた宇宙世紀0090年代において、通常タイプのMSよりも高コスト化につながりやすい可変MSを継続するためには、構造から使用バーツをはじめとする全面的な見直しが必要であった。可変MSを巡る状況は、新たなフェーズに突入しようとしていたのだ。

リゼル・リファイン・ゼータ・ガンダム、エスコート・リーダー〔Refine Zeta Gundam Escort Leader〕も、そうした新時代の対応を迫られた可変MSの1機である。同じZガンダムの再設計機であるRGZ-91・ガイズが分離方式で変形機構をオミットしたケースと違い、変形システムの見直しによる低コスト化を目指した。

ベースとなつたのはZ計画で提案されたZガンダムの発展機Z-II。ウェイブライダー形態への変形に、メタス方式を採用することで変形の簡略化を計った機体である。この構造を継承しつつ、同時期の主力機であるジエガンと主要ハーツをの共通化を計ることで、Zガンダムの高コスト化から脱却。量

産が実現し、宇宙世紀0096年には、ロンド・ベルをはじめとする様々な部隊に配備されるに至つた。

また、ナーバスな操縦性を持つZ系の機体を一般兵でも扱えるように、あって限界性能を引き下げる措置が取られていたが、RGZ-95Cでは、こうしたデチューンからリゼルを解き放ち、スマスターのリミッター上限などを再調整。フレーム構造などが行われば、Z系本来の機動性を発揮できる機体として配備された。背面ユニットは一般機と異なり、大気圏内にも対応するワイヤーバインダー装備型に換装。メガ、ビーム、ランチャーを装備した特別仕様となつている。

リゼルが「生き残ること」ができた背景には、運用面を重視したことが大きい。ジエガンが主力MSとなつたこの時代、MSに様々な機能を内包するのではなく、装備や武装機能を内蔵一般的な移動・戦闘に関して、機体自体にスマスター・やプロペラントを内蔵せずに、サブ・フライ特・システムを活用する方式が採られた。

そのためリゼルは、單体としてのシステムをスマスター化する形態の「ビーム型の可変機」という役目だけではなく、ジエガンのサブ・フライ特・システムとして機能することで、総体的に柔軟で効率的な運用が可能となつた。ある意味、可変機の新世代機といふことができるだろ。

バックパックから見るリゼルの運用

リゼルは戦闘機のバックパックキオプションが用意され、フレキシブルな運用が可能となっている。リゼルが標準装備しているバックパックは主に宇宙用をメインとしたもの。一方で隕石機が使用するウイング、バインダーを装備したタイプは、大気圏内での飛行も可能となっている。大気圏再突入能力はオミットされているが、パリュートなどの進化を加味したうえで、オミットされたと思われるが妥当だろう。こうした用途に応じてバックパックを換装するという構造も、Zガンダムからのコストダウンを実現した要因となっている。バックパックにはそれぞれMS用のグリップが受けられており、ほとんどのパリューションにサブ・フライ特・システムとしての運用が想定されていることがうかがえる。



リゼルの搭載兵器

ビーム・ライフル

Zガンダムの兵装を受け継ぐロング形状のライフル、通常モードと高出力モードなどの切り替わりが可能。高出力時は、その発射時の様子からギロチン・バーと称される。また先端部にビーム刃を発生することができる。



シールド・ビーム・キャノン

先端部分に3点バースト方式のビーム・キャノンを搭載。変形時の武装としても活躍する。また直接戦闘時には、ケーブル状態のブレードを武器として使用できる。



ビーム・サーベル

前腕部に2種ずつ装備されている。グレネードランチャーとの連携装備。



グレネード・ランチャー

前腕部に2発ずつ搭載されている。Zガンダムやカズミに搭載された戦闘兵器。



メガ・ビーム・ランチャー

主に隕石機が使用する長距離支援ビーム砲。本体をユニットに接続され、ランチャーを保持すると同時に、MS本体のジェネレーターからのエネルギー供給を行う、そのため連続して高出力のビームを放つことが可能。



ケーラ・スウ

ロンド・ベルのMS隊に所属する女性パイロット。当初はジェガンに搭乗していたが、その後には特にペイントカラーやカスタマイズなどを施されていない機体。リ・ガズィに見るのはアムロがvガンダムへ乗り換えてからのこと。



ハサウェイ・ノア

ブライト・ノアの息子。黒面でラーラ・カイラムに乗り込み、クエス・バラヤを救いたいという想いでジェガンで出撃した。正規のパイロット訓練は受けていないが、シミュレーションや実戦でも生き残るなど、非凡な才能を見せている。

スペック比較		
RGM-89 ジムⅡ	RGM-89 ジェガン	AMG-519 ギニー・ドーガ
頭頂高 18.0m	19.0m	20.0m
本体重量 38.6t	21.3t	23.0t
ジェネレーター 1,560kW	1,870kW	2,160kW
スラスター出力 81,200kg	61,400kg	54,000kg

► RGM-89 ジェガン

Spec

◎頭頂高: 19.0m ◎本体重量: 21.3t ◎全備重量: 47.3t ◎ジェネレーター出力: 1,870kW
◎スラスター総推力: 61,400kg ◎センサー有効半径: 14,200m ◎装甲材質: チタン合金セラミック複合材 ◎武装: パルカン砲、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハンド・グレネイド×3、2連装ミサイルランチャー×2



→ 1. 頭部: ジム系を想ひせるセンサーコード、リモコン各種各様の機器と充電池。センサー内部は、ジム系のやうなラインアートではなく、シングルカラーフェースとなっている。

→ 2. 頭部: 長く運用されるジエガンは、時代によってマイナーチェンジが施される。初期型からD型になるとあたっては、両肩や腰間部などに冷却装置マウントが追加されている。

→ 3. バックパック: ガンダムMkIIからの転用を想ねるバックパック形状。スラスターは大出力のメインスラスターに、サブスラスターが組み合わされる。

→ 4. 腹部: 腹部の機器形状は簡略化が行われており、シルエットはジム系とは大きく異なっている。

新世代のスタンダードを 目指す量産機

宇宙世紀0090年代初頭に採用された、新世代の量産型MS。

本機の開発において大きな転換点となつたのは、RGM-79ジムの系譜にあるRGMナンバーの機体を、アナハイム、エレクトロニクス社が手掛けたことである。同社はグリップス戦役期にネモを送り出しているが、これはリック・ディア由来のジオン系技術が盛り込まれており、純粹なジム系の機体とはいえないかった。

次の世代に求められるスタンダードMSとはなにか？ アナハイム、エレクトロニクス社は、宇宙世紀0090年代にあるべきRGM系の姿と向き合っている。

RGM-89ジエガンが開発された宇宙世紀0080年代から0090年代初頭は、シャアの反乱となる第二次ネオ・ジオン戦争以外の立つた戦争ではなく、連邦軍は軍縮化に意識を向けていた。シャアが興した新生ネオ・ジオンは、以前に比べると圧倒的に小さな組織であり、戦闘の規模がより小規模化したことでも影響しているのかもしれない。

また、多数の優秀なパイロットが失われたことで、ハイエンドなエース機よりも、MSの基本性能を底上げする

方向性へ向かったとしても不思議ではない。誰にでも扱いやすく、結果として部隊の平均的な戦闘能力を向上させる機体……。こうした流れの中で登場したジエガンは、いわばベストオブスタンダードを目指した機体だった。こうした方向性は新生ネオ・ジオンが使用するAMS-119ギフード・ドーガも同様であり、第2次ネオ・ジオン戦争で恐竜化を遂げた高出力、高火力を誇るハイパワーモードMS群は消えつった。

構造面でも、装甲材質などはチタン合金セラミック複合材へ変更するなど、積極的なコストダウンが図られる一方、機体設計自体は大幅な進化を遂げておらず、大幅な軽量化を実現している。

一方、運用面に関しては、ベース、ジャバーハーとの運動を基本としている点も注目される。これはスラスター数や搭載プロペラファン量の増大を防ぎ、不必要な高出力を避けたための措置であつたと想われる。

操縦性もフレンドリーで、パイロット

ジエガンの豊富なバリエーション

RGM-89DジエガンD型

ジエガンにスタークジエガン用の増加装甲、追加武装を装備するために改修が行われた機体。肩部装甲は大幅な形状変更が行われ、スラスター形状も変更。腰部にも増加装甲を装備するためのウイングが設けられる。MSの基本性能に変化がないが、不評だったアーモムレイカから通常のコントロールスティックへの変更が行われるなど、実質的なマイナーチェンジ機となつた。



RGM-89Sスタークジエガン

特務仕様と呼称され、熟練パイロットや特殊部隊に優先的に配備されるジエガンの強化装備型。主力機をジエガンに一元化する流れは、前線のパイロットからの高性能開発の済みが相次ぐという状況を招き、こうした状況に対応するためにジエガンの強化ということでの要求に応えた。肩部には3連装ミサイルランチャーを装備し、ほかにもビーム・ライフルやバズーカなど、用途に応じて選択が可能。

RGM-89De ジエガン（エコーズ仕様）

パイザー式追加センサー、胸部に増加装甲を備えた。特殊部隊エコーズ用のカスタム機。

ジエガンの搭載兵器

ビーム・ライフル

標準的なビーム・ライフル。突出した性能はないが、取り回しに優れている。追跡連邦軍の標準装備として、リールなどが装備するケースもある。



ビーム・サーベル

腰部右側のウエポンラックに1本装備されている連邦軍用兵器。これも連邦軍の標準装備となる。



グレネード・ラック

腰部右側のウエポンラックに3基装備されている実弾兵器。

シールド・ミサイル

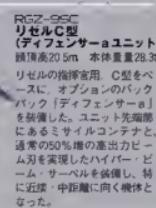
防護用装備ではあるが、両サイドに2門ずつミサイルを装備している。



宇宙世紀0090年代の バリエーション機、試作機



軍縮の時代と言われた宇宙世紀0090年代。その時代に生まれた試作機や実験機の特徴は、のちに正式に生産された機体と密接な関わりを持つ機体が多いという点にある。またバリエーション機として、実現化した機体も少なくない。ここではそれらの機体を紹介していこう。



ドーベン・ウルフ



RX-93

vガンダム ダブル・フィン・ ファンネル装備型

vガンダムの強化目的ブラン。右側のビーム・サーベルマウントをフィン・ファンネルに変更し、合計12種ものフィン・ファンネルが間に合わせ、6基装備のままロールアウトされた。



RX-93-v2 Hi-vガンダム

小说「機動戦士vガンダム 遺傳のシャアヘルトーチカ・チルドレン」で描かれた、もう1つのvガンダム。翼のように装備されたフィン・ファンネルが特徴で、青白のカラーリングも異なる。搭載されるサイコフレームは、5mmガラス防護板で入手したサイコ・ドーカのもの。

▼
ガラス
ドーカ
93

RX-94

重量型vガンダム

ジェガムに代わる主力機MSとして提案された。武銃はフィン・ファンネルとインコムが選べ、二式一タイプと一般パイロットのどちらにも対応可能になる予定であった。



FA-93HWS

vガンダム ヘビーウエポンシステム

vガンダムの強化プランで、「F.S.W.S.」というフルアーマー化を行ったもの。装甲を強化したうえで、機動力の低下を防ぐために、装甲はプロペラシントヒュラスターでユニット化した。武銃はハイバー・メガ・ライフルと、ハイバー・メガ・シールド。



MSN-06 シナンジュ

MSN-06S シナンジュ・スタイン

全高22.6m
本体重量23.1t

「UC計画」におけるサイコフレームの強度と遮断性のテストのための機体として開発された。隕界性能のテスト用として、パイロットの搭乗は想定されていないというが、ある特定の人間向けに作られたとの説がある。名称のスキンは虎石の意味。

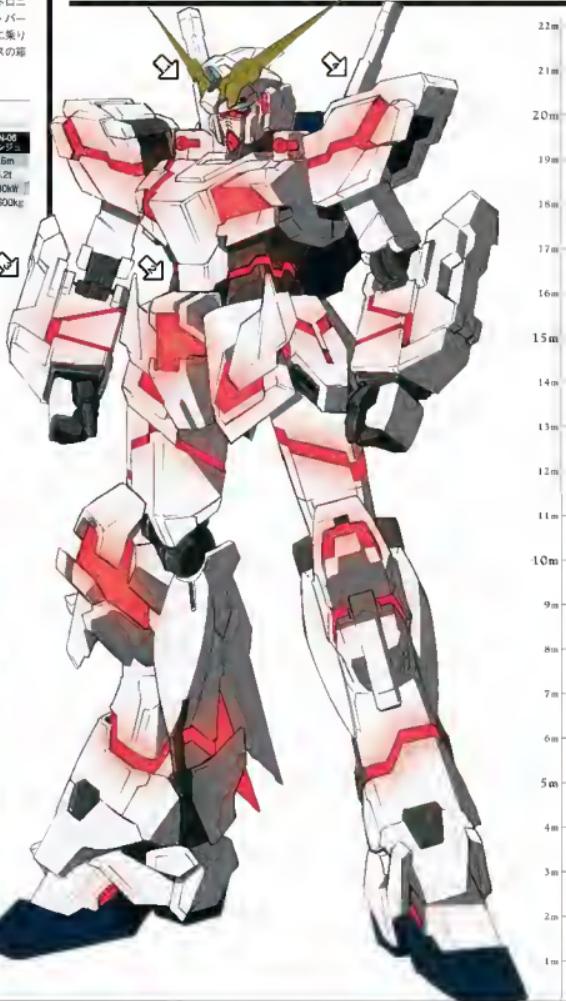
RX-0 ユニコーンガンダム

RX-0

ユニコーンガンダム

SpwC

①頭頂高：19.7m（テストロイモード：21.7m） ②本体重量：23.7t ③全備重量：42.7t ④ジエネレーター出力：3,480kW（ユニコーンモード時） ⑤スラスター駆動力：142,600kg（ユニコーンモード時） ⑥センサー有効半径：22,000m ⑦装甲材質：ガンダリウム合金 ⑧武装：バルカン砲×2、ビーム・サーベル×4、ビーム・マグナム、ハイパーパスカ、ビーム・ガトリングガン、他



バナージ・リンクス

インダストリアルアーツのアナハイム・エレクトロニクス工業専門学校に通う学生。オーデリー・バーンを救出した際、機動ユニコーンガンダムに乗り込み、以後パイロットとして活躍。ラプラスの箱を送る時に巻き込まれていく。

※ユニコーンガンダムのみ
テストロイモードは計測不能。

→1 胸部：通常のユニコーンモード時は、一角獣を見せる形状だが、NT-Dが発動するとアンテナが展開、ガンダムムカイのキュイス形态へと変身を遂げる。

→2 オディ：シルエットはRX-7を思わせるが、胸窓はダクト形状などではなく、実形時には内部のサイコフレームが赤熱化して露出。発動時には全長が変形するほど。サイコフレームが強襲している。

→3 背部：両腰に1本ずつビーム・サーベルが搭載している。腕部に修飾したままビーム刀を発生して攻撃すること可能。

→4 /ハイパック：ユニコーンモード発動時には、折りたまれていたビーム・サーベルが展開。内部のサイコフレームが露出する。

UC計画の根幹を成す 対ニュー・タイプ専用機

地球連邦軍再編計画の一環である「UC計画」の中核として開発された

試作MS。地球連邦軍の委託により、アーハイム・エレクトロニクス社が極秘裏に開発を担当、計画自体は、最終テストがビスト財團の管轄下にあるイ

ンダストリアル・内のコロニー建造プロジェクト、メガラニカで行われていたようだ。同財團が中心となって開発は進められた。

本機の最大の特徴は、機体の根幹を成すムーバブル・フレームに、サイコフレームを採用したフル・サイコフレームにある。サイコフレームは第二次ネオ・ジオン戦争において、RX-93

レガンダム、MSN-04サザビーに試験的に導入された新素材で、母材となる金属にサイコミュチップを鍛込むこと

で、サイコミュニシスシステムの強化を計り、ニュータイプ能力を効果的に活用することが可能であった。レガンダム、サザビーでは、もともとバイロットの影響を受ける「コクピット周辺のフレーム」に使われたが、ユニコーン・ガンダムでは、ムーバブル・フレームすべてがサイコフレームで構成された。いわば全身がサイコミュシステムと呼べる機体である。一方、サイコフレーム自体がどのような金属を使用しているか

は不明だが、フレームに使用されるほど強度をもつ材質であるな。ガンドリウム合金系金属、もしくはそれに

近いものだと考えるのは自然だろう。

ユニコーンガンダムを特徴づけるのは、通常時は、角獣を思わせるユニコーンモードと呼ばれる形態だが、NT-Dと呼ばれるシステムが発動した際には、デストロイモードへと「変身」を遂げる点にある。デストロイモードは、全身のフレームが赤く輝く

機動性、反応速度などが飛躍的に向上。またサイコミュニシスシステムは、他バイロットが制御するサイコミュニシス兵器に干渉するなどの力を發揮する。

本機は一年戦争から始まったMS十数機に導入された新素材で、母材となる金属にサイコミュチップを鍛込むことで、サイコミュニシスシステムの強化を計り、ニュータイプ能力を効果的に活用することが可能であった。レガンダム、サザビーでは、もともとバイロットの影響を受ける「コクピット周辺のフレーム」に使われたが、ユニコーン・ガンダムでは、ムーバブル・フレームすべてがサイコフレームで構成された。いわば全身がサイコミュシステムと呼べる機体である。一方、サイコフレーム自体がどのような金属を使用しているか

武装を強化したフルアーマー・ユニコーンガンダム

バナージの友人であるタクヤ・イレイが提案し、ネエル・アーガマに採用されていた武器、武装を搭載した。武装はハイバー・ビーム・ジャベリoux1、ビーム・マグナムx1、ビーム・ガトリングガンx6、ハイパー・バズーカx2、グレネードランチャー類、シールドx3を装備。

さらに垂度による機動性の低下を補うために、94式ペース・ジャバのスラスターを装備している。本來フルウェポン等の名がふさわしいが、タクヤが「フルアーマー」として提案したために、フルアーマーユニコーンと呼称された。全武装状態でデストロイモードへの変身も可能で、急造の装備ではあるが優れた通用性を確保する。



→ 設定画はP120へ

武器・装備

ビーム・マグナム

通常のビーム・ライフル4発分のカートリッジを使用した高出力ビーム兵器。通常せどもも全波長でMSを破壊するほど威力を持つ。だが弾薬数は少なく、高すぎる威力から指揮は認定される。



ビーム・サーベル

バックパック左右と脚間に合計4本装備された近接ビーム兵器。基部が回転し、トンファーのような使い方も可能である。



シールド

「フィルドジェネレーター」を採用した強固な防御装備。NT-D発動時には、サイコフレームが展開し、さらに防御力を向上させる。



ハイバー・バズーカ

大型実弾兵器。広範囲を攻撃できるペアリング弾など特殊な弾も使用可能。



ビーム・ガトリングガン

本来はクシャトリヤ用のもので、「袖付き」に適応された際に装備された。





主なパイロット
マリーダ・クルス（上）
リディ・マーセナス（下）

連邦軍に捕らわれたマリーダは、オーガスタ研究所へ送られ、ブル・トエルブとしてバンシィのパイロットとなるべく再調整を施された。バナーとヒン奈マに救出されたのは、復讐心に燃えるリディがパイロットを務める。

機体比較		
MSN-01(A) アーラブス	RX-0 ルンバーン・ベガ	HAS-06 アーラクニ
高さ 全高	19.6m	19.7m
全高	27.2m	24.1m
重量 全重	2,500kg	3,480kg ^W
スラスター出力	92,400kgf ^W	142,600kgf ^W
スラスター出力	92,400kgf ^W	142,600kgf ^W

※ユニコーンガンダムの
デストロイモード時は計測不能。

UNICORN GUNDAM 02 BANSHEE

RX-0

ユニコーンガンダム2号機 バンシィ

Spec

◎頭頂高：19.7m（デストロイモード：21.7m） ◎本体重量：24.0t ◎全備重量：46.7t ◎ジェネレーター出力：3,480kW（ユニコーンモード時） ◎スラスター総出力：142,600kgf（ユニコーンモード時） ◎センサー有効半径：23,500m ◎装甲材質：ガンダリウム合金 ◎パルカン砲×2、ビームサーベル×4、アームド・アーマーBS、アームド・アーマーVN



■1／頭部：ユニコーンガンダムと同様、NT-D発動時にガンドムフェイズへ変化する。一例點を複数した1号機と違い、2号機は獅子の頭をモチーフとなっている。

■2／ボディ：頭部以外は、基本的に1号機と変わらない。サイコフレームは1号機が赤く輝くことに對し、2号機では金色に輝く。

■3／コグビット：1号機と同様、NT-D発動時にコグビット内部も変形する。1号機の場合は、ラプラスの箱の所在を示す丸十が描かれていたところとなる。

■4／脚部：ダーク系のカーボン、黄金のサイコフレーム以外は変わらない。NT-D発動時には各脚のサイコフレームが振動され、全脚が変化する。

一角獸を駆る 黄金の獅子

R-X-0ユニコーンガンダムの2号機だが、一部仕様の違ういわば兄弟機的な機体である。

ムーバブル・フレームにサイコフレームを採用したフル・サイコフレーム構造や、対ニュータイプ戦闘に主眼を置いたコンセプトは1号機を踏襲。外観から見てとれる大きな違いは、カラーリングと頭部のブレードアンテナ程度だが、内身についての差は想像以上に大きいものである。本機は1号機に先駆して地球のオーガスタ研究所に送られ、重力下試験をはじめとする想定されたプログラムを実施。レギュラ度だが、内身についての差は想像以上に大きいものである。本機は1号機に先駆して地球のオーガスタ研究所に送られ、重力下試験をはじめとする想定されたプログラムを実施。レギュラ

ーで実戦に投入された1号機とは異なる。本機は最終調整が施されたユニコーンガンダムの完成形といえるものだ。このため1号機との差は、特に武装面において顕著に表れている。ユニコーンガンダムタイプの基本装備であるビーム・マグナムはビーム・ライフルの4倍といえる威力を誇るが、撃戦能力という意味では十分とはいえない。そのため正式な運用がなされない1号機は、旧ネオ・ジオン勢力や他機種の武装を用いるなど、運用面での問題点が付きまとった。その点、正式に運用されているパンシイは専用武器の開発も継続されており、アーム

ド・アーマーと呼ばれるサイコフレーム装備が用意された。初陣ではバイロットにブル・トウルブ（マリーダ・クルス）を据え、1号機単体との戦闘を主眼においたアーモド・アーマー・BS（偏向ビーム兵器）とVN（超振動兵器）を使用。その後、リディ・マーセナスがバイロットとして出撃した際には（機体名称・パンシイ・ノルン）、アームド・アーマード・アーマー・XC（シールド／スラスター／メガ・キャノン）、アームド・アーマー・XC（装備サイコフレームモード）が装備されるなど、戦場に合わせたフレキシブルな対応が可能なとなっている。

このリディの乗った機体は2号機パンシイのマイナーチェンジ版、パンシイ・ノルンであり、ビーム・マグナム下部にリボルビング・ランチャーパーを採用。これは用途に合わせた様々なカーリトリッジを装填することが可能で、ビーム・マグナムの継続戦闘能力に対す

る1つの回答といえるかもしれない。本来、対ニュータイプ・対サイコユニコーンを想定したユニコーンガンダムタイプの兵器を装備した。その後リディ搭乗時には、より柔軟な対応を目指した装備へと変更がされている。特にリボルビング・ランチャーパーとメガ・キャノンを装備した。背面に装着する形で使用する。

戦場に合わせて変化するパンシイのスタイル

戦いが新たな局面を迎えるごとに、正式運用されているパンシイの優位性が確立。マリーダが搭乗した際には、対1号機に的を絞った武闘を搭載し、その後リディ搭乗時には、より柔軟な対応を目指した装備へと変更がされている。特にリボルビング・ランチャーパーとメガ・キャノンを装備した。背面に装着する形で使用する。

パンシイ・ノルン



武器・装備

アームド・アーマー・BS

右腕に装着する偏向ビーム・スマート・ガン。空間データをサイコミンで感知し、高精度の予測照準を実現。まるで説教兵兵のように効率的に撃つことができる。



アームド・アーマー・VN

左腕に装着する格闘武器。強靭なサイコフレームの特性を利用して、超運動によってあらゆる物質を破壊する。データブラーを一振りで粉砕するなど、通常のMSでは太刀打ちできない。



アームド・アーマー・DE

シールドの機能搭載を目的とした強化ユニット。展開式スラスターとメガ・キャノンを装備した。背面に装着する形で使用する。



リボルビング・ランチャー

ビーム・マグナムの銃身下部にセッタされた武器。カートリッジ内には4種類の異なる武装をセットすることができる。



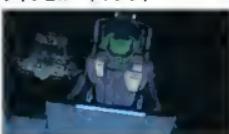
◆ 設定画はP120へ



主なパイロット



ナイジェル・ギャレット



ダリル・マッギネス



ワツ・ステッピー

トライスター

ロード・ペルのエースパイロット部隊。ナイジェル、ダリル、ワツの3人で構成される。本来はユニコーンガンダムに搭乗予定だったが、1号機が想定外の運用となり、計画が中断となったため、ジエスタのパイロットとなった。

spec comparison



スベック比較

	RX-0	ユニコーン	ジエスタ	ウォームル
機体名	ユニコーン	ジエスター	ジエスター	ジエスター
本体質量	23.7t	34.0t	21.8t	
ジエスター出力	3,480kW ¹⁾	2,710kW ²⁾	2,470kW ³⁾	
スラスター出力	142,600kgf	69,030kgf	62,100kgf	

※ユニコーンガンダムの
テストロイド時は計測不能。

→1／頭部：ジエスターのシルエットを受け継ぐセンサーや、カメラを搭載。ユニコーンガンダムの頭部としての目的を果たすため、バイザーアイのセンサーを備えるなど全般的な機能性の向上が行われている。

→2／ボディ：ジエスターと比較して、胸部を覆うように装甲が取り組む形状。対弾性性能は大幅に向している。

→3／腕部：左上腕部はサベルラップとなっており、ビーム・サーベルが格納されている。右上腕部は、ライフルの予備マガジンが搭載される。シールドはアームユニットを介してパックパックに装備されるという特殊なタイプ。

→4／パックパック：各種オプションや増加装甲で機体質量が増加し、それを補うために専用のパックパックが開発された。

▶ RGM-96X

ジエスター

Spec

◎頭頂高：19.3m ◎本体質量：24.8t ◎全備重量：57.2t ◎ジエスター出力：2,710kW ◎スラスター総推力：89,030kgf ◎センサー・有効半径：14,200m ◎武装：バルカン砲、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハンド・グレネード×6、他



ユニコーンガンダムの
露払いを務める随伴機

地球連邦軍再編のために進める
「UC計画」。その中核となるRX-0
ユニコーンガンダムは、同世代のMS
の中で圧倒的なスペックを誇っている
だが、戦いに特化させた点は否め
ない。戦いに機能を特化させた点は否め
ないNT-Dシステムは、運用が限定され
ては否めなかつた。

ユニアード・ラングダンダムが競争性「ヨーロッパ」タイプの戦闘を行なう際、ユニアード・ラングダンダムの機動は最大限発揮させたため、ヨニアード・ラングダンダムが自身の消耗を防ぐうえで、一般戦力をも掲示するための随伴機は必然であり、その開発は、ユニアード・ラングダンダムの開発と並行して進んでいた。最低限求められるのは、ユニアード・ラングダンダムに追従出来るスベックを持つこと。とはいえ車輪が進む宇宙世纪0.090年代末期において、主力機はジエガーンへの転換が進められていたが、本機への移行をさせずジエガーンの基礎技術がベースとされた。そこで「プラス」に作用したのは、ジエガーンに豊富なバリエーションやオプション、ヨンバークが存在していた点にある。たとえば特務仕様のスタークジエガーンは、クシャタリヤとの戦闘において、

ファンネル対策を想定した戦闘を見せている。サイコミュ遠隔操作兵器は時代を席巻したが、それゆえ対策が普及してしまったとしても不思議ではない。こうしたデータをフィードバックすることで、スタンダードなジエガンはよりスペシャルなジエスターへと発展する。装甲、センサー類の強化をはじめ、車両設計のスラスターを採用することで大幅な機動性の向上を果たした。その総合性能はRX-93νガンダムに近い程のものとなつた。

武装はジエガンやリザルとといった連邦軍主力機と規格を統一するものの出力の向上や拡張性の追加といった仕様がなされており、重戦主義のジエスター型キャノンをはじめ様々なバリエーションが存在する点も、ベースとなつたジエガンを引き継いでいる。

宇宙世纪0096年には新型機評価試験のため、ロンド・ベル隊の旗艦ラーニ・カイラムへと12機が配備された。ネオ・ジオン残党が襲来したトリントン基地襲撃戦においては、エースパイロット部隊であるトライスターの搭乗によって機動戦を圧倒するなど、ヨーロッパンダムの随伴機としてのスバルは現状果たせずにいる。

しかし、結果的に、ヨニコーンガンダム1号機がレギュラーな存在となつたため、本来の随伴機としての活躍

パリエーションを想定したジェヌタの開發背景

ユニーク・コーンガンダムが敵性ニュータイプ1対1で戦うシチュエーションを読むことが、ジェストに譲られる使命である。それゆえ様々なシチュエーションで一般MSを圧倒するため、基本性能の向上ではなく、多機能なオプションが用意されている。ジェスト・キィンゼンも、そのバリエーションの1つで、多くの武装を装備した重装備タイプとなっている。その武装は、レーム・キィンに4種選マルチラザルチャ・ハンド・グレネードの爆撃、壁面の強化など。更に装用して運用する機体が開発されたわけではなく、これもジェストのオプション装備として開発された点が、時代性をあらわしている。各部の増加バーツは、構築部材にてバージョンすることも可能となっている。

ジャスター・キャノン



→ 設定画はP121へ

武器、夢境



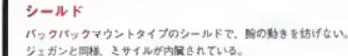
ピーム・ライフル

ジエガンが使用するタイプよりも長銃身タイプだが、カートリッジは統一規格でジエガンと同タイプを使用する。通常射撃モードのほか、連射モードを使用することも可能。



ハンド・グレネード

両腰に3基ずつ収納されている投擲武器。



UC計画とは？

ヨニコーンガンダムの開発計画として進められたプロジェクト、UC計画。新型MS開発の計画としてだけではなく、その誕生の背景には宇宙世紀の今後を占う重要な秘密が隠されている。

宇宙世紀0100年を目指し
恐るべき計画が実行される

タイプを抹殺するという矛盾を抱えて
いるが、それゆえNT-Dは強化人間
で稼動することがふさわしいという。

宇宙世紀0100年、それは宇宙へと進出した人類が迎える新たな世紀

宇宙世紀0100年には、ジオン共和国が自治権を放棄し、連邦構成国家

大きな節目となるこのタイミングに、地球連邦政府は宇宙世紀0095年の中期防衛整備計画において、連邦宇宙軍再編計画を発表。その概要は

に編入される予定であり、選択政府は思想としても存在としても、完全にジオニズムを根絶することが可能となる。一方でユニーク・ガンダムには、連



あくまでニコニコ
一ガンダムの
生体システムとして、
さきには怒りに身を任せ
て戦ったバーチ
だ。だが二回と向かした戦いの中、初めて自らの
意でNT-Dを発生させる。それは悔しみや怒りを止
めたいという思い。これはNT-Dシステムにとってはサ
レギュレーション事業であり、連邦軍の悉れたニータイ
の力だった。



サイコミュなど
ニータイプの
能力に反応する
ユニークなガン
ダム。クシャント
リやファンネ
ルを乗っ取り、制御下において。ムーバブル・フレ
ームのフル・サイコフレームであるということは、つま
り體全体がサイコミュシステムであることに嬉しい
ですね。一般的なサイコミュシステムを模倣した惟
一の実車であることはさすがでした。

計画の目的は、次期フラッグシップとなるRX-0ユニコーンガンダムと、それに伴う随伴機の開発がメインとなされた。が、本来の目的はニュータイプの抹殺、ひいてはディオン思想の完全抹消を目指すプロジェクトであった。

本来、プロジェクトが想定した性能を持つ機体であるならば、ガンダムタムタムが利用された感は否めない。かつてテ
ィブである必要はない。しかし、一年戦争を勝利に導き、ジオンを消滅させ
る象徴として英雄たるガンダムの存在が利用された感は否めない。

向きはニュータイプドライブと表記され
たが、本質はニュータイプ・テストロ
イヤー、つまりはジョン・ダイキン
が唱えたニュータイプ思想そのもの。
抹殺を行ったためのシステムである。
二ユータイプによって稼働するサイ
コミュシステムを使いながら、ニュー

ためにガンダムMK-IIを開発した状況と同様、ガンダムである意味はもはやプロパガンダとしての役割でしかなかつたのかもしれない。一方で、ガンダムは時代を変える存在として、幾多の戦場に奇跡をもたらしてきた。それだけに、ユニコーンガンダムも同様であった。

宇宙世紀0105年代の ガンダムたち

マフティー動乱で激突した2機の兄弟機



一年戦争、グリップス戦役、第一次、第二次ネオ・ジオン戦争、ラプラスの箱を巡る攻防……。繰り返されてきた戦争の悲劇は、宇宙世紀0100年を迎えても繰り返される。

最先端装備をおこられた 記念すべきガンダム

ペーネロペー

アナハイム・エレクトロニクス社製ガンダム開発20周年を記念して開発されたRX-104オデッセイズガンダムに、FF(フィックスド・フライ)ユニット、ペーネロペーユニットを装備した状態がペーネロペーと呼ばれる。ミノフスキークラフトによって車載での飛行が可能だが、空気抵抗を考慮したビーム・パワーアーが未完成のため、高速飛行時はライトフォームに変形することが必要である。この時代の特徴的なサイコミュ兵器、ファンネル・サイルを採用する。パイロットは、地球連邦軍所属のレン、イエム。

宇宙世紀0105年、大規模大戦は過去のものとなつたが、連邦政府の腐敗と圧政は変わらず、紛争の火種はくすぶり続けていた。連邦政府の特権階級を襲撃する秘密結社「マフティー」、ナビ・ユ・エリン(通称マフティー)の結成、そしてのちにマフティー動乱と語られる紛争の発生も、必然のことであつたのかもしれない。

この時代においても戦争の力ぎを握る存在はMSであり、宇宙世紀0090年代に開発されたMS群の系譜を継ぐ機体が中心となつてている。連邦軍サイコミュシステムを使用したファンネル・ミサイルが搭載されている。専用操作ビーム兵器としてのファンネルは、その対策法の確立によりすでに過去のものとなり、結果としてサイコミュの技術の行き詰った先が、ミノフスキーキー・クラフトであり、マフティーが使用するM-02R メンサーはギラ・ドーガの再設計機である。マフティーが使用するM-02R メンサーはギラ・ドーガの再設計機である。

三ガンダム
マフティーの要請によって開発された試作MS。ペーネロペーとは違い、機体内部にミノフスキーキー・クラフトユニットを搭載する。またペーネロペーでは未完成であったビーム・パワーアーが完成しており、同設計による空気抵抗減效果により、MS系譜のまま飛行可能である。ビーム・パワーアーの技術自体は、すでにクロボーン・バンガードや次世代の連邦軍機体も採用するが、あくまで防衛兵挺としてのもので、ミガンダムやペーネロペーのようなく飛行用の補助機器としての意味合いとはニュアンスが異なっている。パイロットは、マフティーの指導者、マフティー、ナビ・ユ・エリンことハサウェイ・ノア。

状況としては宇宙世紀0090年代の軍縮時代からあまり変化がないことから、アナハイム・エレクトロニクス社にとって宇宙世紀0105年は、同社創立20周年という記念すべき年。ここで送り出されたペーネロペーは、ある種この時代の最新技術を体現する機体だといえるかも知れない。

同機にはMSとして初めてミノフスキーキー・クラフトが搭載されたほか、サイコミュシステムを使用したファンネル・ミサイルが搭載されている。専用操作ビーム兵器としてのファンネルは、その対策法の確立によりすでに過去のものとなり、結果としてサイコミュの技術の行き詰った先が、ミノフスキーキー・クラフトであり、マフティーが使用するM-02R メンサーはギラ・ドーガの再設計機である。アナハイム・エレクトロニクス社が連邦とマフティーのミリタリーバランスを制御しようとしたかは走かではないが、この2機の性能に迫るMSは開発されることはなかつた。両機の系譜を受け継ぐ機体も、これ以降開発されることなく、小型化という別の革新を迎えることになる。

これは、ともすればかつての恐龍的化と揶揄された時代へ巻き戻つたような印象をうら受ける。その背景には、同社の技術を誇示するための「デモンストレーション的な意味も込められていたのかもしれない。マフティーの依頼によって建造されたミガンダムは、ペーネロペーがMSと外部ユニットによって成立していた構造とは異なり、ミノフスキーキー・クラフトを初めてとするすべてのユニットを本体に内蔵した、いわばペーネロペーの発展機である。アナハイム・エレクトロニクス社が連邦とマフティーのミリタリーバランスを制御しようとしたかは走かではないが、この2機の性能に迫るMSは開発されることはなかつた。両機の系譜を受け継ぐ機体も、これ以降開発されることなく、小型化という別の革新を迎えることになる。





MSA-003
前期グリップス戦後
ダカール防衛部隊 カラー

設定説定

エーゴによるジャブロー陣下作戦は失敗に終わったが、その後、地上用に改修された多くの新規MSが劇的な戦力しかけたぬカラバに参戦され、地上に付けるミーティングMSの駆逐をカラバが忍えるようにがっつっていた。その他の主力がMSA-003モードであり、それまでの主力であったGM-79RFも巨体に比べて対戦性強化や戦闘能力アップしており、専用武装装備を改め代わりに多くの在来武装を装備する汎用性も高く、カラバの様な隊伍組織にあっては既に使い込む機体であった。

塗装解説

既存の中程であるダカールを押さえたカラバは豪傑を狙うティーンズ例の対戦用機体が本格化配備。中でもMSA-003から繰り出される新規MSに対応する機体として多く登場された。ティーンズ側も可変MSを投入し直面するカラバの街頭に進入することを個体化したカラバ(開拓開拓した隊員では不利と見て市街地に進み迎撃する船員を切った)。この機体には市街地迷彩が施され、少ない戦力の消耗を防ぐ努力が払はれていた。この機体は初期のカラバの前衛機といえる機体を探査、雨戻りや四回戻り津波を駆けている。既存地帯にいるダカールの市街と周辺地帯に合流した船員は、ドット迷彩のバーンで薄いグレー(ライトグレー)、ライトブルーの3色が使用されている。駆逐隊は多くのGM-79RF(ジーフ)が投入されたことで、システム部であるMSA-003も船員を防ぐため別途マークを入れた。この機体では脚部のスカイブルーの船員、ブルーとスカイブルー、グリーンの車両各部に対して対応。真ん中のブルーは地球を、周囲が地図を守るカラバのカラーブルー。その外に宇宙を守るエーゴのグリーンと、エーゴの迷彩機の赤であります。機体フレームの「003」はグリーンで、

ダカールの都市部での戦闘を想定した迷彩



→可変機時代のMS・カラーバリエーションを考える

宇宙世紀0087-0096年エーゴ/地球連邦軍の迷彩

強行偵察用に
MA形態に
のを紋つた迷彩



MSA-005メタス
前期グリップス戦後末期
強行偵察試験機カラーモード

設定説定

MSA-005メタスは試作用可変MSとされ、機体の駆逐性が指摘され本格生産されなかったが、試験運用から3番目のジェネレーターによる加速度性能とメガバッカーランチャーや機動部が可能な多面性に着目され、少数组が生産、配備され駆逐機種が受け取れていた。内部は加速度性能と負荷低減を考慮してした強行偵察用に開発された。機体構造は機動戦用に供せられた。

塗装解説

グリップス戦後も終盤になるとオジオの點を知るために偵察活動の緊張度が高まっている。エーゴの機体のなかで駆逐機種が最も目立つているMSA-005の仕事は駆逐ではないが少しが駆逐運用に供せられた。

この機体は基本的にMA形態時の迷彩が優先され機動化が難化となっていた。機体は2点を交差して試験運用しており、もう一方の機体はグリーンフレームの色彩が「グリーンフレーム」の機体、「ブルーゴースト」との名前で呼ばれていた。この機体は「ブルーゴースト」との名前で呼ばれていた。この機体は「ブルーゴースト」との名前で呼ばれていた。

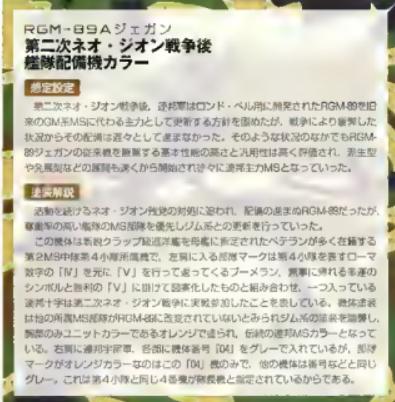
「機動戦士エガンドム」の映像上では、モビルスーツの塗装はいわゆる「設定色」のほぼ一種類である。しかし、アニメーションの世界を少し離れて「宇宙世纪」という世界で実際に何が行われていたかということを考えると、モビルスーツは「宇宙世纪」など様々な場所で活動するからして、おそらく様々な状況にフィットさせるために多種多様な塗装や迷彩があつたと考えることは少しも不思議ではない。

もしも、「宇宙世纪の世界で遊び」ということを考えると、そういったことを想像するのも一つの楽しみ方といえるだろう。

ということで、このページでは宇宙世纪0087-0096年のエーゴ/地球連邦軍の機体を中心に、モビルスーツの塗装を考えてみたい。なお、ここに登場する機体の設定は、本誌独自に「それらしく」考えてみたものであり、いわゆる宇宙世纪の「オフィシャル設定」ではないことを付け加えておく。

プラモデルなどを独自の塗装で表現する時の、参考などになれば幸いである。

ジエガン配備初期の塗装



RGZ-89J ゼル 第二次ネオ・ジオン戦争後 特殊任務グループ所属機カラー

機体設定

ロンド・ベルに対し、凌河政府及び軍の一員にあつたティターンズの元兵士を組織するヒューフィー・ロード隊と対する者の恩恵が一致し、対孤狼隊討伐の義を圍んで進めた。第2次ネオジオン戦争後は機体により代別の機討伐戦隊特殊部隊として少數精鋭の組を作りた割合。後には機討伐兵連行でさるる機討伐部隊などと並んで機討伐連行に機討伐作戦も実施。アスストリームまで飛行した。しかしロンド・ベルの認定が複数化へ一元化が望ましいとの判断下で、MSJはエコーズなどへ飛行。作戦部などは憑依魔の魔取收容本部は特殊戦ストリーブーと名を変更のうえ改組され、が開設間で解散されている。

実戦解説

STG（特殊任務グループ）と呼ばれていた終末期。MG運用戦隊には荷物とアーマーをDorn（日本通称）通称「ブリース」と呼ぶ部隊があり、各機体型MSや機体のテストを行いつつ、性能を想定した段階でロンド・ベルへの機運搬の送り機を上空部へ飛行していたといわれる。

作戦機場、合わせ機種迷彩などを複数行う特殊機隊専用として、塗装の飛行や運用設備の作業が不規則のシール状シートに着色したシートの一例。本機は宇宙船の船体貼付用に開発された機体品で、全面塗装のうえは機体の飛行性に不足する性能が直面。飛行活動開始直後にシート自体が破損するよう危険であった。テストを重ね実用ヘルメットに進んだが結果的に「EFSF」のみ、あるいはコールサインといわれる「ZE-7」が採用されるのである。実戦でも訓練やテストを行うためともいわれているが記述ではない。



①ビーム・ライフル モビルスーツの武装の 主役の地位を確立

武装の面では、一年戦争の機体からもつとも進化したのはビーム・ライフルだ。従来のビーム・ライフルは、エネルギー・CAP技術により、縮退する前のミノフスキーパーツをライフル内にチャージし、それをメガ粒子に変換して使用していた。この方式ではビーム・ライフル本体にチャージできる範囲でしか撃つことができず、戦場において弾切れが頻発した。ゆえに、ビーム兵器を使用できる状況下でもカーテリッジ式で装填できる実体弾兵器を使用するケースもまた多かつた。

また、メガ粒子自体はライフル本体に収納されているが、打ち出すにはモビルスーツ本体のジエネレーターの力を借りなければならず、ビーム・ライフルの出力の大きさは、本体のジエネレーターに大きな関係があった。実際RX-78ガンダムのビーム・ライフルはPGM-79ジムのジエネレーター出力的には若干荷が重く、携行出来ないわけではなかったが、実戦で使うには

もつとも進化したのはビーム・ライフルだ。従来のビーム・ライフルは、エネルギー・CAP技術により、縮退する前のミノフスキーパーツをライフル内にチャージし、それをメガ粒子に変換して使用していた。この方式ではビーム・ライフル本体にチャージできる範囲でしか撃つことができず、戦場において弾切れが頻発した。ゆえに、ビーム兵器を使用できる状況下でもカーテリッジ式で装填できる実体弾兵器を使用するケースもまた多かつた。

一方で宇宙世紀0087年には、

一方で宇宙世紀0087年には、ビーム・ライフルにはエネルギー・ハイカ方式が広く普及しており、一年戦争のようすに彈切れを起こす可能性は低くなり、また、出力も向上している。

この時代のビーム兵器は、その出力が分かつており(別表参照)、同じビーム・ライフルといつても、その機体の性能と用途から様々な出力のものが採用されている。ビームは出力の高い方が威力もあり、また、距離に比し収束率が減退していくものの、遠距離からの攻撃が可能となる。しかしながら、各機のサンサーの範囲と必ずしも同一ではなく、このことから出力の高さは単に破壊力を求めるという部分もあることがわかる。

単純に対モビルスーツ戦闘であれば、2MW程度あれば充分だが、より出力が大きいに越したことはない、という程度なのだろう。実際の戦闘でも各機のビーム・ライフルの出力の大きさ

宇宙世紀0087-0096年

モビルスーツの武装



宇宙世紀0087年以降のモビルスーツの武装は、一年戦争の戦訓を取り入れたものとなった。

しかし、第二世代以降の“実験的時代”らしく、その武装もまた、実験的な要素も多かった。

ここでは、Z計画以降のエウゴの

モビルスーツの武装を中心に

当時の各モビルスーツの

武装を解説していく。



主なモビルスーツの ビーム・ライフルの出力

型式番号	名称	ビームの出力
MSN-00100	百式	2.8MW
MSA-003	ネモ	1.9MW
MSZ-006	Zガンダム	5.7MW
RMS-108	マラサイ	2.2MW
NRX-044	アッシュマー	2.6MW
NRX-005	ギャブラン	※3MW
PMX-003	ジ・O	2.6MW
RX-160	バイアラン	4.7MW
AMX-004	キュベレイ	※1.4MW

*ギ・ブランはビーム・ギャモン、キュベレイはファンネルのビーム砲の出力

グリップス戦役時代の主なモビルスーツのビーム・ライフルの出力。1MW=1000KWなので、多くの場合はビーム・ライフルの出力は、その機体本体の出力よりも大きい。キュベレイはファンネルのビーム砲の出力。ファンネルはある程度の距離からの攻撃のため、出力が低くてもいいだろう。一般的モビルスーツ相手であればこの程度で充分なだろう。



はあまり関係なくも見える。一方で、対戦闘などを考慮した場合、各機のライフルの出力を見るに、2・5MW以上は欲しいところかもしれない。ちなみにZガンダムのハイバー・メガ・ランチャードは8・3MW、ZΖガンダムの2連装ダブル・ビーム・ライフルは各々10・6MW、第二次ネオ・ジオン戦争時のサザビーのビーム・ショット・ライフルの出力は10・2MWと、ジェネレーター出力が大きくなれば、ビームの出力も増大しており、エネルギー・バッテリーがあるものの、ジェネレーターの果たす役割もまた大きいことが分かる。また、ZΖガンダムのハイ・メガ・キャノンは単体で50MWという凄まじい威力を誇る。これは、この砲自体が本機のジェネレーターに直結していたからであり、宇宙世紀0130年代に登場した、ヴェスパーも

同じく機体本体の出力で、その威力は途に応じて変えて対応したはずで、必ずしも常にフル・パワーではなく、多くの場合は2MW程度の出力を使っていたのではないか。しかし、ビーム兵器は、通常の攻撃を繰り返すと早く切れてしまう。多くの場合は出力を用途に応じて変えて対応したはずで、必ずしも常にフル・パワーではなく、多くの場合は2MW程度の出力を使っていたのではないか。しかし、ビーム兵器は、通常の攻撃を繰り返すと早く切れてしまう。多くの場合は出力を用途に応じて変えて対応したはずで、必ずしも常にフル・パワーではなく、多くの場合は2MW程度の出力を使っていたのではないか。しかし、ビーム兵器は、通常の攻撃を繰り返すと早く切れてしまう。また、その威力は、実際にビーム兵器は、特殊な用途に使用する以外の通常戦での戦闘をほぼ駆逐してしまった。また、その威力は、まじめ、実体弾に優れた耐弾性を見出せたガンダリウム合金と、その直撃においては損失が大きかった。

そういう意味では、ビーム兵器の威力の前には装甲の防御性能はほとんどないに等しく、対ビーム・コートティングなどに頼るしかなかった。RGM

同様のコンセプトの高威力砲だ。

⑧エガンにおいて、装甲材にガン

ダリウム合金を採用しなかったのは、コスト面以外に、実際の運用の結果必要ないと判断されたのかもしれない。

結局、この時代のモビルスーツは武装の比重が大きく、装甲についてはほとんど無力であるため、機体の機動性を向上させることでその損害を低くするという結論になり、装甲がある程度の効果を見せるには、ビーム・シールドの実用化を待つ他にはなかつたのかかもしれない。

装備の比重が大きく、装甲についてはほとんど無力であるため、機体の機動性を向上させることでその損害を低くするという結論になり、装甲がある程度の効果を見せるには、ビーム・シールドの実用化を待つ他にはなかつたのかかもしれない。

⑨近接用の兵器 それ程の出力を必要としない

リック・ディアスにのみ 装備された小型銃

リック・ディアスのランドセル部に

二丁マウントされている小型のビーム兵器。一説には百式のビーム・ライフルと同等の能力があるともいわれる。しかし、実際にはリック・ディアスの主武装はクレイ・バズーカであり、ビーム・ピストルはあくまで非常用の武器であった。

砲身などの耐久性が一般的なライフルに較べ弱いなど、何かしらの障害を抱えていたのだろうか、使い捨てに近い兵器だったとされ、実際それほど使用例があるわけではない。むしろ、宇宙戦闘時の奇襲への対応策としての背部への武装と考える方がいいかもしない。実際、このビーム・ピストル

はリック・ディアス特有の装備であり、以後の機体に採用例はなく、実験的な要素が強かったと言える。

⑩ビーム・サーベル それ程の出力を必要としない

ビーム・サーベルは、エネルギー・CAPの技術、すなわちビーム・ライフルの技術を応用して、サーベル状にした兵器であり、近接戦闘用の武器として、対モビルスーツ戦用に使えるばかりでなく、艦艇の装甲に大きなダメージを与えることができるほどの威力を持つ。

出力としては0・4~0・6MW程度であり、換算すればこの程度で至近距離であるならばおよそのものは切ることができたのだろう。

また、ビーム・サーベルを本体に接続することで、簡易型のビーム・ガンとして使用することが出来る機体もあつた。MSZ-006 Zガンダムの場合、ビーム・ガンの出力はサーベルの倍の1・3MW程度であり、ファンネルのビームの出力とほぼ同等。ファンネルは近距離からの着弾を想定している兵器でもあり、それ以上のレンジからならビーム・ガンの出力は対モビルスーツ戦闘としては充分ではない可能性もある。牽制用、あるいはモビルスーツなど以外の目標に小ダメージを

与えるためのものと言える。

一方で MSZ-010 ZZガンダムの場合、ハイパー・ビーム・サーベルははじめからビーム・キャノンとして使用することも念頭に置かれており、サーベル時で 1・1MW、キャノン時には 10MW の高出力を誇った。このサーベルは小惑星を両断出来る程の威力があり、ややオーバースペックともいえる。

しかし、0・4MW 程度で充分な能

力のビーム・サーベルに倍以上の出力が必要かは疑問な部分も多く、その後は高出力はビーム・トマホークやビーム・アックスなど、ビーム部分の表面積を拡大する方向に進化していくと考えられる。

④ バズーカ

実体弾兵器 需要があつた

宇宙世紀 0087 年以降、モビルスープル装備はビーム兵器が標準化され、いつが、いわゆる実体弾兵器が完全に否定されたわけではなかった。ビーム兵器強盛の理由としてはもちろん、その高エネルギーが挙げられる。マシンガンなどに比べ威力も速度も速いため、完全に生徒の座を交代するこになつた。一方で、同じ実体弾でも、対艦戦闘などに使用する高エネルギーのバズーカは、貫通力ではなく、爆発

という問題もあるため、その後、使用頻度は少なくなつていて。

一方、地上においては宇宙のような問題も少なく、またビーム兵器は大気による減衰という問題も抱えている。ともあり、宇宙世紀 0090 年代においても、実体弾兵器は、宇宙よりも幅広く使われている。

⑤ グレネード

携行兵器 あらたな近接戦闘用の

による面でのエネルギー攻撃ができるため、オプションとしてこの時代でも使用されている。また、広範囲に鉄球などを飛散させる指向性兵器として、ビーム兵器にはできない芸当で、通常の戦闘以外にも対ニュータイプ機戦闘でも効果を挙げた。

また、ビーム・攪乱器使用時における長距離ビーム兵器の威力の減衰には効果的であった。

このような理由から、一年戦争以後、宇宙世紀 0087 年頃は、いわゆるハースカ系火器は、まだサブ・ウエポン的な武装として一般的だった。しかし、ながら、宇宙における実体弾兵器は、流れ弾や破片などが何から当たるまで運動エネルギーを維持し続ける（戦場以外の思わぬ場所や時間で被弾が出る）

そのため、完全に生徒の座を交代するこになつた。一方で、同じ実体弾でも、対艦戦闘などに使用する高エネルギーのバズーカは、貫通力ではなく、爆発

モビルスープルの近距離兵器としては、頭部のガトリング砲（「バルカン」）が代表される。これは車両や対人兵器としては極めて有効であるが、対モビルスープル戦は若干不足であり、ましてやガンダムリウム合金製のモビルスープルとなると、当たりどころというレベルの兵器に過ぎなかつた。

そこで第二世代以降のモビルスープルには、バルカンに足りない近距離兵器が装備される例が多くなつた。主流なのはグレネードといわれるものだが、その多くは擲弾を発射するというよりは、装備された例が多くなつた。主なものはグレネードといわれるものだが、その多くは擲弾を発射するというよりは、近距離型のミサイルのような兵器といえた。

その威力は、当たりどころによつてはモビルスープルを撃破できるほどのものであったが、速度もビーム兵器に較べるとそれほど高くなく、また本体の



メガ・ライダー



メガ・ライダー・システム (SFS) とメガ・バズーカ、ランチャーを合体させたような武装メカ。搭載しているメガ粒子砲の威力も高い。しかし、後継機などは存在せず、運用面などで折り合わない点が多かったのかもしれない。ただ、SFS は一定の需要があり、後々の時代まで後継が開発されている。

それでもビーム兵器ではない役割を担えることから、その後長らくモビルスープルの標準的武装として装備されることになる。

⑥ メガ、ライダー／
メガ、バズーカ、ランチャ

モビルスーツに与えたが……

メガ粒子を使用したビーム兵器の威力は、それまでの兵器にはないものであつた。だが、モビルスーツ単体に搭載するには限度があつた。しかし、ビームには減衰という現象があり、長距離を攻撃するには、それなりの出力が必要とされた。

しかし、基本的には戦闘は早く敵を発見し、早く攻撃した方が勝利を收める確率は高い。モビルスーツに強大なビーム砲を積むことは、それだけ有利であるといえたが、それには技術的障害もまた多かつた。

そこで、モビルスーツ本体ではなく、オプション装備として強大なビーム兵

器を装備するという案が考案される。

こういった考え方 자체は、ジョン・公国軍のスキウレや地球連邦軍のバストラナーという形で一年戦争から考案されていたものである。

グリップ戦役時はエウーゴ、ティターンズとともにこの長距離砲を開発しておらず、エウーゴはメガ、バズーカ、ランチャ、ティターンズはメガ、ランチャなどを美戦に投入している。

これらの一種の移動砲台は、適切なオペレーションが施されると、艦隊単位、モビルスーツを部隊単位での撃滅が可能な程の威力があつたが、オペレーション自体が難いことと、莫大にエネルギーを消費するためにモビルスーツ一機分の予備能力が必要なことなど、その運用に障害が大きいことも問題であり、あくまで大火力のスナイバ

1、伏兵程度の運用しかできないとい

うのも事実だった。

そこでエウーゴは、このメガ、バズーカ、ランチャ自体に航空機などの支援兵器なりの機動力を与えることでこれを解決しようとした。それが第一次オジオン戦争時に登場したメガ、ライダーである。

これは、サブ、ライト・システム

にメガ、バズーカ、ランチャを搭載したというコンセプトであり、第一次ネオ・ジョン戦争の時には、エウーゴのガンダムチームによつて運用され、大きな効果を挙げた。

しかし、結果的にメガ、バズーカ、ランチャも、メガ、ライダーも、そのコンセプトは後に継承されることがなかつた。この背景には、モビルスーツのジェネレーター能力の向上に伴う

ビーム兵器の能力向上という側面もあ

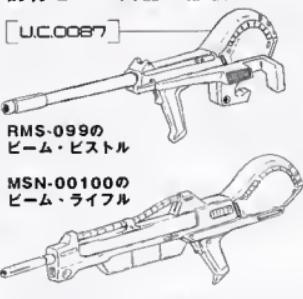
つたが、兵器として必要とされる場面が思つたほど存在しなかつたということもあるだろう。

⑦トリモチ、ランチャー 戦訓から搭載された 多目的射出機

モビルスーツの固定装備としては、手部に装備された多目的ランチャーの存在も忘れるべきではないだろう。これは通称トリモチ、ランチャーと呼ばれるもので、粘度の高い物体を射出し、近くの人間を拘束したり、コロニーなどの機械被害を簡易的に撃滅するなど、といった用途に使用される。これも、一年戦争の戦訓といえるだろう。

後にはモビルスーツ専用のダミー、バルーンの射出にも使用される。

年代別にみる 携行ビーム兵器の形状



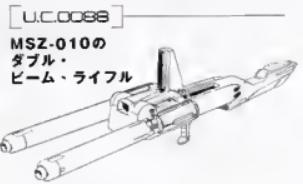
MSA-003の
ビーム・ライフル

→ネモのビーム・ライフルは、ジムⅡやジムⅢと同じ形状。スタークジンガンなども携行する。隠れたペス

トセラーカもしない。



MSZ-010の
ダブル・
ビーム・ライフル



RGM-89の
ビーム・ライフル



MSN-04の
ビーム・ショット・
ライフル

◆ザギーの携行するビーム兵器は、通常のライフル以外にショットガンのような散弾ビームも装備する特殊なタイプ。

グリップス戦役初期から第一次ネオ・ジオン戦争を戦い抜いたガンダムMk-IIと百式。どちらも実績



実験機でもある百式はコンセプトも尖っており、そもそもクワトロの技量に合わせて設計された面があるとされる。エースパイロットクラスでなければ性能は引き出しづらいだろう。



ガンダムGM-II	スペック比較	西式
18.5m	頭頂高	18.5m
33.4t	本体重量	31.5t
54.1t	全重量	54.5t
1,930kW	ジェネレーター出力	1,850kW
81,200kg	推力	74,800kg
11,300m	センサー有効半径	11,200m
細部パルカラーピックド ビームライフル ハイパー・バズーカ ビームサーベル	武装	60mmバルカン砲 ビームライフル クレイグライズカ ムガウズカス、ランチャ ビームサーベル

ある機体だが、この2機を比べた場合、そして戦った場合どのような結果になるのだろうか。

■スペックはアップデートされながら、従来的な操縦性でまとめられているガンダムMk-II。保守的な設計といえるが、それだけに握りやすい面があったというのは事実だ。

THE 対決

一年戦争終結後もモビルスーツは進化し続けた。各時代を代表する機体を比べた場合、どのような結果が見られるのか？スペックから紐解くモビルスーツの姿はいかに？

構成・文 星★鑑介

両者のスペックはほぼ互角
機体に対応できるかが鍵

スペックを見てみると、まず重量は
ガンドムMK・IIの方が百式より約6
%程度重い。だが、意外にもそれほど
大きな差ではない。百式はバインダー
の重量に相当する部分を脚部の装甲な
どを省くことによって相殺した、とい
ふ印象だ。ガンドムMK・IIはティ
ターンズ工廠製でジム・クウェエルの(ひ
いてはガンドムNT・1アレックスの)
比講となる機体だが、ジム・クウェエル
に比して機体が軽く、構造材や装甲に用いられるチタン合金
セラミック複合材も强度面では、ガンド
ム・クウェエルに近い素材と思われる。
つまり装甲に同じでも(装甲が施され
ている部分に関しては) そんなに開き
はないだろう。

一方の推力は9%近くガンダム Mk-IIの方が高い。しかし機体重量差を考えれば、両者の差は実質的ではない。どちらもムバードフレームを用いているが、百式のムバードフレームは画獲したガンダム Mk-IIのフレームを参照しており、これも大きな差とはならないだろう。

ジエネレーター出力については、ガンダム Mk-IIが1930キロワットで、これも百式が1850キロワットで、これも差がないレベルだ。ちなみに両機とも

百式はその優れた空戦機動でガングンダムMK-IIの虚を突き破ることが求められる。その際には、バイロットによる多少特殊であろう百式の機体機動をよく理解する必要がある。スベッククはほぼ同じにもかかわらず、アーヴィガン隊において百式がガントロップに対し、ガンドムMK-IIは複数のバイロットが搭乗した理由も、機体の機動の理解という観点で見ると興味深いかもしれない。

的な要素の強さで人々を惹いてある。インダ-1機動よりもは、いくつかの面でアライド-1機動よりも優れている部分もあり、アライド-1ウエイトになるインダ-1を装備しておらず、機体重量が変わらないといふ意味では、空間機動性は百式にアランゲージがあると思われる。あくまで宇宙空間での話ではあるが。

エネルギー・パック式ビーム・ライフルを使用しており、そもそもジエネレーター出力の差が与える影響は小さい。

v ガンダムvsサザビー

「シャアとアムロがそれぞれ自身のためにオーダーしたニュータイプ専用機」というイメージが強い



↑「紳紳専用機」に相応しい最高のスペックを与えること自体は間違いではなく、AE社的な発想だ（設計はネオ・ジオンではあるが）。実戦での実績がVガンダム以上に足りなかつたということだろうか。

v ガンダムとサザビー。実際の戦闘ではVガンダムが圧勝しているが、あの結果は必然なのだろうか。

v ガンダムは意図であり調整不足ではなかったがバランスの良い設計で、一般MSとの戦闘からNT専用機との対決まで対応できた。そして何よりアムロ・レイの技量の高さが勝利に貢献したといえる。



Vガンダム	スペック比較	サザビー
22.0m	頭頂高	23.0m
27.9t	本体重量	30.5t
63.0t	全重量	71.2t
2,930kW	ジニケレーター出力	3,960kW
97,800kg	推力	133,000kg
21,300m	センサー有効半径	22,600m
90mm/120mm/150mm ビームライフル ビームサーベル フィン・ファンネル シールド内蔵ミサイル シールドビームミサイル	武装	ビーム・ショット・ライフル ビームトマホーク ビームサーベル ファンネル シールド内蔵ミサイル 折散ミカ粒子砲

スベックに満たないVガンダム。サザビーとVガンダムは、どちらもファンネルを装備したニュータイプ（NT）専用機だが、そのコンセプトを見ても推力は30%近くサザビーの方が高く設定されており、その一方で本体重量の差は約2.5トンだ。サザビーは大推力十数種の推進剤で高機動を実現し、Vガンダムはそれよりは抑えられたボイントでバランスを取っているともられる。ジニケレーター出力についても、サザビーのほうが約1,000キロワットほど高いが、Vガンダムも特別低くはない。むしろファンネルの充電やメガ粒子砲の駆動にも出力を当てなければいけないサザビーは、肝心な場面でパワーを失したこともあった。Vガンダムはフィン・ファンネルにジニケレーターを搭載する一方で、本体には余った火砲を内蔵せず、安定性を重視した設計だ。

サイコミュ装備に関する思想も異なる。サザビーの場合は従来型のファンネル搭載機に近く、サイコフレームを用いて、高レベルなサイコミュシステムで6基のファンネルを操るというものの。一方のVガンダムの場合、コクピット周りに配したサイコミュ受信バッテリで相手の感觸波を受信するという機能が、これまでのNT専用機にあまり見られない機能だ。これはサイコミュを武装のコントロールに用いるというより、バイロットの補助として用いる使い方。フィン・ファンネル本体もジニケレーターを内蔵し、長時間の稼働に耐え、出力をアップすることで対応。ロットを捕うという方向への進化だ。また、武装もVガンダムがフィン・ファンネルからニュード・ハイパー・バスターまで多彩な武装を備えているのに対し、サザビーはより装備の種類が少なく、実体弾装にも乏しい。

サザビーは高い技術をもって機体スベックを高めることに注力し、バイロットのサイコミュ能力を純粋に攻撃（ファンネルの操作）に用いるという。

一方のVガンダムはMSに必要な要素を高バランスで盛り込み、バイロットや機体を補助するものとしてサイコミュを搭載した機体だ。そのためVガンダムは不測の事態にも対応しやすく、安定して能力を発揮できる。そしてそれが、乱戦の後の一騎打ちでの勝利に結びついたといえるだろう。

「実戦」においてMSが必要としているものが何かを経験によって的確に、Vガンダムに実装させたアムロの実力が、乱戦の後の一騎打ちでの勝利に結びついたといえるだろう。

能が、これまでのNT専用機にあまり見られない機能だ。これはサイコミュを武装のコントロールに用いるというより、バイロットの補助として用いる使い方。フィン・ファンネル本体もジニケレーターを内蔵し、長時間の稼働に耐え、出力をアップすることで対応。ロットを捕うという方向への進化だ。また、武装もVガンダムがフィン・ファンネルからニュード・ハイパー・バスターまで多彩な武装を備えているのに対し、サザビーはより装備の種類が少なく、実体弾装にも乏しい。

サザビーは高い技術をもって機体スベックを高めることに注力し、バイロットのサイコミュ能力を純粋に攻撃（ファンネルの操作）に用いるという。

一方のVガンダムはMSに必要な要素を高バランスで盛り込み、バイロットや機体を補助するものとしてサイコミュを搭載した機体だ。そのためVガンダムは不測の事態にも対応しやすく、安定して能力を発揮できる。そしてそれが、乱戦の後の一騎打ちでの勝利に結びついたといえるだろう。

「実戦」においてMSが必要としているものが何かを経験によって的確に、Vガンダムに実装させたアムロの実力が、乱戦の後の一騎打ちでの勝利に結びついたといえるだろう。



MSZ-006

Zガンダムvsティターンズ&連邦軍可変機

グリップス戦役はまさに可変MS百花繚乱の時代だったが、それら可変MSが戦ったらどうなるのだろう

うか。やはりZガンダムが最優秀機なのかな? グリップス戦後最強可変MSとは!?

PMX-000
メッサーラNRX-044
アッシマーMSZ-006
ZガンダムORX-005
ギャブランRX-139
ハンプラビRX-110
ガブスレイ

スペック比較	Zガンダム	ギャブラン	アッシマー	ガブスレイ	メッサーラ	ハンプラビ
頂点高	19.85m	19.8m	19.3m	18.5m	23.0m	19.9m
本体重量	28.7t	50.7t	41.1t	32.6t	37.3t	34.6t
全備重量	62.3t	94.2t	63.8t	56.2t	89.1t	56.9t
ジェネレーター出力	2,020kW	3,040kW	2,010kW	1,800kW	4,900kW	1,540kW
推力	112,600kg	183,000kg	94,200kg (MA形態時)	277,200kg (MA形態時)	96,000kg (主機6基)	59,800kg
センサー有效半径	14,000m	13,000m	10,200m	10,900m	11,300m	10,620m
武装	バルカン砲 ビーム・ライフル 2連装グレネード・ランチャーピーム・サーベル シールド・内蔵ミサイル ハイパー・エモ・ランチャーピーム	パンサー内蔵ビーム・ライフル ビーム・サーベル	専用ビーム・ライフル ビーム・ライフル	フェイダーイン・ライフル グレネード・ランチャーピーム クローバー・アーム	メガ粒子砲 グレネード・ランチャーピーム クローバー・アーム	ビーム・ライフル フェイダーイン・ライフル 青銅ビーム・ライフル テール・ランサース ビーム・サーベル クローバー・アーム 高ヘビ

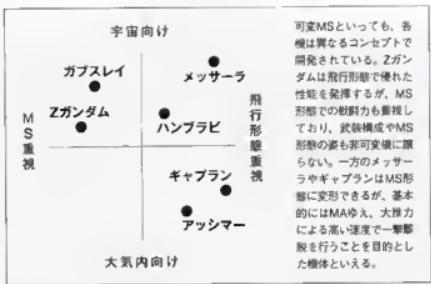
Zガンダムは各機の中間ともいえる112,600kg。重量については、ガンダリウム合金やムーバブル・フレームといった新技術を採用しているZガンダムが29トン弱と、6機中最軽量だ。推力/重量比で考えると、ガブスレイに次ぐ優秀な値だ。反対にギャブランおよびアッシ

ミに至っては、ギャブランすら上回る。反面、ガブスレイは全備重量がもうとも軽く、推進剤の搭載量も少ないとみられる。スペック上は高性能だが、実際にフルで發揮できる時間は長くはないということだ。また、メッ

サーの推力は96,000kgだが、これは主基6発分の推力とされ、実際にはもうと高いと思われる。なお、Zガンダムは各機の中間ともいえる112,600kg。

Zガンダムのふたつの武器それは軽さとセンサー!

ここで今回取り上げるのは、上記の6機の可変MS & MAだ。まずさつとスペックを比べてみると、同じ可変機といつても大きな差がある。まずスター推力だが、ハンプラビは5.9800キロで、当時の非可変MSと比べてもやや低い。それに対してギャブランは2436000キロ(ブースター装着時)、非装着時は183000キロ)と非常に高い数値だ。1G下の大気圏内を推力でもって強引に飛行させるというコンセプトゆえの値だ。ガブスレイに至っては、ギャブランすら上回る。反面、ガブスレイは全備重量がもうとも軽く、推進剤の搭載量も少ないとみられる。スペック上は高性能だが、実際にフルで発揮できる時間は長くはないということだ。また、メッサーの推力は96,000kgだが、これは主基6発分の推力とされ、実際にはもうと高いと思われる。なお、Z



可変MSといつても、各機は異なるコセプトで開発されている。Zガンダムは飛行形態で優れた性能を発揮するが、MS形態での戦闘力も優れしており、武装構成やMS形態の柔軟性が不可欠である。一方のメッサー、キャブランはMS形態でできるが、基本的にはMA版で、大推力による高い速度で撃撃脱出を行うことを目的とした機体といえる。

高い推力は高い反面、機体はかなり重い。

実戦において起りうる戦闘を想定すると、大気圏を突破していくZガンダムおよび降下部隊に対し、まずは拠点からキャブランが緊急発進。高々度でこれを迎撃する(キャブランの大推力はこのためのものといえる)。Zガンダムはキャブランに味方を攻撃させず、これを撃墜するのが使命となるだろう。同機のウェイブライダー形態は大気圏突入に最適化された形状ではあるが、大気圏内での空戦能力も高い推力と軽い機体重量で一定以上の水準を確保する。一方のキャブランはいつてみればロケットのようなもので、本体重量も重い。超高度での空戦能力が

マードなど推力は高い反面、機体はかなり重い。

実戦において起りうる戦闘を想定すると、大気圏を突破していくZガンダムおよび降下部隊に対し、まずは拠点からキャブランが緊急発進。高々度でこれを迎撃する(キャブランの大推力はこのためのものといえる)。Zガンダムはキャブランに味方を攻撃させず、これを撃墜するのが使命となるだろう。同機のウェイブライダー形態は大気圏突入に最適化された形状ではあるが、大気圏内での空戦能力も高い推力と軽い機体重量で一定以上の水準を確保する。一方のキャブランはいつてみればロケットのようなもので、本体重量も重い。超高度での空戦能力が



・推進力で武器も威力なガブスレイ。飛行形態とMS形態を併用するだけではなく、飛行形態で開拓形態においてもローポーによる攻撃の可能と、新しい新機軸を構成している。ジネレーター出力が低いため、走行速度を落とす。

・MS形態をとるが、コンセプトとしては大推力のMAとして、その側面を重視して開発されたマッサー。本機の重心下限での運用を想定しているため、無重力状態においては速い速度を誇る。



・多形の武装とチームプレイにより、初見では対応困難なハンブライ。スペックは飛びぬけて高いが、非常に実戦的である。MA形態への変形も頗るなものと見なす。幅を広ぐるため方策なのかもしれない。

・アッシュマー/キャブランなど、IG以下の大気圏内で飛行可能な可変MSを開発した源氏軍。宇宙からの大気下作戦を恐れていたのだろう。非ムーバブルフレームのため、機体重量はどちらも重い。



高いかといえば、実際はそれほどでもないだろう(大気圏内ではなかつたが、キャブランに搭乗したヤザンに動きが硬いと指摘したことがある)。また、Zガンダムはセンサーの効果範囲が1400メートルと、この6機中でもっとも高く、アビオニクスに優れている。

時間は短いがアウトレンジから射撃ができる、接近後の空戦にも優位なZガンダムの勝率が高いだろう。

そして要撃にあたってきたキャブランをかいくぐった降下部隊は、高く中高度で今度はアッシュマーの轟爆と戦うことになるだろう。アッシュマーは重量の重さを補うため、自由落としの速度と自身の推力をプラスするという、純粋に一撃離脱戦法を得るとしている。Zガンダムは上下両方向で戦うが、Z-Gundamは上下両方向で戦うが、Z-Gundamは上下両方向で戦うとみられるが、飛行形態同士で戦う状況となれば、Z-Gundamが推力/重量比や機体形状を含めた運動性の面で有利だ。

宇宙での戦いは、ガブスレイが相手の場合、Zガンダムの推力は大きくなり、一撃離脱戦法など速度の差が顕著に現れる戦い方では不利だ。反面、センサーの能力はZガンダムが高く、アッシュマーはセンサーの能力がZ-Gundamと互角以上に渡り合えるMSだったといえる。そこにカミーユ・ビダンのニュータイプ能力が加われば、グリーブス戦役で名を馳せた機体となるのも納得だ。

入るものも手かもしれない。また、ガブスレイは強力なビーム武装を複数装備している割に、ジネレーター出力が1800キロワットと低く、武装の過使用などによるバーダーウィンがあれば、それが限となるはずだ。

メッサーは主スラスター6基の推力と重量を考えれば運動性において、Zガンダムが優位ではあるが、武装も強力で主スラスター以外の推力も高いので油断はならない相手だ。ここでもやはり決め手はセンサーの能力となつてくるかもしれない。

他方、侮れないのはハンブライ。スペック的にはよく普通だが、ウェイブライダー形態のZガンダムにも迫る速力を発揮することもある。また、実際に搭乗したバイロットもスペック以上に優れた部分を感じていた。特殊な武装が多く、初見では見切るのが難しいというのも戦場という状況においては有効に働く。

大気圏突破能力という一種の局地戦闘機的な性格のZガンダムだが、このようみていくと、その推力の高さと機体の軽さ、そしてバイオセンサーなども含めた電子機器の性能のおかげで、他の可変MSと互角以上に渡り合えるMSだったといえる。そこにカミーユ・ビダンのニュータイプ能力が加われば、グリーブス戦役で名を馳せた機体となるのも納得だ。

モビルスーツを中心とした 新たな兵器体系を築くV作戦

一つを中心とした一大兵器体系を確立することまで視野に入れていた。

一年戦争端緒の戦いにおいて、地球連邦軍の一一方的敗戦（実際にはジョン公国軍側の被害も甚大だった）の原因こそが、ジョン公国軍の新兵器であるモビルスーツ・ザクであった。この新兵器こそジョン公国軍をして圧倒的な国力差を顧みることなく、全面戦争に突入させた要因の一つだった。

そして、地球連邦軍にとってモビルスーツの配備は、勝利のための必須条件だった。かくして宇宙世紀0079年4月1日、地球連邦軍のモビルス-1開発計画「V作戦」が発動された。V作戦とは、作戦と銘打たれているものの、実際のところは作戦というよりは軍事ドクトリンと兵器体系の見直しといえるものであった。

実際に前年の宇宙世紀0078年3月に、モビルスーツ開発計画であるRX計画がスタートしている。しかし、この時点のモビルスーツの戦闘・戦術的価値はそれほど高くなく、RX計画も、仮想敵であるジョン公国軍の新兵器の総合的な評価が中心だったともいわれている。それが一転してV作戦ではモビルスーツの開発、量産、ならびにその母艦となる艦艇の建造と、それらを使用した運用方法の確立、さらにはモビルス

中距離支援型、汎用（自戦）型という3つのコンセプトの機体を作製し、それをベースに実際の戦略にフィットした（生産や配備の上で適切な）普及型を開発するというものだった。

RGM-79ジムが優秀だつたのはなぜかの機械であつたから！

このV作戦の成果として、RX-75ガンタンク／75ガンキャノン／75ガンダムのRXシリーズの各機体が完成する。その特徴は大まかには3つあった。

一つは、コア・ブロック・システムの採用。これは搭乗員の生存性の向上と教育型コンピュータの戦闘データを確実に持ち帰るためにシステムだ。

もう一つは防御性能の拡充である。

実際、RXシリーズが一年戦争最強の機体と評価されるのは、この装甲による功績が大きい。

最後はビーム兵器の採用だ。光学兵器分野は、地球連邦軍がジョン公国軍を技術的に上回っていた数少ない分野の一つで、モビルスーツの主武装＝ビーム・ライフルは艦艇の主砲なりの性能を実現した。

実際に、汎用型、砲撃支援型、重火力型という3つの要素は、戦場で効果的に作用した。といつても、汎用型

V作戦、 G P 計画

そしてZ計画へ ～宇宙世紀80年代のMS開発～

ガンダムの開発計画と言えば、V作戦とRX計画、GP計画、Z計画などが知られている。それらはどのような関係にあるのだろうか。ここではガンダムを中心とした80年代のモビルス-1開発計画の関係について考察してみよう。

文 市ヶ谷ハジメ

でほとんどのミッションは済むので、その数は圧倒的に汎用型が多く、3機種の要塞度は均一ではなかった。

しかし、モビルスーツは、ある程度機能に特化する方が効率的であるといふことも分かってきていた。地球連邦軍は3つの基本形から、戦場の要望に合わせてフィットさせる開発方針であり、戦中、戦後にわたって様々な

機体が登場し、宇宙世紀90年代まで運用されている。では地球連邦軍にとって初のモビルスーツ開発であるジムは、なぜそこまで成功したのか。ジムは、なぜそこまで成功したのか。通常ノウハウの少ない中での開発は、何らかのトラブルはあるはずだ。もちろん、開発ターゲットとしてのMS-06ザクIIの存在は当然あるだろう。ザ



クを徹底的に研究して、そこから発展していった技術ゆえに、ある程度の技術的保障はあつたということだ。

もう一つはRX計画の存在だ。金に

umboを付けずに新技術も多数投入した試作機（RXシリーズ）を開発、その中で信頼性を保障されたものを採用し組み上げていく。つまり、ジムとして組み上がった時点で、一定の信頼性は保障され、機体全体としても発展性のあるものが出来上がるのだ。

ジオン公国軍はMS-05ザクIの使用を通じて得たノウハウで、決定版であるザクIIを完成させた。ジムはある意味ザクIの孫機であり、ガンダムの子機である。つまり、ロールアウトした時点での完成度が高いのは当然ともいえるのだ。

GP計画＝RX・78ガンダム リニューアル・プロジェクト！

そして、戦後の地球連邦軍の新規モ

ビルスーシ開発も、この手法が取り入れられた事となる。それは宇宙世纪0083年に登場した、地球連邦軍とドローナハイム・エレクトロニクス（AE）実験機を開発し、先進のテクノロジーを投入する、という点で先のV作戦と

同義といえるだろう。RGMシリーズの時と違うのは、ベース（ベンチマーク）となった機体がザクIIではなく、RX-78ガンダムと、戦後にジオン公

軍から接収した技術であったことだ。

ガンダムをベースに再設計し、戦訓や様々な新テクノロジーを投入した新たなRX計画。それこそがGP計画の本質といえる。

実際に、本シリーズの型式番号はRX-78のままである事からも、技術的にもRX・78直系の機体であることが分かる。当時の主力機であるRGM-79のN型（ジム・カスタム）は、RX-78NT-1アレックスをベースにしていた。そういう意味では既存の機体を突き詰めたRGM-79N型と、RX-78自体の可能性を広げるGP計画の機体は親戚関係といえるだろう。

RX計画に繋がる GP計画の本質

RX-78 GP01ガンダム試作1号機は汎用型であり、RX-78の進化・発展型といえるものだ。最大の特徴は地上型と宇宙型を分けて開発されたことで、特に宇宙型（フルバーニア）は、この開発計画も、まず試作機（プロトタイプ）は、機体設計に余裕のある実験機を開発し、先進のテクノロジー

を投入する、という点で先のV作戦と

中距離支援型のガンキャノンだが、実

際戦場においては、汎用型との随伴、および直撃というミッションが多かった。

ガンダム試作2号機は、空間機動

性などをより重視しつつ、戦術装備による長距離支援型であろう。RX-78G

はほど多くなく、またモビルスーシである必要性も少ない。そしてモビルスーシのビーム兵器搭載によって、その重

要性は著しく低下した。実体弾による遠距離砲撃は依然必要だったものの、通常の火砲で代用できる。こういったことから、火力面はモビルアーマー的なコンセプトに移行することになる。

戦場でのモビルアーマーは、モビルスーシをはるかに凌ぐ大きさと、それを利用したスピードや火力などに特化した機体で、戦場でインバクトのある

存在などを証明した。

しかし、こうしたインパクトの代表格である、ソロモン攻略戦でのジオン公国軍が投入したMA-08ビッグ・ザムの活躍は、驚異的ではあつたものの、最終的には1機のモビルスーシと戦闘

爆撃機の攻撃によって撃破されている。

こうしたビッグ・ザムのように一機で艦隊レベルを相手にできる兵器でありな

がら、かつ近接戦闘にも対応できる機

体として開発されたのが、RX-78 GP03ガンダム試作3号機（「ノドロビウム」）である。

こうして考えると、GP計画は、RX計画の成功と、一年戦争の戦訓を下敷きにして成立した計画であることが分かる。

GP計画の中での野心作 ガンダム試作3号機

さらにこのGP計画では、いくつかの新コンセプトの実験がなされている。

ひとつはガンダム試作3号機の兵器ユニット、オーキスの制御ユニットとしての役割を持つRX-78 GP03ガンダム試作3号機ステイメンである。

本機は、火器管制システムは強化されていただろうが、実質上、汎用モビルスーシに近かった。本来であればガンダム試作1号機にオーキスの制御系を搭載する方向性もあつたはずだ。実際両機は、カタログベース上はそれほど差がなく、単体の性能としては同

時代トップクラスの機体だ。ではなぜガンダム試作3号機ステイメンは作られたのか。

本機の外見上の特徴は、大型のバイ

ンダーを搭載している点だろう。バイ

ンダーは、それ自身がスラスター、ユニットを内蔵しているものの、可動することで推進剤の消費をせずに機体運

動が可能なAMBAC機能を持たせて

いと考えられる。このバインダーで

る。

G.P.計画は本当に抹消された計画だったのか？！

AMBAACを積極的に機体機動に利用する方式は、一年戦争後に出現した考え方であり、その後のA.E.社の技術陣はその可能性を探っていくことになる。その他にも全大周囲モニターなど、次代に繋がる新機軸の技術が多数盛り込まれている。

そう考えると本機の役割は、オーネックスな進化系のガンダム試作1号機と並び、最新技術を投入したもう一つの汎用型の試作機と考えるべきだろう。おそらくG.P.計画の最終段階でどちらかが使用実績の優れた方が生産型の母体になるのだろう。革新と保守、ここからもG.P.計画の本質が伺える。もうひとつがRX-78 GP.04ガンダム試作4号機ガーベラである。こちらの方は、強襲型という、一年戦争当時に最新のモビルスーツ運用の考え方の機体だ。これは、MS-18 EDケンブリーア、MS-14 MGルグダム（マーベー）など、対戦末期にジオン公国軍で盛んに製造されていた機体である。要塞やコロニー制圧の際、強行突入用の機体というコンセプトは、一年戦争には合っていた。しかし、これも宇宙世紀0080年代半ばにはあまり使われなくなった。おそらくこれも、ビーム兵器の普及により、モビルスーツの戦闘レンジがより広範囲になると同時に、重要度が低くなつていったのだ。

さて、連邦軍内での政治スキャンダルによつて中止され、全ての記録が抹消されたとされる。

しかし、兵器開発は多分に政治的な要素と経済的な要素を含むもので、数千億円、時には数兆円単位の資金を投入するものもある。また、技術開発の成果も、単純に政治スキヤンダル絡みだからといって消すことが可能なわけでもないだろう。むしろ、これらを別の側面から見ていくと、面白いことが分かつてくる。まず、「アーラーズ紛争」以降の地球連邦軍におけるモビルス

ーツ開発を見ていく。

当時のモビルス開発は、ジオン公国軍で盛んに製造されていた機体である。要塞やコロニー制圧の際、強行突入用の機体といつてコンセプトは、一年戦争には合っていた。しかし、これも宇宙世紀0080年代半ばにはあまり使われなくなった。おそらくこれも、ビーム兵器の普及により、モビルスーツの戦闘レンジがより広範囲になると同時に、重要度が低くなつていったのだ。

これらは基本的に地球連邦政府が

バックについた公的機関だが、おそらくその開発・生産には民間企業の資本や人員が数多く参入していたことだらう。なぜなら、政府機関がそこまでの施設や人員を持ついると効率が悪いからだ。A.E.社はジョンソン系企業を買収したため企業名が表に出ているが、モビルスーツの生産・開発を行う企業は同社だけではないだろう。

そして、「アーラーズ紛争」以降、ティーンズでは、PGM-79ジムの最終型とも言えるQ型（ジム・クワエール）をベースにして、ムーバブル・フレームという新機軸を採用したRX-178ガンダムMK-IIを開発した。

一方前述の研究所では、ORX-005ギャララン、NRX-044アッシュマーといった可変モビルアーマーなどを開発している。こうした様々な施設の様々な新テクノロジーが、第二世代、第三世代モビルスーツ開発の礎となつていた。

当時のモビルス開発は、ジオン公国軍で盛んに製造されていた機体である。要塞やコロニー制圧の際、強行突入用の機体といつてコンセプトは、一年戦争には合っていた。しかし、これも宇宙世紀0080年代半ばにはあまり使われなくなった。おそらくこれも、ビーム兵器の普及により、モビルスーツの戦闘レンジがより広範囲になると同時に、重要度が低くなつていったのだ。

Z計画的イノベーションと

ともかくも宇宙世紀0087年のグリーブス戦役の頃には、新しい技術が、実際の配備機という形で現れる。これらは偶然ではなく、技術開発の成果がちょうど形になつたということの表れだろう。

そして、この当時、A.E.社では「Z計画」が進行していた。最終的には可変モビルスーツであるZガンダム開発に至る計画といわれているが、それはどうにも疑わしい。なぜなら、MSZ-8

・006 Zガンダムに続き、MSZ-010 Z2ガンダム、MSA-0011 Sガンダムといった機体を矢継ぎ早に開発しているからだ。そしてこれらのモビルスーツの特徴を考えると、面白いことが分かつてくる。

大気圏突入という特徴を与えられていたものの、後の生産型であるアーラーズなどを考えると、汎用型ともいえるZガンダム、強襲型であるZ2ガンダム、そして撃点攻撃（防衛型）であるSガンダムという用途を考えると、そのコンセプトは見事にG.P.計画のそれと同じと見ることができるだろう。

一方、G.P.計画の次にA.E.社が手がけたのは、4年後の宇宙世紀0087年に登場したRMS-099リック、ディアスであった。この機体構成を見

2つの計画に見るMSの用途

Z計画

MSZ-005 Zガンダム

可変MSの代表で、第3世代MSの本機だが、基本的に中距離から近接戦闘を主体とした白兵戦闘の機体である。ただ、これ自体で長距離戦闘も可能なので、その自体は薄いのだ。



MSZ-010 ZZガンダム

本來ならば戦闘攻撃に向いた機体と考えられるが、単機での戦闘もこなす戦闘力も持たせている。ただ、後にフルアーマー化されるので、装甲面などを犠牲にしていた可能性もある。



MSA-0011 Sガンダム

機体の構成要素はZZガンダムに施している。強化型のMS-Sガンダムになると、その性格がガラリと変わることになる。MSの能力の最高峰に挑戦した機体と捉えることができる。



汎用(白兵戦)型

RX-78GP01 ガンダム試作1号機

地上用、宇宙用に装備を換装することで汎用性の拡充をもたらす。コア・ブロッカ・システムを採用している点もガンダムに倣する。ただし、本機の場合は脱出装置の意味合いが強い。



GP計画

RX-78GP02 ガンダム試作2号機

主に旧ソ連公開系の技術者が開発に携わったといわれる。技術的な使用を察知しているものの、パワーエフェクトも存在する。



RX-78GP03 ガンダム試作3号機

兵器ユニット「オーキス」をMSがコントロールする近接戦闘用に対応できる。1年戦争での対MA戦をAE社なりに分析した結果から生まれた。デンロビウムは開発用コードネームだ。

RX計画をベースにGP計画があつたように、GP計画をベースにして、新技术を投入して量産機が作られ、さらにそれらの発展を試みて、新技术の投入を行つたのがZ計画と考えるべきだろう。GP計画を経た成果としてリック・ディアスがあり、百式はZ計画の端緒となり、Zガンダムへと繋がっている。

Zガンダムのムーバブル・フレームは、ガンダムMK-IIのそれの影響を受けている。ティアーンズはRGM系の到達点としてガンダムMK-IIを開発しているといえるが（その成果はRMS-154バーザム、RGM-86

る、ガンダリウム合金の採用、ムーバブル・フレーム対応など、当時最新のテクノロジーを備えているが、全天周囲モニタ、補助機動装置バイノーダーを採用するなど、ガンダム試作3号機は実際、形こそジオン系のシルエットだが、ガンダム試作3号機もジョン系チームが開発していたことを考へても、先の経験を活かした機体と考える方が自然で、それは可変機への過程にあつたMSN-00100百式も同様だろう。つまり、GP計画の生産型は新技術の登場により陳腐化したため、その資産を活かしながら新技術を取り入れ、新たな計画が立ち上がつたということだ。

RX計画をベースにGP計画があつたように、GP計画をベースにして、新技术を投入して量産機が作られ、さらにそれらの発展を試みて、新技术の投入を行つたのがZ計画と考えるべきだろう。GP計画を経た成果としてリック・ディアスがあり、百式はZ計画の端緒となり、Zガンダムへと繋がっている。

Zガンダムのムーバブル・フレームは、ガンダムMK-IIのそれの影響を受けている。ティアーンズはRGM系の到達点としてガンダムMK-IIを開発しているといえるが（その成果はRMS-154バーザム、RGM-86

RジムIIIという形にファーブラックされている）、その技術と、RX計画からGP計画を経た技術の流れがZガンダムで総合したともいえる。そう考へると、Zガンダムはまさごうことなきガンダムという大河の川下にいる存在といえるだろう。

宇宙世紀90年代のZ計画の成果

こうしてRX-78ガンダムを祖とする「次期主力機の実験機としての強力な試作機」という流れは、GP計画を通して、Z計画でも踏襲された。そしてZ計画の中心である量産機は、ひとつはRGZ-95ゼルという形で宇宙世紀0090年代に花開く。そしてもう一つは汎用型の僚作機、RGM-89ジェガンに結実する。この機体ではZガンダムの特徴のひとつであった軽量化のノウハウを活かして、一般汎用モビルスーツにおける革命をもたらしたのである。

そして、そのあと30年ほど、地球上に一応の平和が訪れたため、新規のモビルスーツ開発は停滞し、次の動きは20年以上先の小型化のムーブメントにおいてであった。そして、その頃にはすでにRX計画を祖とするような開発方法は取られてはいない。

時代の流れは、ここで断続しているのである。

可変MS戦術論

MSZ-009
plan & anaheim
electronics

宇宙世紀の世界では、可変機はどのように使われていたのか、可変機の存在意義、それは設定レベルではある程度の説得力を持ったものが存在するが、実際の戦場での様相はよく分からぬとも言える。それでは可変モビルスーツ（MS）はどのように使われていたのだろうか。実際の戦術について考えてみたい。

使用目的が明確な現実の可変機
デメリット解消のための変形MS
いわゆる可変機構を付加した機体に
関して、「機動戦士Ζガンダム」の世界
における誕生の動機と歩み、そして
現実世界における繁栄と終焉を踏まえ
て、ここからは可変機能を備えた機体
を運用するにあたっての有効な戦術
及びその得失を考察してみることにし
たい。

現実世界における可変機構の中でも、
可変後退翼は主として低中速域と高速
域の双方において、良好な飛行特性と
戦術任務をこなせる。汎用性を持たせ
ることが目的だった。すなわち航空機
自体に、他の可変機構を持たない機体
を凌駕する多目的性能が求められて
たということである。

ひとくちに多目的性能といつても、
その任務は多種多様であり、たとえば
F-111の場合は、長距離を高
度で移動してからの中速で地形を回避
しながら目標に向かい、精密爆撃を行
うといった任務が課せられていた。対
してF-14の場合は、専用装備であも
つたフェニックス長距離対空ミサイ
ルを使った高速での機動戦と、機関砲
を使った近接格闘戦と共に高いレベル
でこなしたまつた。この異なる速度
域での戦闘を一機種でこなすことがで
きる可変機構という概念は、西側東側
を問わず他の機体もほぼ同じ理由で導
入された。

ちなみにVTO（垂直離着陸）機
の場合はヘリコプターと固定翼機それ
ぞれのメリットを両立させるために考
案された可変機構であり、想定してい
た戦術的には確かにシンブルだった。
要するに重武装かつ高速移動が可能な
戦術機を、必要に応じて飛行場を使う
ことなく運用することが目的というこ
とである。

これら現実世界での可変機構運用

に対して、ガンダム世界における可変
機構の必然性は少々様子が異なつてい
た。それは第一義的理由が別稿で記し
た通り、大気圏内での機動性を高める
ために、空気性能を洗練すること、そ
して宇宙空間における直線的な機動性
の向上。第二義的には、宇宙空間から
大気圏内までスマートかつ安全に移動
するための可変機構だったということ
である。なお、この二つの存在意義の
優先順位は逆であるという考もある。

大気圏突入能力より 飛行能力が重要な機能である！？

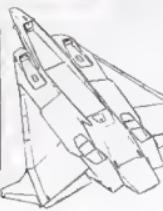
これら二つのことがMSを運用する
にあたり、大きな技術課題だったこと
は、「機動戦士Ζガンダム」でも象徴的
に描かれている。限られたながら大気圏
突入用の簡易シールドとなる装備（冷
却フィールドなど）を携帯していた地
球連邦軍のRX-78ガンダムに対して、
ジオン公国軍のMS-06ザクにはそ

文 矢吹明紀

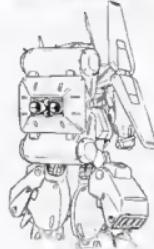
年代にみるMSの大気圏突入方法の変遷

U.C. 0087

●フライングアーマー



U.C. 0079



●バリュート・システム



U.C. 0079



RX-78 ガンダム

一年戦争時は、ガンダムに付与されていた大気圏突入方法（詳説ある）は、本来MSには適さない機軸といえた。こうした量的な能力は有効であることは間違いない、MS単体による大気圏突入（逆戻り）は様々な道が模索されるに需要があったという証左だろう。

グリス戦役になると、MS単体での大気圏突入もオプション装備でこなすようになっていた。フライングアーマーは後のZガンダムへ発展し、バリュートは戦艦クラスの大物のものですが用意されることもあった。こうしたものが開発されていることをみると、MSによる宇宙船隕石作戦はそれなりの必要性と需要があったという証左だろう。

いつた装備がなかった。そのため、離脱が遅れた機体が大気との摩擦で燃え尽きてしまうという例のシーンである。Zガンダムの世界觀は、設定や技術的に「Zガンダム」を維持する、同じ宇宙世紀を描いた存在である以上、このシーンをないがしろにすることはできなかつたのは想像に難くない。その上での大気圏突入を想定した形態への変形機能たつたというわけである。

ちなみに「Zガンダム」の作品冒頭において、ガンダムの改良型として扱われていたRX-178 ガンダム Mk IIでは、変形機能を持たなかつた。だがその代わりにフライングアーマー、ともに「Zガンダム」の世界觀で、大気圏突入シールド兼サブ・フレームシステムになる、飛行アシストデバイスというべき装備が用意されていた。これは機体そのものを変形させることができたZガンダムに至る流れの中では、非常に良く出来ていた。メカ設定だつたといつていいだろ。

MSZ-006 Zガンダムにおけるウェイブライダーへの変形は、このフライングアーマーの機能を変形によつて機体そのものを持たせたものであることは既述の通りである。

**本当は航空機の前には
MSは歯が立たない！?**

力圏内かつ相応の空氣抵抗が存在する、1G重

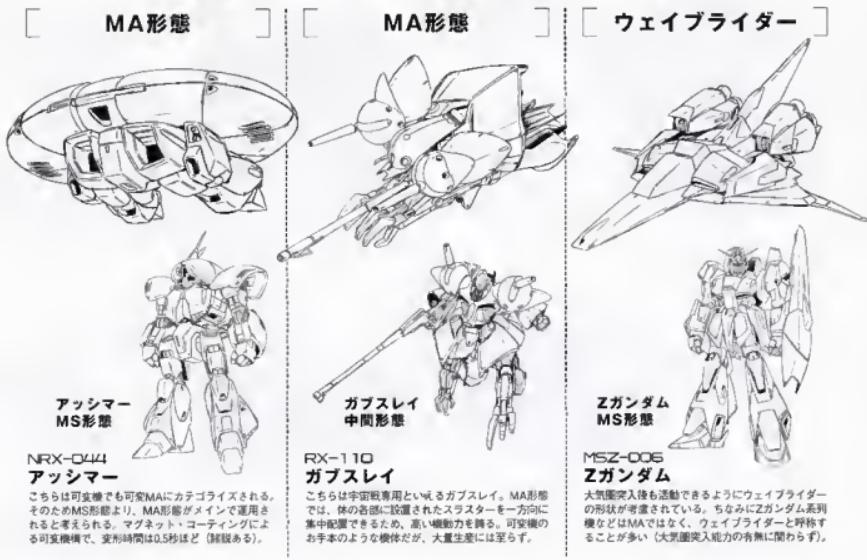
中でMSを有効に機動させる上で、Zガンダムの変形機能はいかなる働きを見せたのだろうか？ まず、大型の人型機動兵器であるMSにとって、多大な空氣抵抗をもたらす大気及び1Gの重力の存在は全くの足かせ以外の何物でもなかつた。MS自身、その空中機動に揚力や抗力による恩恵はまったく受けられていないのだから。

もちろんそのあたりは設計時から想定済みであり、重火器を携帯し地上を移動している分には、いわゆる二足歩行戦車としての有効性は極めて高かつた。その上で限定的ながら三次元機動を可能とするために、いわゆるスラスターを使つたジャンプ能力を付加していったのがMSだつた。

これについても、たとえば敵の一撃をかわす、もしくは射撃位置を素早く変えるといった動きにおいて、スラスターによる機動はそれなりに有効ではあつたものの、敵が本格的な航空機の場合だとMS側にはほとんど為す術はないと推測できる。これは現実世界においても、戦車が対地攻撃砲や急降下爆撃機に対しでまつたくの無力であつたこと似ている。

ガンダム世界において、航空機がMSに相手にに戦う様はほとんど描かれていないものの、実際に戦闘ともなれば航空機側が有利だつたことは明らかである。そこで新たな概念として描

可変機にみるMA形態の形状の違い



RX-004
アシマー

こちらは可変機でも可変MAにカテゴライズされる。そのためMS形態より、MA形態がメインで使用されると考えられる。マグネット、コーティングによる可変機構で、変形時間は0.5秒ほど(説明ある)。

Zガンダム
MS形態

MSZ-006
Zガンダム

大気圧突入後も活動できるようにウェイブライダーの形状が考案されている。ちなみにZガンダム西用機などはMAではなく、ウェイブライダーと呼称することが多い(大気圧突入能力の有無に関わらず)。

かることとなつたのが、Zガンダムとそれ以降のMSにおける航空機形態(MA)形態への変形だった。実際、大気圧突入よりも、実戦においてはこちらの方がより多くの戦闘現場で有効と判断されたはずである。

飛行能力の獲得により よりマルチタクス化したMS

Zガンダムが飛行形態への変形機能を得たことで、少なくとも高速移動とより高々度も含めた三次元機動において、それまでのMSではあり得なかつて、レベルでのMSではあり得なかつたレベルでの戦闘能力を獲得したこと。大きな戦力アップに繋がったことはいうまでもない。従来は複雑なストラーダコントロールによって維持していた空中での姿勢が、空力による安定を得ることができたのだから。その上で通常の航空機と異なつていたのは、必要に応じて人型機動兵器としてのMS形態に素早く戻すことで、対地支援戦闘や精密な地上施設攻撃、そして対

MSでの格闘戦も効率良くなすことができるようになつたのは大きい。これら兵器としての性能は、その戦術性能を現代の実在兵器に当てはめるのであれば、それは主力戦闘機、攻撃機、主力戦車、自走砲、対戦車ヘリコプター、VTOL攻撃機のすべてが一體となつたものにも等しい。すなわち想定されていた任務はなどと、まず

Zガンダムが飛行形態への変形機能を得たことで、少なくとも高速移動とより高々度も含めた三次元機動において、それまでのMSではあり得なかつて、レベルでのMSではあり得なかつたレベルでの戦闘能力を獲得したこと。大きな戦力アップに繋がったことはいうまでもない。従来は複雑なストラーダコントロールによって維持していた空中での姿勢が、空力による安定を得ることができたのだから。その上で通常の航空機と異なつていたのは、必要に応じて人型機動兵器としてのMS形態に素早く戻すことで、対地支援戦闘や精密な地上施設攻撃、そして対

飛行形態において、高々度で待機した上で、対ミサイル迎撃、中高度・低高度での邀撃戦闘、低高度での対地攻撃、同じく低高度での対MA戦闘など。そしてMS形態では歩兵支援を行いつつ、対MS格闘戦、地形を考慮した詳細な強行偵察、ピンポイントでの施設攻撃と破壊、アンブッシュ(待ち伏せ)といった戦闘と推測できる。

これらは現実世界の兵器運用においても基本的に同じであり、前述したピンポイントでの攻撃などは、精密誘導ミサイルなどを使う場合が多い一方で、攻撃ヘリコプターが搭載する大口径の機関砲(30ミリチーヌンなど)や空対地ミサイル(ヘルファイアなど)の有効性はいまさら声を大にして語るまでもない。また機体を山陰などに隠した上で、待ち伏せは、もはや対戦車ヘリコプターが最も得意とする戦術であり、これをより大規模かつ先進的なものとしたのがMSによる戦術といつていいだろう。

そして何といっても可変機構を備えたMSのメリットは、こうした小回りが効く形態から、必要に応じて素早くかつ安全に飛行形態へとエンジンすることができたことだった。これは現実世界におけるVTOL機の多様性などとはレベルが異なる、まさに空想の世界の産物ではあるが、言い換れば兵器としての理想こそが、この大き異

可変機構のチャンピオン？



M5A-005

メタス

簡易的な可変機構を搭載した可変機の技術接収機、直系の後継機などはないものの、簡易的な可変機構は、よほど優秀とみえて多くの可変機が参考にしている。ZII やリザルなどもそうした機体の一例で MS としての機体評価はともかく、構造は立派に譲承されたということだ。

宇宙空間における可変機の意義
ちなみにこれらはあくまでも重力と
空気抵抗の影響を強く受ける大気圏内
での話であり、このいずれの影響も無
関係となる宇宙空間においては基本的
に飛行形態、MS形態のいずれでも絶
対的なその戦闘能力に大差は生じなか
つた。

ただし地上戦と同様に特定の基地を
攻撃する場合や、その施設内で待ち仕
せるといった場合は、いうまでもなく
くMS形態の方があらゆる面で有利だ

なる任務を容易に両立させることができ、変形態にあつたといって良いだろう。

回りが効いたかということである。ここでは実然として長距離撃滅を不可能とするミニーフスキーパー子の存在が大きく作用していたという点で、現実世界における地上との戦術とは大きく乖離していた。

宇宙空間において飛行形態が有利だったのは、編隊を組んだ状態での戦闘が効果的だったシーン。たとえば敵の大艦隊を攻撃する場合や敵側がMS形態で大部隊を繰り出しており、個別格闘戦では明らかに味方が不利だった場合などが考えられる。すなわち、ミノフスキー粒子による影響がギリギリの距離で、飛行形態のまま編隊を維持しつづけたまま、敵の大艦隊を攻撃する。

可変機の登場こそ
ジオング技術者の夢!

今回は現実世界における可変機構構を備えた兵器との比較運用論という大前提があつたため、あえて飛行形態論と得失まで含めたものの、冒頭に記しておいた通り飛行形態の存在意義はあくまで大気圏突入と大気圏内での飛行性能の向上こそが目的であり、宇宙空間においてはMS形態による単機格闘戦こそがMSによる戦いの醍醐味だったに違いないだろう。

ジオン公国は、地球連邦軍との戦争におけるMSは、地球連邦軍のものよりも、任務をこなすために、より微妙に、もしくは大きくなり異なるその基本形態や装備を変えて、いる場合が多くあった。連邦軍側でいえばRX-75ガンタンクやRX-77ガンキャノンなどはその代表であるし、ジオン公国

ことは、後の「ガソルンダム」などに大きな影響を及ぼした。

メタスのコンセプトは、変形によるMSとMAの融合であり、そこには旧ジオン公国へのエンジニアが抱いていた、ある種の理想想ががあったのではないかと推測できる。そもそもMAという概念は、ジオン公国側がリードしていたのだから。

可変モビルスーツと現実世界の可変航空機

その共通項と相違点

機動戦士Ζガンダムの可変機が、当時の玩具的な流行を取り入れて登場したことは有名な話だが、一方で放送当時は実際の航空機の世界でも可変機が全盛といえる時代でもあった。そして、これら可変機の存在が可変モビルスーツに与えた影響もまた、少くないだろう。ここでは、可変航空機と可変モビルスーツの存在意義の差を考えながら、両者の共通項と相違点を探つてみることにしよう。

70年代に花開いた可変戦闘機だが……

現代、兵器の中でも航空機に関する様々な可変メカというものは、一時期に比べてその存在価値が低下しているようにも思える。

実際のところ、実用化目前の最新アイテムとしては、アメリカ海兵隊が導入を予定している多目的戦闘攻撃機であるロッキード・マーチンF-35Bライントンガ II の VTOL 機機能用可変排気ノズルくらいである。実際に第一線上に



文・矢崎開紀

おいて運用中である現用機を見ても

アメリカ空軍、兵隊のデイルトローダー VTO 機であるベル・ボーイング・ロータクraft の V-22 オスプレイ。そしていずれも可変後退翼を備えるアメリカ空軍の多目的超音速爆撃機のロッキウエル B-1 ランサー、イギリス／ドイツ／イタリア／サウジアラビアの各空軍で運用中の戦闘攻撃機であるバナヴィアトーネード IDS / ADV など数機種に過ぎない。

さらに東側には、かつて旧ソ連で開発された MIG-23、同 27、Su-17、同

24 といづた可変後退翼の超音速戦闘機

／ 戦闘攻撃機が相当数残存しているという情報もある。だが、いずれも旧式であり、その進化は既に停止して久しい。唯一 TU-160 は依然として第 1 線機のボジションを維持している。一方、前述した B-1 ランサーと想定している戦術は同様であることがから、今後の去就についてほぼ先是見えてる存在である。

思えば 1960 年代、初めから 1970 年代にかけてというものの、最新鋭軍用機の世界において、可変後退翼が一

MS-06
Ζ
plan
anaheim
electronics

【可変翼機セレクションⅠ】

グラマンF-14トムキャット



ザ 可変翼機（ミスター・カ？）といえるくらい、オトコノハートを刺激した可変翼戦闘機だ。アニメ作品に与えた影響は少なくない。アメリカ海軍機は2006年に退役してしまったが、イラン空軍では現役といわれる。

ロックウェルB-1ランサー



アメリカ空軍の戦術爆撃機。可変翼機の一種で現役の機体だが、その用途の特殊性から今も一線級の機体として活躍する。ただ、開発されたのが1985年と古さは否めない。

パナヴィア トーネード



欧洲各国で運用の可変翼機。同時代に誕生した機種の多くが退役するなか、戦闘機やイラク戦争などでも活躍している。まだ活動の余地はありそうだ。時代の趨勢からすると先行者は不透明だ。

界大戦中のドイツで考案されたという
のが定説だが、「航空機の飛行速度が
増すにつれて、後退角を増した方が良
い結果をもたらす」ということは、世
界各国の航空技術者にとって半ば常識
で、後はいつ実用化に向けて動き出
たのかを簡単に述べておきたい。そ
の上で現実世界での全盛期とほぼ時
同じくして誕生した「ガンダム」におけ
る可変ビルスースの存在理由を検証
するのが、番の近道のようにも思える。

種のブームでもあった。前述した現用、
もしくは現在では旧式化してしまって
いる機体、そしてすでに退役を退いて
いるものも含めて、ある時期まさに可
変後退翼機は大豐作。その中でも花形
的存在だった超音速攻撃機のジェネラ
ル・ダイナミックス F-111 アードバ
ーク、そして革新的な艦上戦闘機だっ
たグラマン F-14 トムキャットなどは、
まさにこの年代に基本設計がなされた
機体である。

が高く、人気アニメとなつた「超時空
要塞マクロス」での主役メカでもあつ
た「VF-1 バルキリー」と、その派
生シリーズのデザイン設定に及ぼした
影響は極めて大きかった。すなわち、
それで独自の世界観で構成されてい
たアニメメカに、初めて現実世界での
メカが大きな影響を及ぼした存在とい
つて過言ではなかつた。

そうした状況において、「機動戦士
ガンダム」においては、コクピットを
兼ねた戦闘機との合体メカこそあつた
ものの、機体そのものが大きく変化す
る様な可変メカは、基本的に存在しな
かつた。これに対して、1980年代
半ばという、まさに現実世界における
可変後退翼機全盛時代に制作された
「機動戦士ガンダム」における可変ビル
スースの存在理由を検証

「機動戦士ガンダム」において、初
めて大々的な可変メカが導入されたこ
とは非常に興味深い。

ここでは現実世界の軍用機における
可変メカがどのような目的で誕生し、
そして時代の流れと共に消え去つてい
たのかを簡単に述べておきたい。そ
の上で現実世界での全盛期とほぼ時
同じくして誕生した「ガンダム」におけ
る可変ビルスースの存在理由を検証

技術の発展と戦場の要望
において登場した可変機たち

軍用機における可変メカは、主翼取
付角を可動とした、いわゆる可変後退
翼に端を発する。発想自体は第二次世
界大戦中のドイツで考案されたとい
うのが定説だが、「航空機の飛行速度が
増すにつれて、後退角を増した方が良
い結果をもたらす」ということは、世
界各国の航空技術者にとって半ば常識
で、後はいつ実用化に向けて動き出
たのかを簡単に述べておきたい。そ
の上で現実世界での全盛期とほぼ時
同じくして誕生した「ガンダム」におけ
る可変ビルスースの存在理由を検証

が、主翼取付角を可動とした、いわゆる可変後退翼に端を発する。発想自体は第二次世界大戦中のドイツで考案されたとい
うのが定説だが、「航空機の飛行速度が
増すにつれて、後退角を増した方が良
い結果をもたらす」ということは、世
界各国の航空技術者にとって半ば常識
で、後はいつ実用化に向けて動き出
たのかを簡単に述べておきたい。そ
の上で現実世界での全盛期とほぼ時
同じくして誕生した「ガンダム」におけ
る可変ビルスースの存在理由を検証

が、主翼取付角を可動とした、いわゆる可変後退翼に端を発する。発想自体は第二次世界大戦中のドイツで考案されたとい
うのが定説だが、「航空機の飛行速度が
増すにつれて、後退角を増した方が良
い結果をもたらす」ということは、世
界各国の航空技術者にとって半ば常識
で、後はいつ実用化に向けて動き出
たのかを簡単に述べておきたい。そ
の上で現実世界での全盛期とほぼ時
同じくして誕生した「ガンダム」におけ
る可変ビルスースの存在理由を検証

化が推進されたのである。

戦後の時代だからこそ
必要だつた可変モビルスープ

のものを見直す必要があつた。ここで重要なのは、よ

数に頼った戦力ではなく、たとえ少數でも個々の能力を高めた兵器を運用する、という考え方であった。

スープでは明確な弱点とされていた。
大気圏内で劣る機動性能や、宇宙を飛ぶ
における直線的な機動力をいかに向上さ
せるか、という新たな命題も浮上して
くることとなつた。その結果、導入
出されたのが「必要に応じて空力的
優れた大気圏内飛行形態に変化させ

宇宙においては移動用の「スター類」を、ひと方向にまとめてこと」であり、これを可能としたのが乙ガソーナムに代表される可変モビルスーシだつたので

はないか、ということである。こうしての観点においては、ある意味、実機の可変翼機に似た希望によつて登場したといえなくもない。

エガンダムの設計においては、まず第一戦争で勝利した地球連邦において、新体制下における次期主力機として開発されたRX-78 ガンダムが、K-IIの存在が大きな影響を及ぼしている。RX-78 ガンダムの正常化型として設計されたこの機体は、可変機構こそ備えていないが、ムーバブル・フレームという新機軸の技術を実装し、これが後の可変機に及ぼした影響は決して少なくなかつた。ガンダムMK-IIは、地球連邦においては、ます

イターンズ用に開発された機体だった。だが、これらティーンズによる不正当な政権支配を打破すべく立ち上がった反教育組織であるエウーゴとの戦いが、

猪戦において、エウーゴ側の手に落ちることになったのはご存じの通り。一方で、エウーゴがアナハイム・エレクションの開発は、当初はデザインに関するこだわりはなかったようだが、一年戦争に勝利した連邦の象徴というべき

【可変翼機セレクションⅡ】

MiG-23



旧ソ連のミグ設計局が開発した戦闘機。東西冷戦終結後は、NATO（北大西洋条約機構）などでも運用されている。その際のコードネームは、発展型のミグ27も同様にフロッガーという（決してバララントのATではない）。

SU-17



こちらはスローイ設計局の開発による可変翼機。戦闘爆撃機や偵察機として1970年から運用されている。一応、現役機ではあるが、ロシア空軍から徐々に退役している状況だ。現在はポーランド空軍のみだとか。

実際の可変機と同様の悩みが可変モビルス-ツにもあつたともかく、こうしてミガンダムに至

假想する。この機動性に重点を置くべきだ」といふ考え方とは少し異なつており、単純比較では難しいが、要するに、当時は不可能と思われていた機体に要求される能力も、本来なら機体ことで大きく異なる戦術さえも、機体を変形させることで、両立を目指したという意味では、同様だということができるだろう。

る可変機の流れはできたわけだが、その実戦での運用における必然性として、最も重視されていたのは、大気圧突入能力と、その後短時間で戦闘可能な形態へと変形できることだった。このあたりのコンセプトは、現実世界での可変機における「高速性能と中

もちろん現業界における可変機の開発途上で多々、開発途中での構造の複雑化とともに重量増加、さらに開発「コストの上昇」に悩まされたということは、おそらくガンドームの世界においても同様であり、重量増加をカバーするためにエンジニアの出力の向上（ガンドームの場合にはジエネ

【可変翼機セレクションⅢ】

F-35B ライトニングⅡ



航空自衛隊の採用によるニュースが記憶に新しいステルス機。用途に応じて派生機で対応するスタイルゆえ、複数の種類が存在する（写真はVTOF機のB型）。コスト面や開発の遅れといった文言はMSに近い？

V-22オスプレイ



こちらもニュースで話題の可変翼機。正面にはティルトローター機に分類され、ヘリコプターと飛行機の要素を合体させたような航空機だ（機体は輸送機）。開発首体は1940年代からと、意外と古かったりする。

レーダー出力とスラスター推力の向上、開発コストを無視できるレベルでの、一部のエリートバイロット専用機として量産化は行わない、といった決断と共に、実用化にこぎ着けることができたということである。実際、こうした特徴はマジンダム本編でも象徴的に描かれている。特に大気圧突入のためのウェーブライダー形態からの直接軽闊などは、当初はあくまでアビライダーの空力特性が、そのまま戦闘機として機動できるなど、かつての「マジンダム」ではあり得なかつたモビルスイッチの戦い方が表現されたといつて良い。

さて、マジンダムにおける可変メカは、当初はあくまでアビライダーの空力特性が、そのままアビライダーとして機動できるなど、かつての「マジンダム」ではあり得なかつたモビルスイッチの戦い方が表現されたといつて良い。

可変翼機の衰退と新たなる可変機の登場

一方、現実世界における可変翼機は、あらゆる速度域での良好な機動性の実現を目指した可変後翼機の他に、別に垂直離着陸機の他に、別

現用における最新機のV-22オスプレイ

は、本編を通して最終的には多くの進化版が登場することとなる。もちろん可変機はあくまで一部の脆弱なバイロットのための存在であり、その他大勢のバイロットのために、可変機構を持たない量産機が多用される。これはトータルでの運用コストを下げるためにも必然だった。

い、そして冒頭で記述した現在開発中のF-35BライトニングⅡはいずれもこのVTOF機である。

ここで注意すべきことは、かつて一世を風靡した可変後翼機はいずれもそう遠からぬ未来に消えていくことは、すでに歴史的必然となつていているという事実。垂直離着陸がアメリカ海兵隊という特殊な戦術を多用する戦闘組織にどうして依然として重要な機能的要素なのである一方、あらゆる速度域での戦闘能力の高さとなると、やはりその必要性は薄。

戦闘機の設計においては、アフター・バーナーを使用しない状態でマッハ1.5程度の速度を出すことができ、同時に優れたステルス性能と近接格闘戦における機動性こそが重要で、マッハ2を超えるスピードは、撃ちっぱなしの自律誘導が可能なアクティブホーミングミサイルに任せられるというのが現在の趨勢であることは間違いない。

SFの世界では何が出てくるか？

マジンダムが鋭意製作されていた時代、軍用機の世界においては可変後翼機にしきVTOF機にしろ、まさに第一線の花形機であったが、それがわずか20年ほどの間にまったく不要とまでは言わないが、その存在意義が希薄な技術となると、一体誰が予想した

だろうか？ マジンダム世界における兵器の技術設定は、基本的に依然としてSFのそれであり、現実では夢の存在でありながら、こと可変技術のみはその優位性が明らかに薄れてしまっているのである。

一般に、SFアニメの世界はいつの時代も、現実とはかけ離れた荒唐無稽な部分があった。一方、それなりの夢を駆使することができたものだつたが、その存在のはずだった現実世界の方が、今となってはSFとはまた異なる推測の域を超えた「進化」を見せていくといふことである。

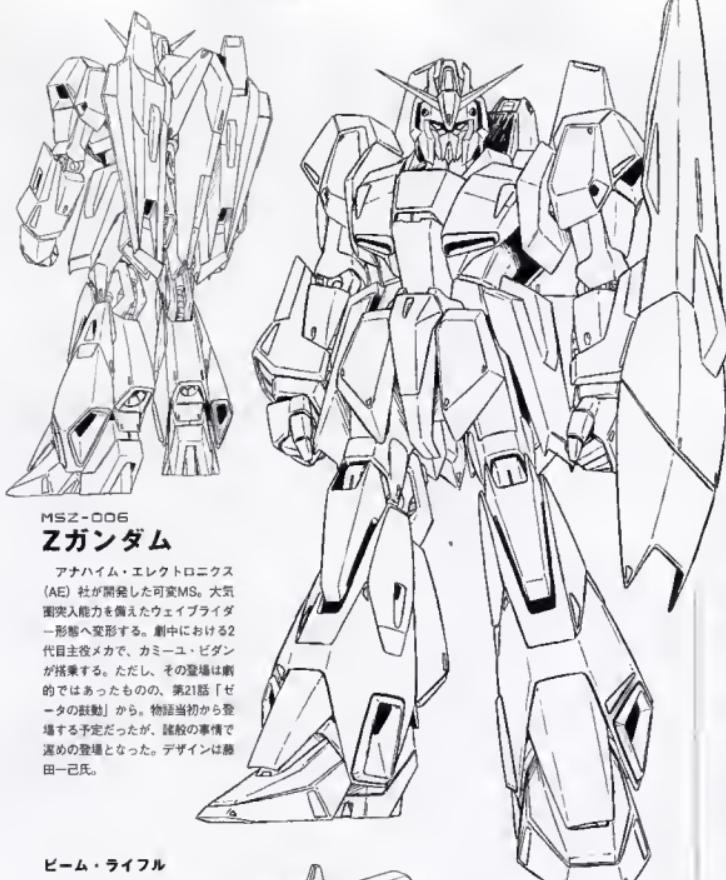
とはいえ、マジンダムにおいて可変メカがその存在理由として挙げた、あらゆるシチュエーションでの機動性と安全性の向上は、未だ現実世界ではなっていない。大型の人工機動兵器が遠い未来に実現されることには、その設計において非常に重要なボンジションを占めることは間違いない。

その時こそ、現時点では推測も不可能な、新たなる可変メカが導入されるのではないかと未来に期待したいところである。何よりも世の技術者の多くは、よりアグレッシブかつチャレンジングな設計を好みという事実において、現実も未来も関係ないのだから。

モビルスーツ
M S 設定資料

このページでは、各映像作品やゲームなどのメディアに登場したMSの設定資料を紹介する。基本はZ計画とそれに付随して開発されたア

ナハイム・エレクトロニクス社製の派生機を中心に取り上げ、後年の機体も収録した。なお、登場作品タイトルの後には年代を記した。

MSZ-006
Zガンダム

アナハイム・エレクトロニクス
(AE) 社が開発した可変MS。大気
衝突能力を備えたウェイブライダ
ー形態へ変形する。劇中における2
代目主役メカで、カミュー・ビダン
が搭乗する。ただし、その登場は劇
的ではあったものの、第21話「ゼ
ータの鼓動」から。物語当初から登
場する予定だったが、諸般の事情で
遅めの登場となった。デザインは藤
田一巳氏。

ビーム・ライフル

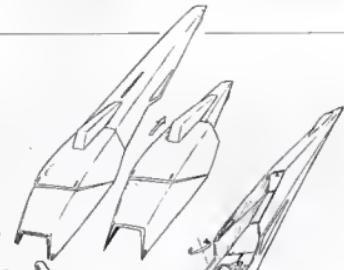
グレネード・
ランチャー

▼マウント形態



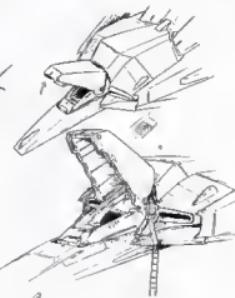
ハイ・メガ・ランチャー





→シールドは伸縮式でウェイブライダー時には機首部分になる。ビーム・サーベルは機のサイドアーマーに収納され、ビーム・ガンとしても使用可能。

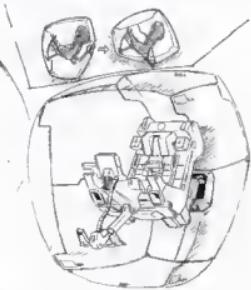
コクピット
ハッチ



ビーム・
サーベル



コクピット
レイアウト



ウェイブ
ライダー

→この形態になることで飛行で大気圧突入が可能。下に掲載した変形パターンを見てわかるように、かなり複雑な変形をする。



MS形態からウェイブライダー形態への変形パターン

1



2



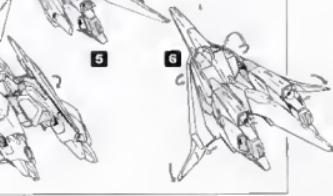
3

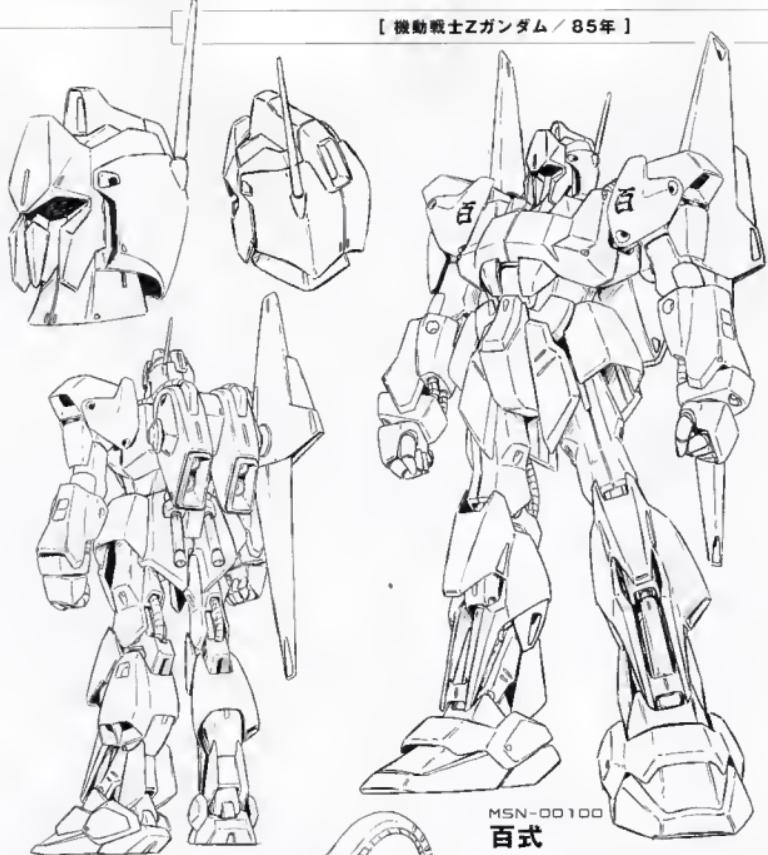


4

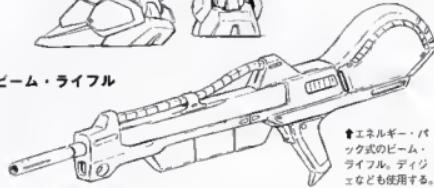


5



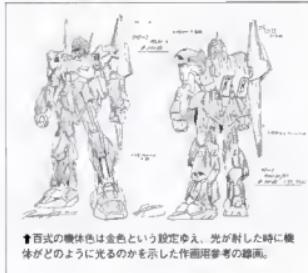


ビーム・ライフル



エネルギー・パック式のビーム・ライフル、ディザイユなども使用する。

ハイライト参考用



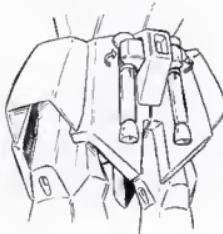
百式の機体色は金色という設定ゆえ、光が射した時に機体がどのように光るかを示した作画用参考の図面。

MSN-00100

百式

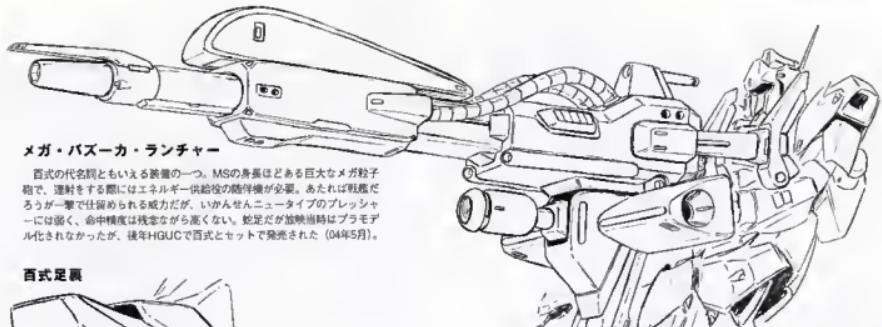
グラトロ大尉（シャア・アズナブル）の新たな機体。実質的に専用機といえ、機体色も赤から金色へと変更された。かつて赤い彗星の異名で恐れられた彼が、赤い機体から乗り換えた理由は何だったのか？ 実は、その辺りのエピソードは、3DCGで描かれるガンダムシリーズのショートフィルム作品の「GUNDAM EVOLVE /12」で描かれている。デザインは永野護氏。

リアアーマー & サーベルラック



コクピットハッチ

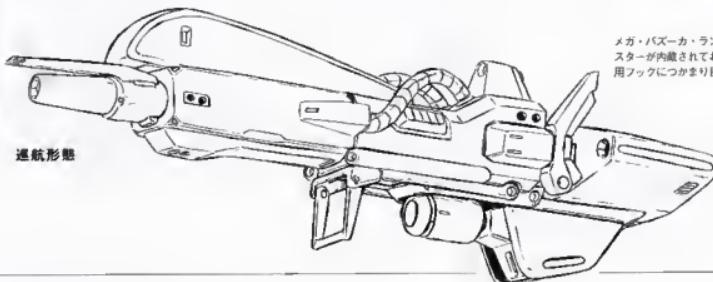
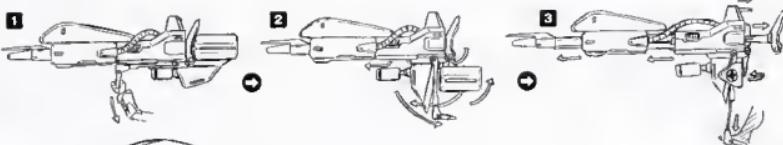
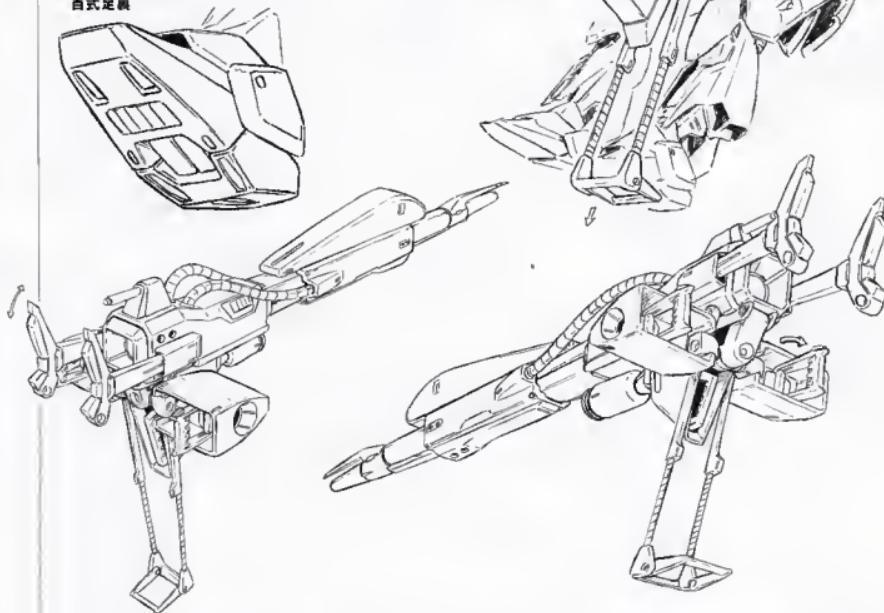




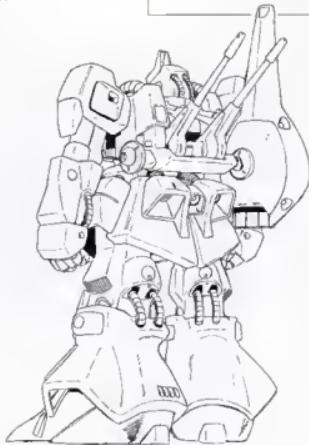
メガ・ bazooka・ランチャー

百式の代名詞ともいえる装備の一つ。MSの身長ほどある巨大なメガ粒子砲で、連射をする際にはエネルギー供給役の魔伴機が必要。あたれば戦艦だろうが零式仕事められる威力だが、いかんせんニュータイプのフレンシャーには弱く、命中精度は残念ながら高くない。蛇足だが放送当時はプラモデル化されなかったが、後年にHGUCで百式もセットで発売された(04年5月)。

百式足裏



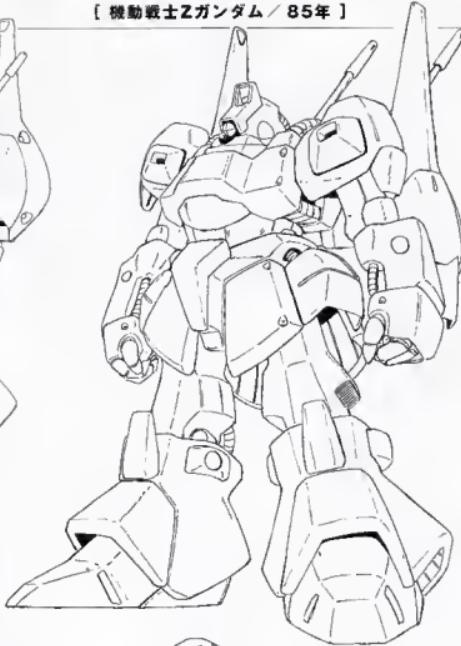
メガ・ bazooka・ランチャー本体にはスラスターが内蔵されており、出撃時には脚部用フックにかかり目的宙域まで移動する。



RMS-099

リック・ディアス

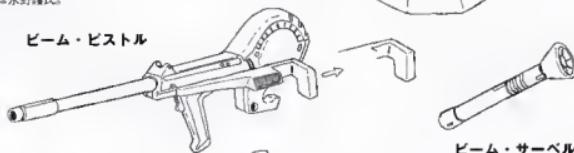
エウーゴとAE社の共同開発による量産機。多くのパイロットがクワトロ大尉の専用機カラー（赤系）に塗り替えたのは有名なエピソードだ。ただ、宇宙戦では黒系の方が有利な気がしなくもない。しかし、宇宙で活動していることを誇示する意味を考えると、黒から赤への機体色変更も頷ける。デザインは永野護氏。



バルカン・ファランクス



ビーム・ピストル

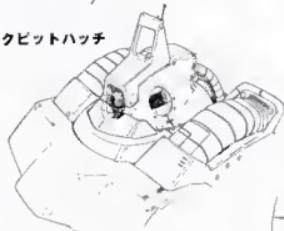


ビーム・サーベル

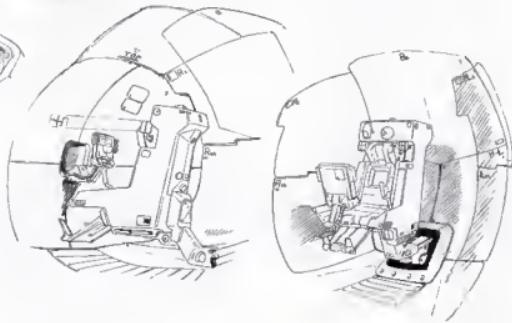
↑ビーム・サーベルは背中のパイロッターラックの底面にマウントされている。ビーム・ピストルは先に捨てたビーム兵器で、クレイ・バズーカは实体弾兵器。



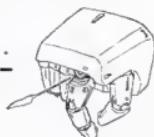
コクピットハッチ



全天周囲モニター&リニア・シート



トリモチ・ランチャー



MSK-008
ディジエ

地球圏でティターンズへの反抗活動をしているカラバが、エウゴから供与された機体を愛用しカスタマイズした機体。武器は百式と同型のビーム・ライフル、リック・ディアスのクレイ・バズーカなどを使う。そのジオンっぽい風貌から、当時アムロが乗ることに違和感を覚えたファンもいたとか。第35話「キンジャロの嵐」から登場。

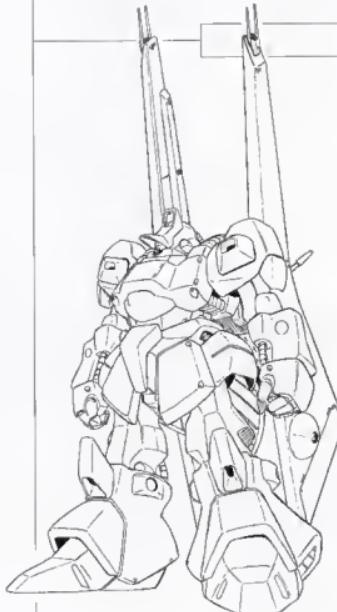


足裏

【機動戦士ガンダムZZ／86年】

RMS-0998
シュツルム・ディアス

リック・ディアスの高機動型。ただし、この機体はエウゴではなく、政治目的の材料としてジオン共和国（ネオ・ジオン）へ供与された。まさかの悪役転換であった。「ガンダムZZ」第30話「鉄壁、ジャムル、フイン」に登場。放送当時、プラモ化はされなかったが93年4月にHGUCとして発売された。基デザインは永野護氏で、クリンナップを明貴美加氏が行った。



バインダー無し
背面



MSA-005

メタス

エウゴの可変MS。主なパイロットはレコア・ロンドやファ・ユイリィ。レコアが復讐から(当初は戦死扱い)はファがパイロットを務めた。出撃するたびに、どこかが壊されている印象だが、不思議と搭乗者生還率は高い。次回作の『ZZ』でもファの乗機として活躍したが、ZZガンダム登場前の第10話『さよならファ』で戦列を離れた。

ビーム・サーベル & ラック

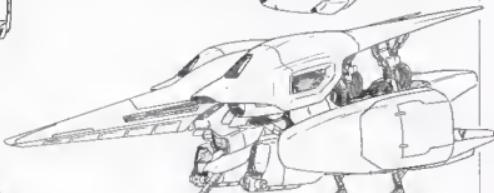
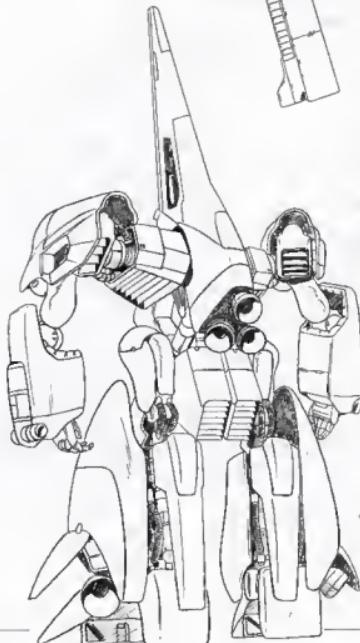


アーム・ビーム・ガン



MA形態

→いかにも宇宙戦闘機といった感じのMA形態。設定では駆逐用可変機構などといわれるが、肩部分に肩甲がくっつくなど、結構複雑にできていたりする。MA変形時では駆逐用にランディングギアが設けられている。

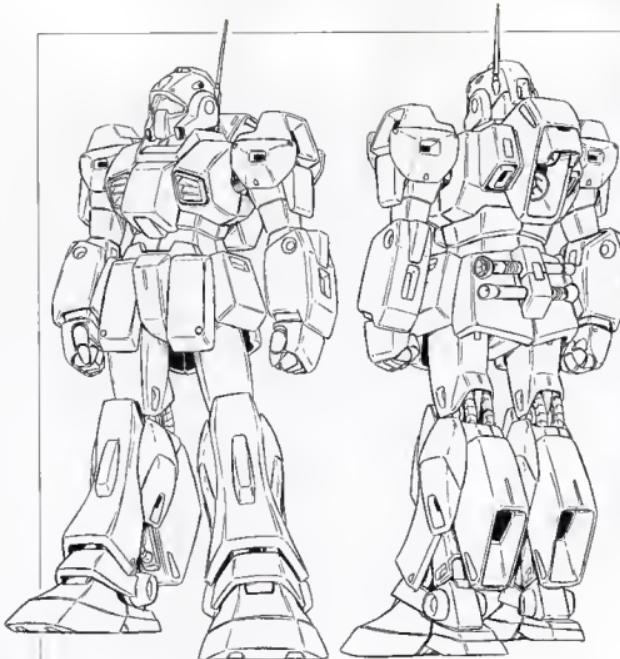


†ランディングギア展開時

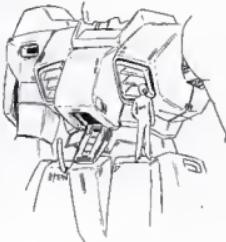
MSA-003

ネモ

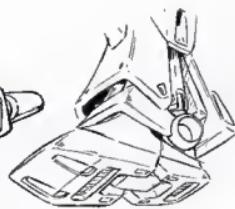
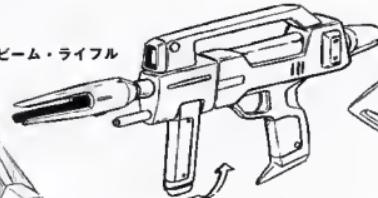
エウーゴが運用する量産機。ジムIIよりも高性能で位置付けとしては後継機にあたる。主なパイロットはカツ・コバヤシやエウーゴの一般兵。意外なところでロザミア・バダムが搭乗している。当時はエウーゴの機体だったが、後の『ガンダムUC』ep 4 では、晴れて連邦軍の機体として活躍する姿が見られる。その際はゴーグルの色の違いが見分けるポイントである。



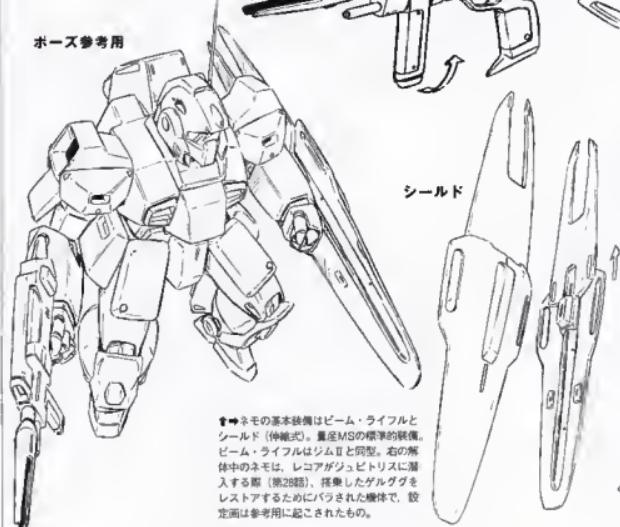
コクピットハッチ



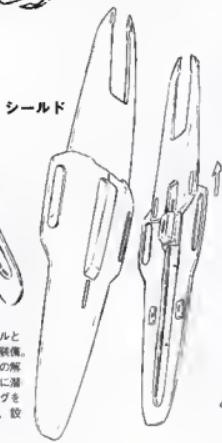
ビーム・ライフル



ポーズ参考用



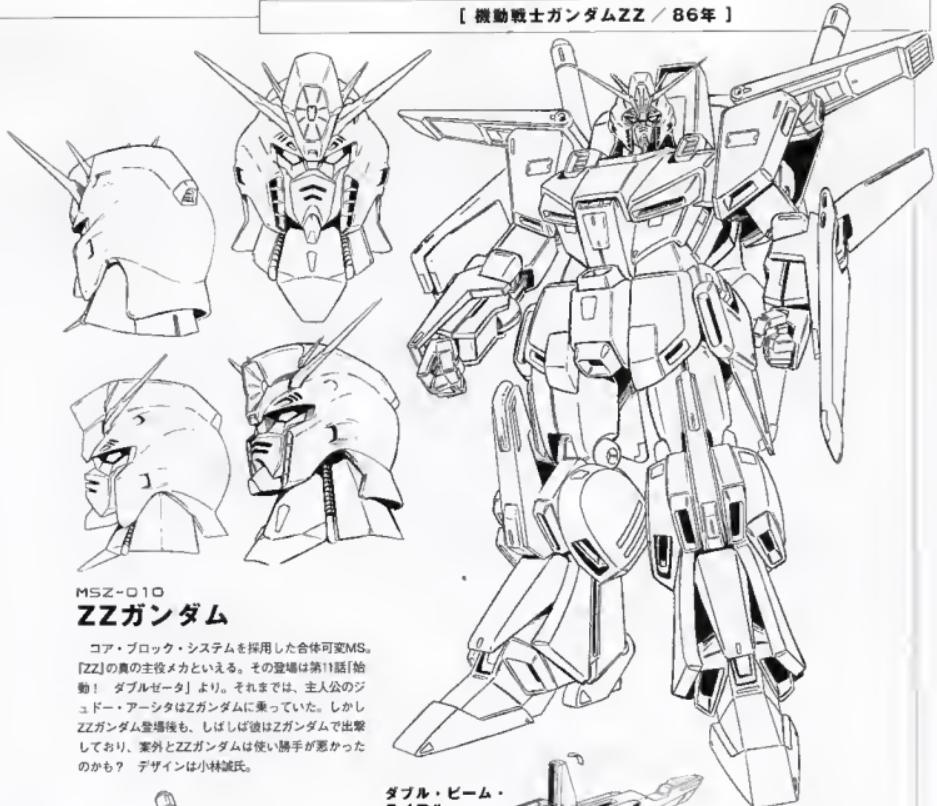
シールド



解体中の ネモ

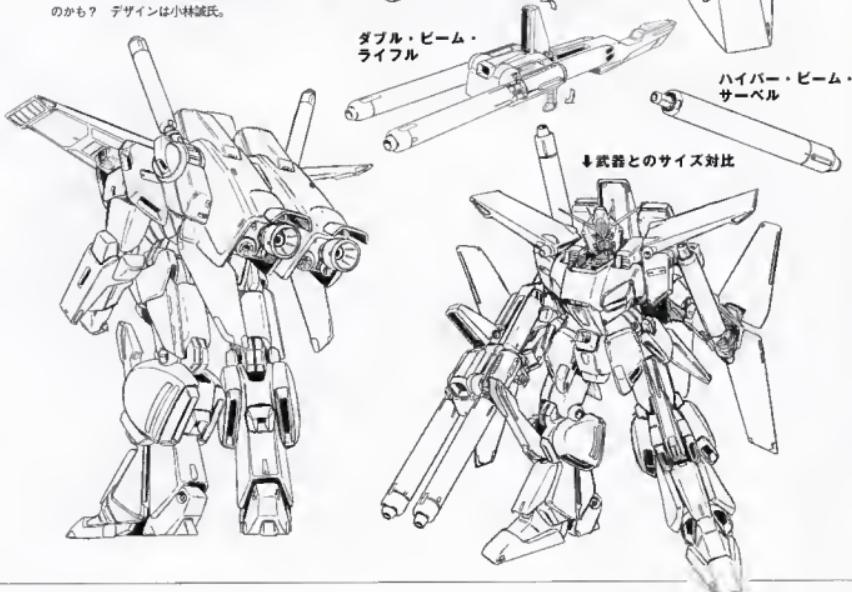


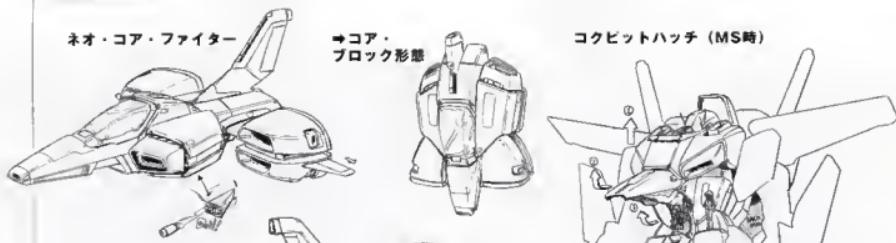
→ネモの基本装備はビーム・ライフルとシールド（伸縮式）。量産MSの標準的な装備。ビーム・ライフルはジムIIと同型。右の解体中のネモは、レコアガリューピトリスに搭入する際（第28話）搭乗したガルグダをレストするためパラされた機体で、設定画は参考用に起こされたもの。



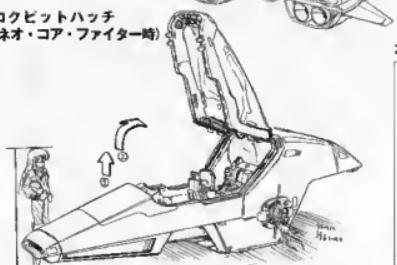
MSZ-010 ZZガンダム

コア・ロック・システムを採用した合体可変MS。『ZZ』の真の主役メカといえる。その登場は第11話「始動！ ダブルゼータ」より。それまでは、主人公のジュード・アーシタはZZガンダムに乗っていた。しかしZZガンダム登場後も、しばしば彼はZZガンダムで出撃しており、案外とZZガンダムは使い勝手が悪かったのかも？ デザインは小林誠氏。





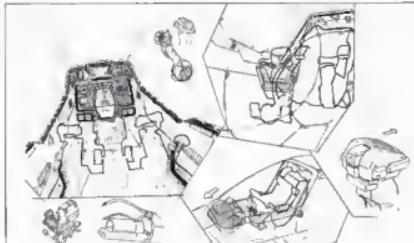
コクピットハッチ
(ネオ・コア・ファイター時)



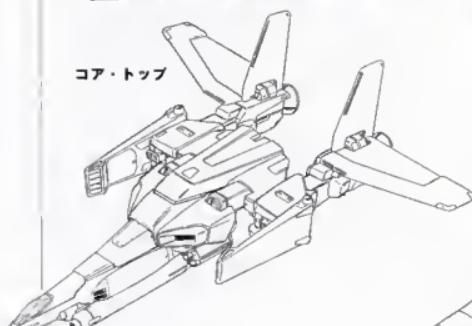
コクピットハッチ (MS時)



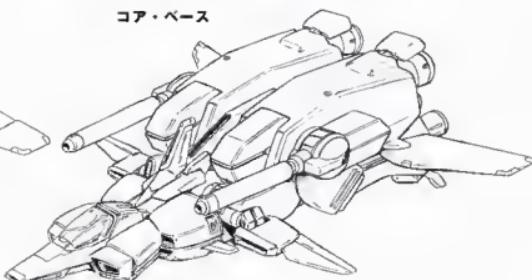
コクピットレイアウト



コア・トップ

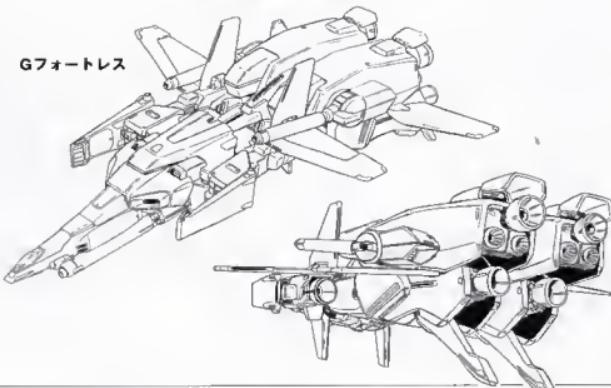


コア・ベース



↑上半身のコア・トップ、下半身のコア・ベースが合体してGフォートレスへ。それを経て、変形してZZガンダムになるわけだが、劇中ではコア・トップやコア・ベース、もしくはZZガンダムの状態で出撃することが多く、Gフォートレスで出撃する機会はほとんどなかった〔劇中1度きり〕。

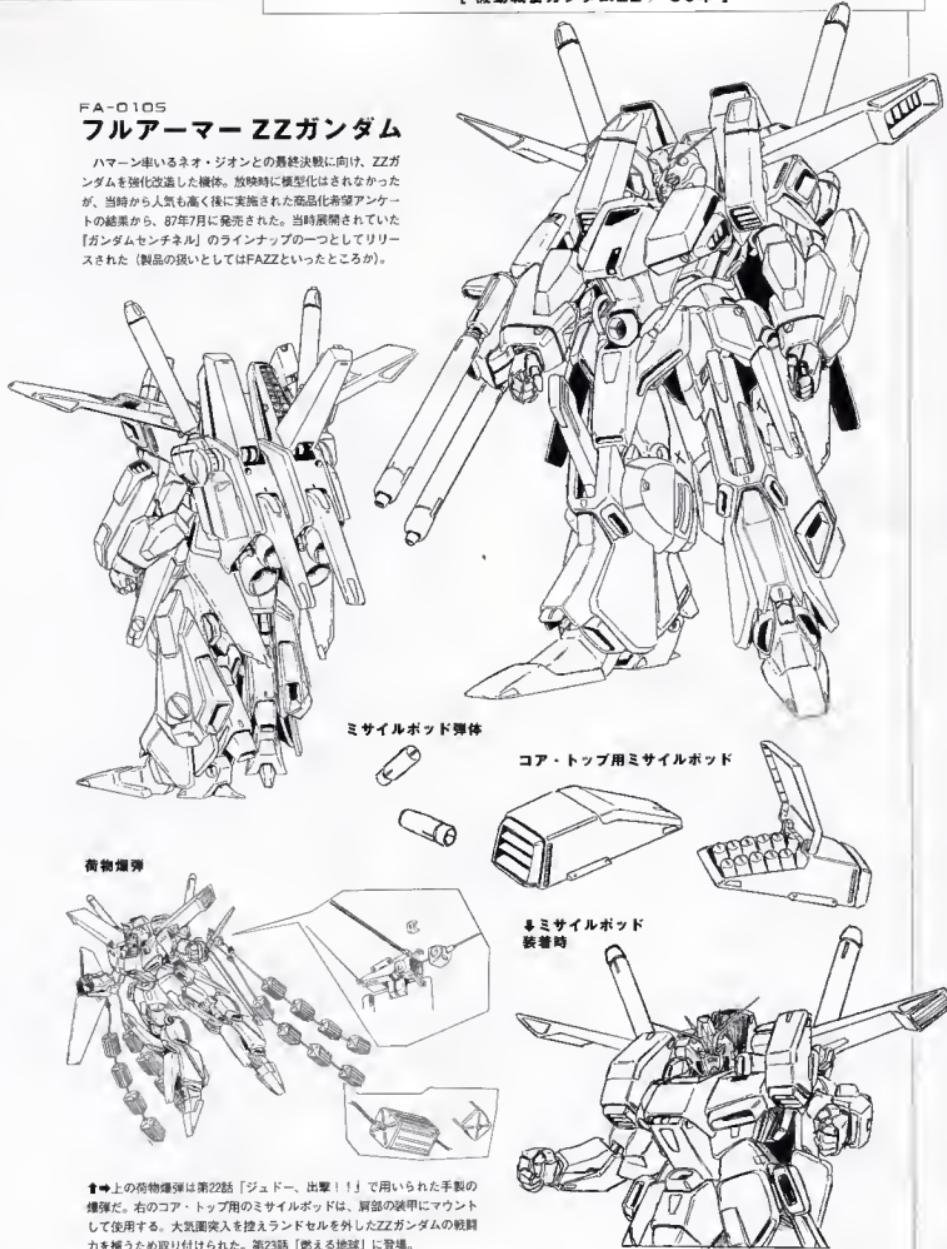
Gフォートレス



FA-0105

フルアーマー ZZガンダム

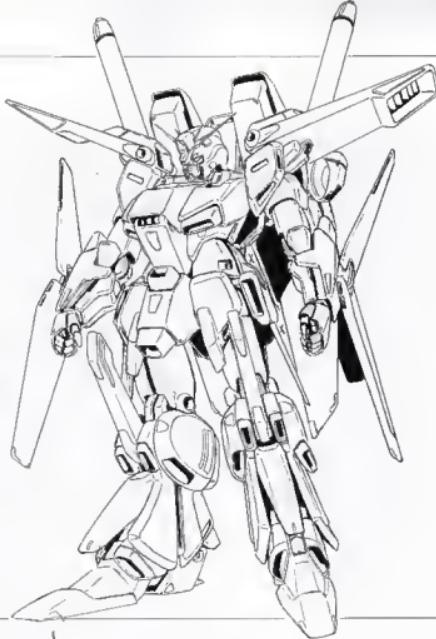
ハマーン率いるネオ・ジオンとの最終決戦に向け、ZZガンドムを強化改造した機体。放映時に模型化はされなかったが、当時から人気も高く後に実施された商品化希望アンケートの結果から、87年7月に発売された。当時展開されていた『ガンダムセンチネル』のラインナップの一つとしてリリースされた（商品の名前としてはFAZZといったところか）。



↑上:荷物爆弾は第22話「ジードー、出陣！」で用いられた手製の爆弾だ。右のコア・トップ用のミサイルボッドは、肩部の装甲にマウントして使用する。大気圧突入を控えランデセルを外したZZガンダムの戦闘力を補うため取り付けられた。第23話「燃える地球」に登場。

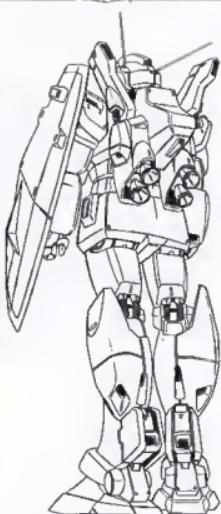
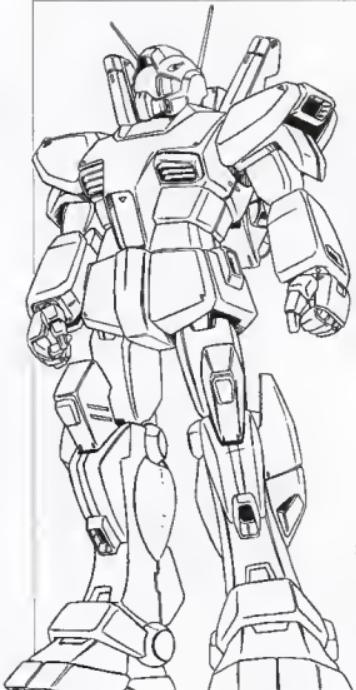
強化型ZZガンダム

フルアーマーZZガンダムの素体にあたる機体。フルアーマー化に耐えられるよう各部改修を行ったという設定。従来型と比べると腰アーマーやランドセルなどの形状が異なる。なお、00年8月に発売されたMG「フルアーマーダブルゼータガンダム」で、初めて立体化された。ちなみにフルアーマー、強化型ともに、明貴美加氏がクリンナップとデザインを行った。



ZZガンダム用バリュートパック

左はZZガンダムの地球降下用バリュートパックの設定画。これの取り付けを行うため、ランドセルを外しミサイルが使えない状態のZZガンダムは、肩部にミサイルボッドを装着して出撃した（右ページ参照）。しかし、当のジドーはZガンダムで地球へ降下したので、結局使われることがなかった幻の装備なのだ。



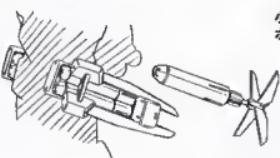
RGM-86R
ジムIII

第一次ネオ・ジオン戦争期の連邦軍の主力MS（一部機体はカラバでも運用）。ジムIIの後継とされ、開発においてはガンダムMk-IIの技術が導入されている。第27話「リーナの血（前編）」から登場し、強力でありながら主人公たちのピンチを救うという、珍しい活躍をした。後の「逆シャア」「UC」などにもゲストメカとして登場。11年7月に発売されたHGUCが初のプラモデル化。

ノーマルミサイルボッド装着時



大型ミサイルランチャー

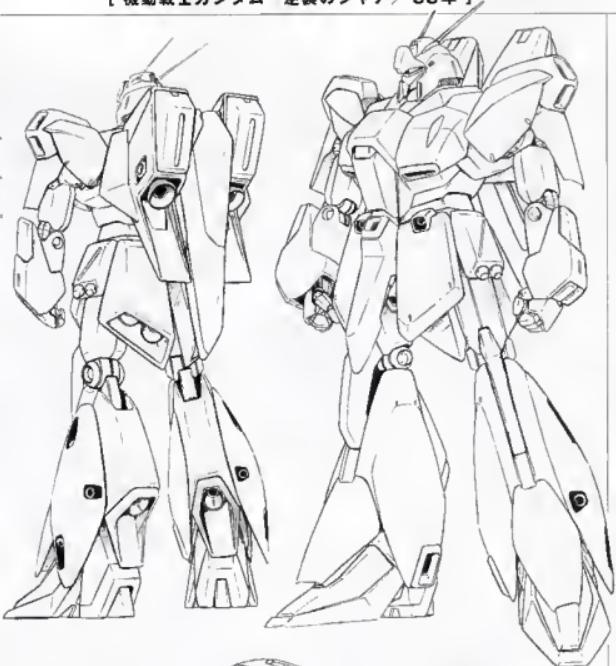


大型ミサイル
ボッド

RGZ-91

リ・ガズィ

隕石可変機構とBWS(バック・ウェポン・システム)を採用した高機動MS。BWSをバージすると元には戻れない。本来は、宇宙戦闘機としての要素が強いのかもしれない。劇中冒頭のアムロ・レイの搭乗機で、アムロがΖガンダムへと乗り換えた後はケーラ・スカやチェーン・アギが搭乗している。



コクピットハッチ



コクピットシート



ビーム・ライフル



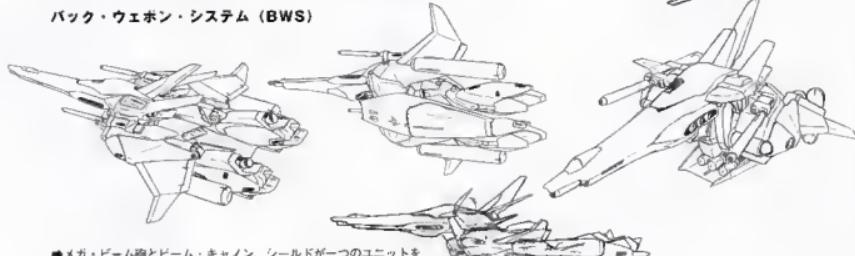
グレネード・ランチャー



ビーム・サーベル



バック・ウェポン・システム (BWS)

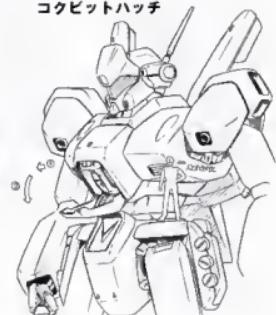


メガ・ビーム砲とビーム・キャノン、シールドが一つのユニットを形成する。BWSにサンドされる形でリ・ガズィが合体している。リ・ガズィ本体はΖガンダムのような大胆な変形はしていない。

RGM-89
ジエガン

ロンド・ヘル、ならびに地球連邦軍の主力MS。機体としてのボテンシャルも高く、重武装ながらかなり高性能。その後、宇宙世紀0100年代まで主力として前線に立ち続けた。『ガンダムUC』では数多くのバリエーションが登場している機体でもある。劇中に於ける主なパイロットはケーラ・スカやハサウェイ・ノアなど。

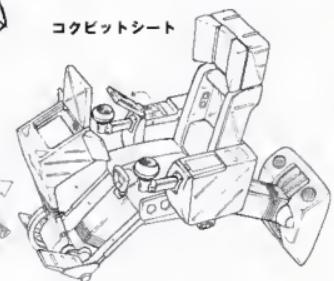
コクピットハッチ



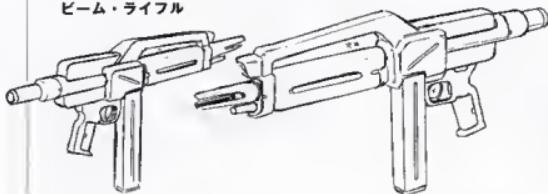
足裏



コクピットシート



ビーム・ライフル



シールド

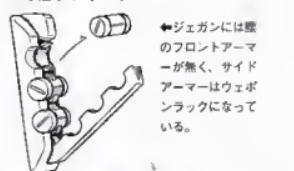


◆シールドの両サイドには2連装ミサイル・ランチャーを備えている。

ビーム・サーベル&ラック



3連グレネード



◆ジエガンには腰のフロントアーマーが無く、サイドアーマーはウェポンラックになっている。

連邦軍MS共通マニピュレーター

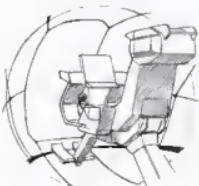


RX-93
ν ガンダム

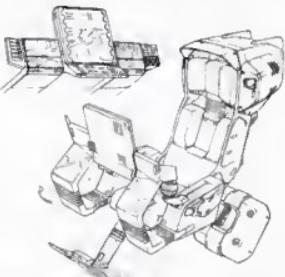
ロンド・ベルのMS隊隊長であるアムロ・レイ専用機。彼の設計により開発が進められ、連邦軍としては初の無線式サイコミュ兵器（フィン・ファンネル）を搭載した。ネオ・ジオンの姫騎、シャア・アズナブルの超るザビーと、史上稀にみるMS同士の殴り合い、文字通りの格闘戦を展開した。



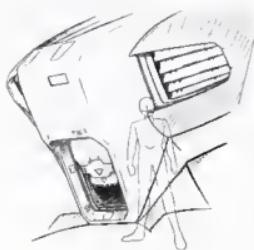
コクピットレイアウト



コクピットシート



コクピットハッチ



胸部ハッチ

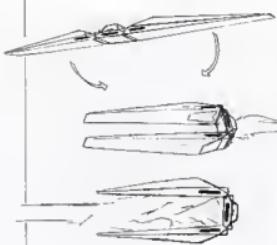


簡易コクピットシート & 人物サイズ対比

→ν ガンダムが月のアナハイム・エレクトロニクス本社から発進する際、チェーン用のシートが急増で取り付けられた。2人が重なるように座るのを記した設定画。



フィン・ファンネル



フィン・ファンネル
装備状態



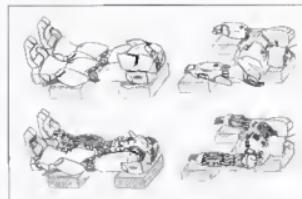
ニュー・ハイバー・バズーカ



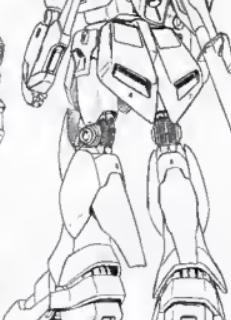
シールド裏面



ビーム・サーベル



→アクション上でシャアの
駆るザザビーと激闘を繰
り広げるVガンダムの、
ダメージ状態を表した設
定画。ザザビーを殴りつ
けてボロボロになるマニ
ピュレーターや、ビーム・
サーベルで溶解する腰部
の様がイメージできるよ
うに描き起こされている。

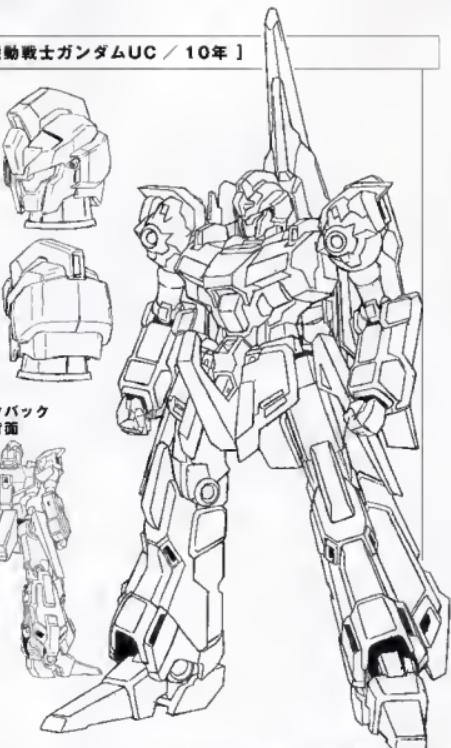


↑劇中冒頭のオープニングで組み立て作業中のVガンダムの設定画。上下に体が分かれている、各部の装甲が取
り外した状態のものも描かれている。かけられている布
が取られ、Vガンダムの目が光るシーンにつながる。

RGZ-95/C

リゼル／リゼルC型（指揮官機）

リ・ガズィの後継機の存在の可MS。可変機構などはメタスなどを参考している。バックパックの換装により大気圏内でも運用可能。またウェイブライダー時の高機動性を活かし、随伴する機体を運ぶサブ・フライ・システムとしても使われた。ロンド・ペル隊などに配備され、リディ・マーセナの最初の乗機でもある。



(指揮官機)

(一般機)

バックパック
無し背面

↑大型のバックパックを装備したタイプはC型（指揮官機）と呼ばれる。



ウェイブライダー

(指揮官機)

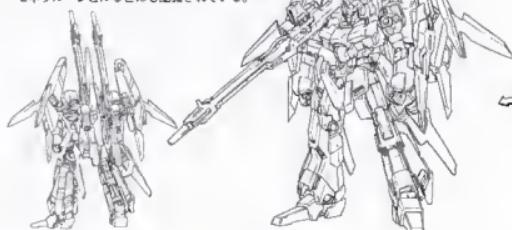
(一般機)

ロング・ビーム・ライフル

メガ・ビーム・ランチャー

**RGZ-95C リゼル
C型ディフェンサーaユニット装備**

→グリップ戦闘で活躍したガンダムMk-IIのようにディフェンサーユニットを装備できる。メガ・ビーム・キャノンを中心としたディフェンサーaユニットと、ミサイルによる実体弾の支援火器で構成されるディフェンサーbユニットがある。地球連邦軍のゼネラル・リベリなどにも配備されている。



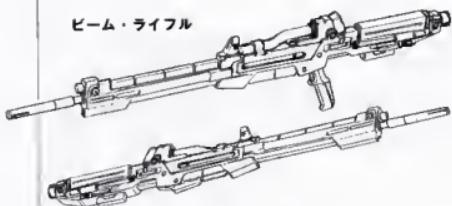
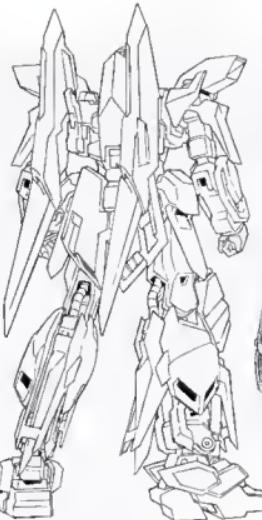
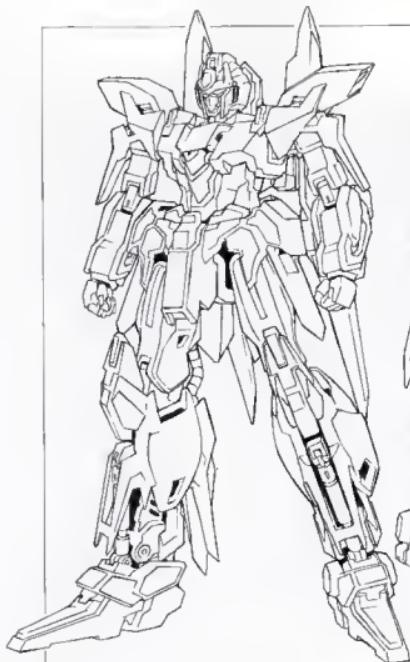
シールド

ビーム・サーベル／ラック

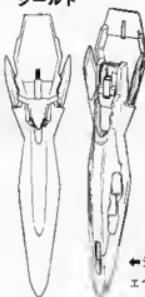


MSN-001A1
デルタプラス

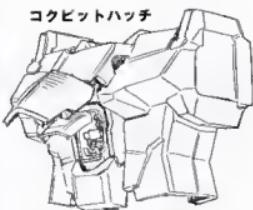
グリップス戦役時にMS開発計画としで進められていた「Z計画」で、モガンドムの系譜として開発が進められていた試作可変MS。しかし、道半ばで開発は凍結されていた。機体不足に窮したロンド・ベル隊の要請で急きょ、リディ少尉の機体として戦場へ投入された。しかし、機体はユニコーンガンダム2号機パンシィとの遭遇戦で破壊されている。



シールド

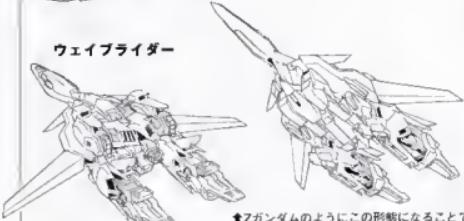


コクピットハッチ

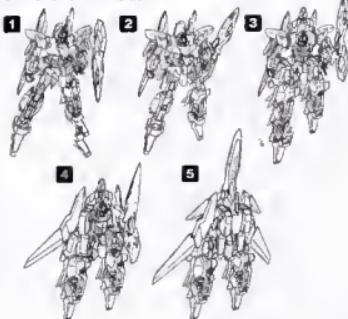


➡シールドはZガンダム系の機体と同様に、ウェイブライダー時には機首になる設計。

ウェイブライダー



デルタプラスの可変パターン



↑Zガンダムのようにこの形態になることで単機での大気圧突入が可能となっている。非常に高性能な機体といえるが、その機能面をみると時代的にはすぐわない印象だ。ただ、劇中ではオードリー（ミネ）を地球に送る大切な役目を担うので、面目躍如といったところだろうか。



RX-0

ユニコーンガンダム

UC計画においてビスト財団主導で開発されたニュータイプ専用機。NT-Dと呼ばれるシステムを搭載しており、発動することでユニコーンモードからデストロイモードへと変身する。システム発動時は前身に内蔵されているサイコフレームが赤く輝く。しかし、発光の原理は不明らしい。また、「ラプラスの箱」の在処を示す鍵ともいわれている。主人公パナージ・リンクスの乗機。

ビーム・マグナム



ハイパー・バズーカ



ビーム・ガトリング



シールド



デストロイモード



(ユニコーンモード)

頭部バルカン



ユ

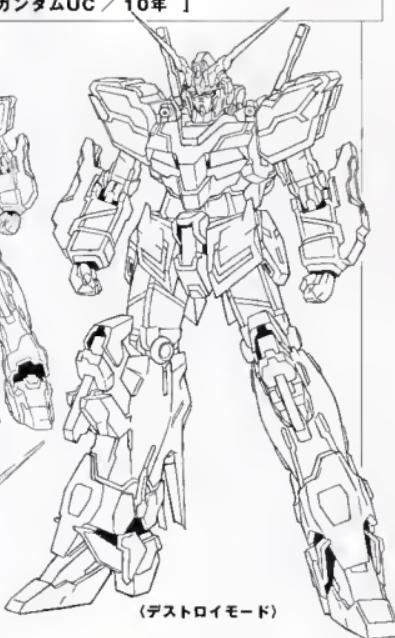
ニコーンモード

ン

モード

モード

デストロイモード



(デストロイモード)

RX-0

ユニコーンガンダム2号機
パンシィ

ユニコーンガンダム2号機。ユニコーンガンダム同様にNT-Dシステムを搭載し、発動した際にはサイコフレームが金色に輝く。アームド・アーマー VNやBSといった特殊な武装を装備する。オーガスト研究所において、重力下での慣熟可動実験がされた。再調整を受けたマリーダ・クルスの機体として登場した。

ユニコーンモード

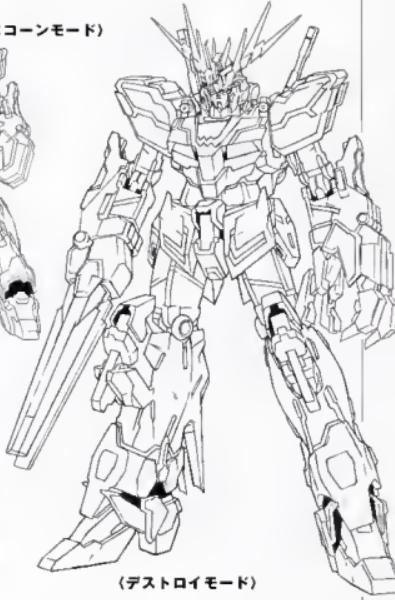


頭部バルカン

デストロイモード

デストロイモード

(ユニコーンモード)

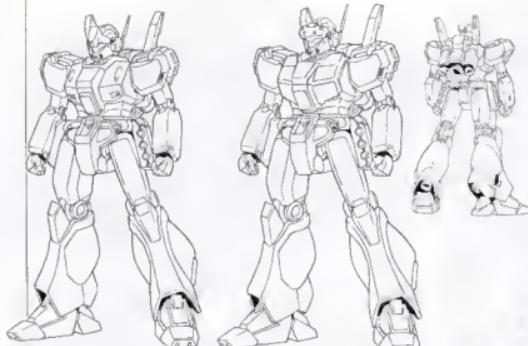


(デストロイモード)

RX-0 [N] ユニコーンガンダム2号機
パンシリ・ノルン ユニコーンモード

パイロットであるマリーダを失い、次の搭乗者であるリディ・マーセナス用に改めて調整が施されたパンシリ。新たな装備としてアームド・アーマー DE、アームド・アーマー XCを備え、リボルビング・ランチャーキー付きのビーム・マグナムを携行する。その威力は未知数だが、サブ・フライト・システムに頼らずとも長距離航行できるなど、驚異的な力を秘めている。





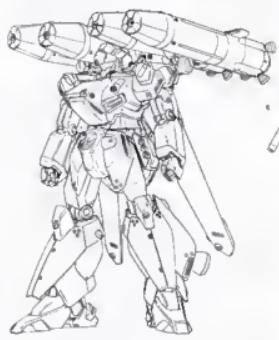
RGM-89D
ジェガン (D型)

ガンダムUCに 登場する 量産MS

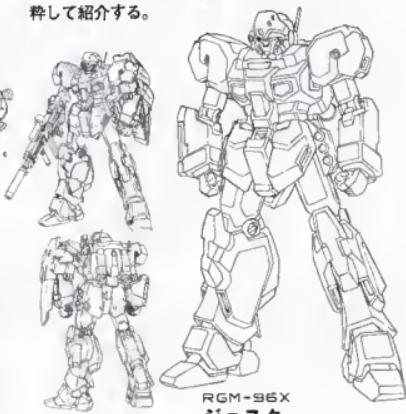
ガンダム作品の最新作の一つである「ガンダムUC」には数多くの量産MSが登場する。それらは過去の映像作品や関連企画で登場した機体であったり、最新の劇中オリジナルのバリエーション機であったり、多岐にわたる。ここではそんな中から連邦軍の量産MSを抜粋して紹介する。



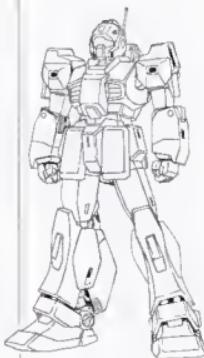
RGM-89S
スタークジェガン



RGM-89S
プロト・スタークジェガン



RGM-96X
ジェстра



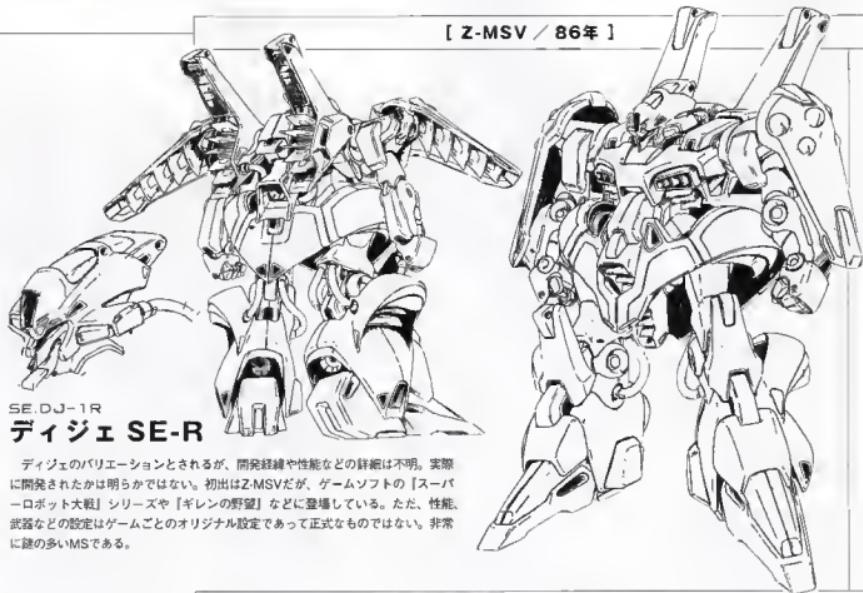
MSA-003
ネモ



RGM-86R
ジムIII



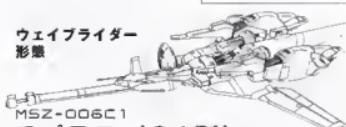
MSA-005K
ガンキャノン・ディテクター



SE.DJ-1R

ディジエ SE-R

ディジエのバリエーションとされるが、開発経緯や性能などの詳細は不明。実際に開発されたかは明らかではない。初出はZ-MSVだが、ゲームソフトの「スーパーロボット大戦」シリーズや『ギレンの野望』などに登場している。ただ、性能、武器などの設定はゲームごとのオリジナル設定であって正式なものではない。非常に謎の多いMSである。

ウェイブライダー
形態

MSZ-006C1

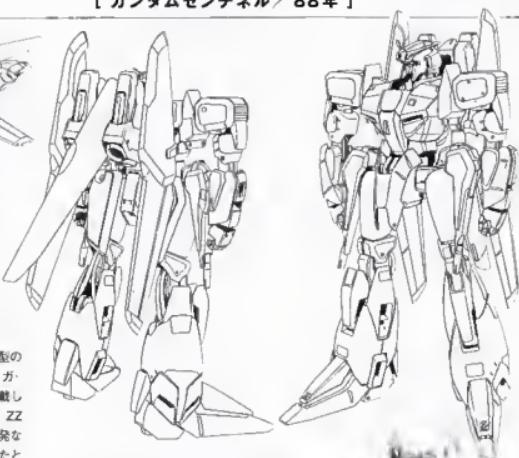
Zプラス (C1型)

Zプラス (A1型) の有用性を認めた連邦軍が採用したZガンダムの派生機。宇宙での活動を中心に設計されている。可変機だが、オプションの装備交換により大気圏突入が可能。ウェイブライダー時は機体下部にピーム・スマートガンと一緒にしたバイオニアを装着する。企画展開当時も人気があったためか、1/144スケールでプラモデル化され、可変を再現していた。



◆ZプラスA2型の
画廊。ハイ・メガ・
キャノンを搭載し
たタイプで、ZZ
ガンダムの開発な
どに活かされたと
いう。

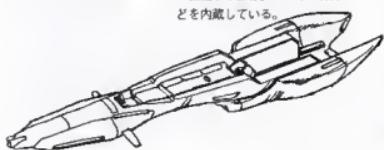
◆A1型用のシールドバインダー。ウェイブライダー時に機首に相当する部分。センサー類などを内蔵している。



MSZ-006A1

Zプラス (A1型)

主にカラバが運用したZガンダムの派生機で、多くのバリエーションが存在する。ウェイブライダーの変形が可能だが、A1型の系列機はどれも大気圏内での運用を想定した設計、機体改修が施されている。A1型は当時プラモデル化されなかつたが、ボビューラーなグレーの機体ではなく、派手目のテスト機カラードだった。



MSA-0011 Sガンダム

雑誌による連載企画「ガンダムセントラル」の主役メカ。ZZガンダムのような合体可変機だが、オプションを装備することで多様性を目指しているためコンセプトが少々異なる。上下半身のユニットはそれぞれGアッパー、Gボマーに変形する。基本的には収納状態から再度合体することは想定されていないという（小説内では無理やり敢行した）。

ビーム・スマートガン



MSA-0011 (Ext) Ex-Sガンダム

Sガンダムに強化型オプションを全て装備した機体。Sガンダムのような合体可変機ではなく、Gクルーザーと呼ばれる巡航航形態に変形する可変機になっているのが特徴である。当時からSガンダム共々人気が高くプラモデル化がされているが、03年3月に発売されたMGでは完全変形を再現、オプションも豊富に付属する。値段も8,400円（税込）というピックモデルだ。



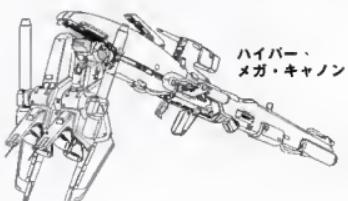
MSA-0011 [Bst] Sガンダム ブースターユニット装備型

Ex-Sガンダム用の強化型ユニットを背面と両脚部に装備した超高機動形態。直線運動による加速力は群を抜いて高いが、推進剤の消費が激しいため、長時間の活動には向かない。その外観はSガンダム版ジオングといつた趣だが、88年当時1/144スケールでキット化されている。



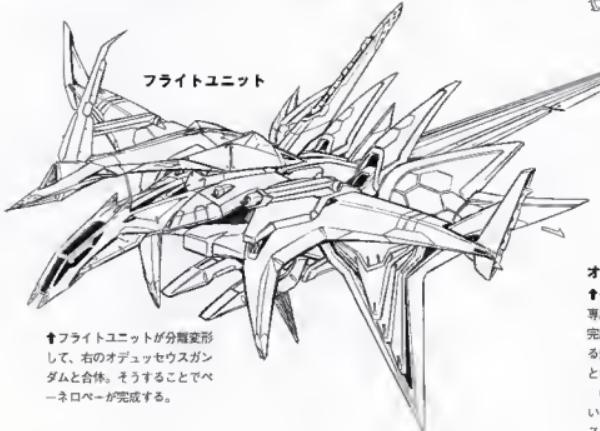
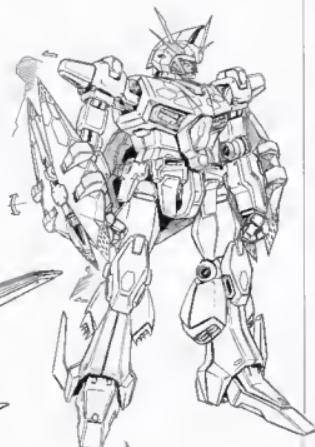
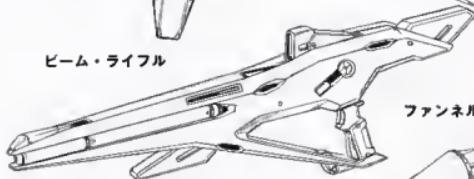
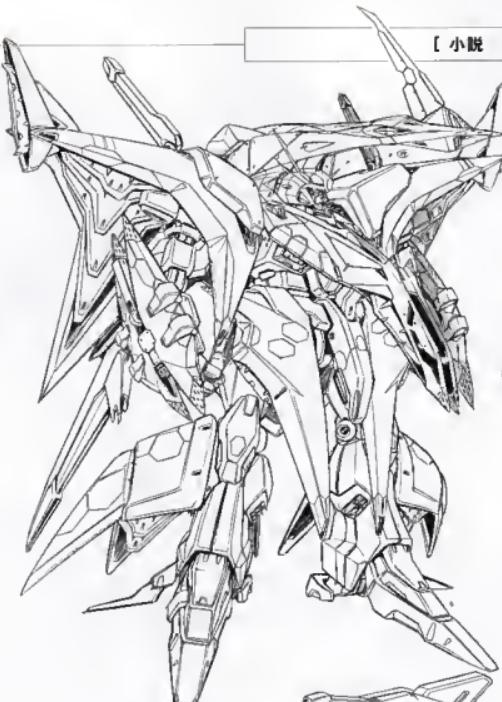
FA-010A FAZZ(ファツ)

フルアーマー ZZガンダムの機能検証のために作られた実験機。ベースにはZZガンダムの試験機が流用されているという。ちなみに主兵装のハイパー・メガ・キャノンは、フルアーマー ZZガンダムにも装備される予定だったという。ちなみに、こうした設定も手伝って、後にプラモデル化されたキットには、ハイパー・メガ・キャノンが付属している。



RX-104FF
ペーネロペー

小説『閃光のハサウェイ』の主役メカの一機。AE社製のガンドム開発20周年を記念して開発されたという機体。ペーネロペーはオデュッセウスガンダムにライトユニットを装着した姿。主なパイロットは連邦軍キルケー部隊のレーン・エイム。デザインは森木謙泰氏で、このページに掲載されている設定画は、いずれもゲーム化にあたって描き起こされたもの。



↑フライトユニットが分離変形して、右のオデュッセウスガンダムと合体。そうすることでペーネロペーが完成する。

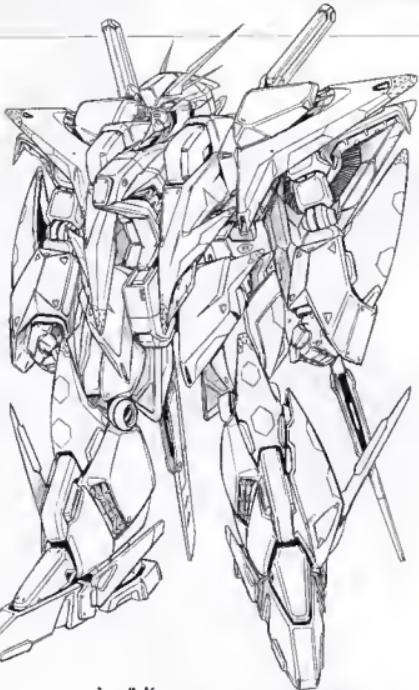
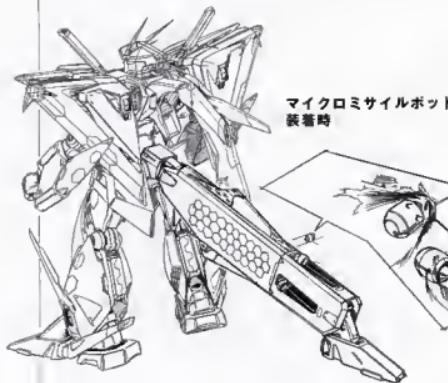
オデュッセウスガンダム

↑ペーネロペーの素体にあたるガンダム。これに専用のライトユニットを装着することで機体は完成し、搭載されたミノフキー・クラフトによる効果で飛行が可能である。なお、先述のゲームとは20年に発売されたPS用ソフト『SDガンダム G-GENERATION-F』と、12年より稼働しているアーケードゲーム『機動戦士ガンダム エクストリームバーサス フルブースト』である。

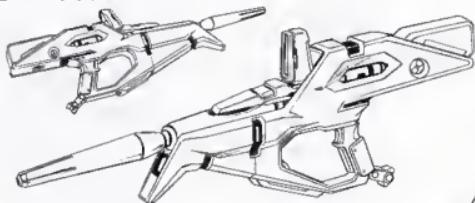
RX-105

ミガンダム

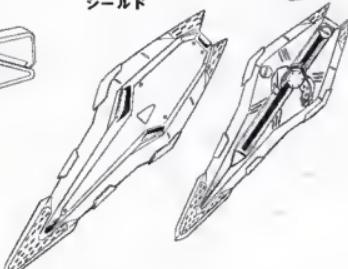
小説『閃光のハサウェイ』の主役メカ。ライバルであるペーネロペーと同時期に開発され、秘密結社マフティーへと譲渡された。AE社の無動機な面は宇宙世纪010年代でも健在らしい。搭乗者は秘密結社マフティーの指導者マフティー・ナビュ・エリンことハサウェイ・ノア（かのプライドの息子である！）。こちらもゲーム化にあたって前ページに掲載したペーネロペーと同じく新規に描き起こされている。



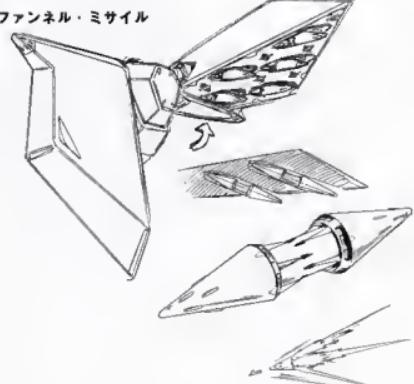
ビーム・ライフル



シールド



ファンネル・ミサイル



ファンネル・
ミサイル
サイズ対比



試験	※全測重複 出力	※全測面積 推力	備考
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、 ビーム・ライフル、ハイパー・メガ・ランチャー、他	30.84	0.55	ウェイブライダーによる大気被突入が可能。
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、 ビーム・ライフル、クレイ・バズーカ	29.46	0.73	-
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル、 クレイ・バズーカ、ビーム・ビズル	29.54	0.73	-
バルカン鏡×2、ビーム・ナギナタ、 ビーム・ライフル、クレイ・バズーカ、他	27.38	0.7	カラバによる爆破用改進機。
ビーム・サーベル×6、アーム・ビームガシ×2	31.95	0.68	-
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル	34.32	0.76	後に連携車の機体として「UC」に搭載。
ダブル・バルカン鏡×2、ハイパー・ビーム・サーベル、ダブル・ビーム・ライフル、 ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キヤノン、2連装ミサイル・ランチャーニー×2	9.32	0.68	コア・ブロック・システム改進機。
スプレミサイルランチャーニー×2、16連装ミサイル・ボッド×2、 8連装ミサイル・ボット×2、他	11.88	0.70	コア・ブロック・システム改進機。
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 ニューアイバー・バズーカ、フィン・ファンネル×6、他	21.14	0.84	サイコフレーム改進機。
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 2連装グレネード・ランチャーニー×2、2連装グレネード・ボット×3、他	21.65	0.82	バック・ウェポン・システム改進機。
バルカン鏡、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ハンド・グレネイド×3、 2連装ミサイルランチャーニー×2	25.29	0.77	-
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×4、ビーム・マグナム、 ハイ・メガ・バズーカ・ビーム・ガリソンガン、他	12.27	0.3	()内の数字はデストロイモード時、※はユニコーンモード時。
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×4、 アームド・アーマー・BS、アームド・フーフ・VN	13.42	0.33	()内の数字はデストロイモード時、※1正式名称はユニコーン・ガングラム2号機パンシイ。※2いずれもユニコーンモード時。
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、 グレネード・ランチャーニー、他	25.95 (30.77)	0.71 (0.84)	()内の数字はディフェンサー・ユニット改進機。
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 シード・ビーム・ガシ、他	-	-	-
バルカン鏡、ボット・システム、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、 ハンド・グレネード×6、他	21.11	0.64	-
バルカン鏡、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、他	25.29	0.76	-
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル	29.11	0.53	非可変機。
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装ビーム・キャノン	23.84	0.45	非可変機。
ビーム・サーベル、メガ・ビーム・ライフル	32.72	0.60	-
バルスレーダー砲×2、ビーム・ガトリングガン、 多目的ランチャー、ユニット、ビーム・ライフル	31.56	0.68	-
ビーム・サーベル、2連装メガ・ビーム・ガシ	31.46	0.57	-
ビーム・サーベル×2、ハイ・メガ・キャノン	25.45	0.61	カラバによる改進機。
バルカン鏡×2、ビーム・ガシ、ビーム・ライフル、ビーム・キャノン×2	30.82	0.84	カラバによる改進機。「UC」に搭載。
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、2連装ビーム・キャノン	23.84	0.45	ベーバーブランで終わつたといわれる。
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ビーム・キャノン	34.63	0.82	後に「UC」に搭載。
ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 ハイパー・ビーム・キャノン×2、グレネード・ランチャーニー×2、他	20.43	0.44	ベーバーブランのみといわれる。
ハイパー・ビーム・サーベル×2、ダブル・ビーム・ライフル、 ハイ・メガ・キャノン、ダブル・キャノン	8.75 (19.20)	0.63 (0.60)	()内の数字はA型のもの。コア・ブロック・システム改進機。
50mmバルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、 遮断ハイ・メガ・キャノン、舷船アガリス子機、オブショウエポンリットル×2、他	24.21	0.55	コア・ブロック・システム改進機。
ビーム・サーベル、ビーム・ライフル、ビーム・スマートガシ、 インコムエコム・ランチャーニー、ビーム・キャノン、(オブショウエポンパック)、 ハイパー・バズーカ、ビーム・キャノン、ミサイル×4	25.8 - 23.2	0.74 / 0.67	※1ファイン・ファンネルバッケ改進機推定。 ※2インコムバッケ改進機推定
バルカン鏡×2、ビーム・サーベル×2、 ビーム・キャノン×2、ビーム・スマートガシ	37.39	0.62	-
バルカン鏡×4、ビーム・サーベル×2、ビーム・キャノン×2、 ビーム・スマートガシ、背面ビーム・キャノン×4、インコム	10.17	0.51	コア・ブロック・システム改進機。
ビーム・スマートガシ、背面ビーム・キャノン×4、 インコム、リフレクターインコム、他	22.63	0.14	コア・ブロック・システム改進機。
60mmダブル・バルカン鏡×2、ダブル・ビーム・ライフル、 スプレーミサイル・ランチャーニー×2、ハイパー・メガ・キャノン、他	11.72	0.8	非可変機。

このページでは、本誌に掲載された代表的な機体のスペックを一覧にまとめた。MSの並び順は映像作品を先にMSVなどの関連企画になっている。

名前	型式番号	頭頂高／全高 (m)	本体重量 (t)	全機重量 (t)	ジェネレーター出力 (kW)	スラスター推力 (kg)	センサー有効半径 (m)	装甲厚
Zガンダム	MSZ-006	19.8m	28.7t	62.3t	2,020kW	112,600kg	14,000m	ガンダリウム合金
百式	MSN-00100	18.5m	31.5t	54.5t	1,850kW	74,800kg	11,200m	ガンダリウム合金
リック・ディアス	RMS-099	18.7m	32.2t	54.7t	1,833kW	74,800kg	11,500m	ガンダリウム合金
ディジェ	MSK-008	18.4m	33.9t	51.8t	1,892kW	74,000kg	11,700m	ガンダリウム合金
メタス	MSA-005	18.1m	27.8t	52.4t	1,640kW	77,000kg	11,300m	ガンダリウム合金
ネモ	MSA-003	18.5m	36.2t	55.6t	1,620kW	72,800kg	10,020m	ガンダリウム合金
ZZガンダム	MSZ-0010	19.86m	32.7t	68.4t	7,340kW	101,000kg	16,200m	ガンダリウム合金
フルアーマーZZガンダム	FA-010S	19.86m	32.7t	87.2t	7,340kW	124,800kg	16,200m	ガンダリウム合金
vガンダム	RX-93	22.0m	27.9t	63.0t	2,980kW	97,800kg (18,300kg × 4, 12,300kg × 2)	21,300m	ガンダリウム合金
リ・ガズィ	RGZ-91	20.5m	24.7t	55.2t	2,550kW	67,600kg (14,200kg × 2, 11,100kg × 2, 8,500kg × 2)	18,900m	ガンダリウム合金
ジェガン	RGM-89	19.0m	21.3t	47.3t	1,870kW	61,400kg	14,200m	チタン合金 セラミック素材
ユニコーンガンダム	RX-0	19.7m (21.7m)	23.7t	42.7t	3,480kW※	142,600kg※	22,000m	ガンダリウム合金
パンシィ※1	RX-0	19.7m (21.7m)	24.0t	46.7t	3,480kW※2	142,600kg※2	23,500m	ガンダリウム合金
リゼル	RGZ-95	20.5m	25.8t (29.2t)	57.6t (68.3t)	2,220kW	81,500kg	14,920m	ガンダリウム合金
デルタプラス	MSN-001A1	19.6m	27.2t	—	2,360kW	92,400kg	16,200m	ガンダリウム合金
ジェスター	RGM-96X	19.3m	24.8t	57.2t	2,710kW	89,030kg	14,200m	—
ジェガンD型	RGM-89D	19.0m	21.3t	47.3t	1,870kW	62,000kg	16,800m	チタン合金 セラミック素材
プロトタイプZガンダム	MSZ-006-X1	19.6m	29.9t	52.1t	1,790kW	99,000kg	14,000m	ガンダリウム合金
量産型Zガンダム	MSZ-007	20.4m	32.1t	48.2t	2,022kW	107,500kg	11,500m	ガンダリウム合金
ZII(ゼッター)	MSZ-008	18.3m	31.1t	69.7t	2,130kW	114,300kg	14,000m	ガンダリウム合金
百式改	MSR-100S	19.2m	39.2t	63.6t	2,015kW	93,500kg	11,500m	ガンダリウム合金
リック・ディアスII	MSA-099-2	18.52m	30.7t	58.2t	1,850kW	102,200kg	11,200m	ガンダリウム合金
メタス改	MSA-005S	18.3m	34.9t	50.9t	2,000kW	83,000kg	12,000m	ガンダリウム合金
ガンキャノン・ディテクター	MSA-005K	18.5m	34.5t	54.5t	1,780kW	64,600kg	9,200m	ガンダリウム合金
ガンダムMk-III	MSF-007	19.5m	32.1t	48.2t	2,022kW	107,500kg	11,500m	ガンダリウム合金
ネモII	MSA-004K	18.5m	45.4t	56.1t	1,620kW	68,600kg	12,050m	ガンダリウム合金
フルアーマーガンダムMk-III	FA-007G III	19.5m	47.2t	62.1t	3,040kW	141,200kg	11,500m	ガンダリウム合金
プロトタイプZZガンダム	MSZ-009 (B)	19.02m	31.7t (29.5t)	63.0t (60.3t)	7,200kW (3,140kW)	100,300kg	15,480m	ガンダリウム合金
量産型ZZガンダム	MSZ-013	18.5m	29.2t	53.5t	2,210kW	97,500kg	11,300m	ガンダリウム合金
量産型vガンダム	RX-94	21.2m	25.6t	64.5t (※1) 58.0t (※2)	2,500kW	87,000kg	19,400m	ガンダリウム合金
Zプラス(C1型)	MSZ-006C1	19.86m	36.18t	77.4t	2,070kW	124,200kg	21,000m	ガンダリウム合金
Sガンダム	MSA-0011	21.7m	38.4t	73.0t	7,180kW	143,600kg	18,800m	ガンダリウム・コラボジット
Ex-Sガンダム	MSA-0011 (Ext)	21.3m	69.4t	162.5t	7,180kW	1,182,000kg	18,800m	ガンダリウム・コラボジット
FAZZ	FA-010A	19.86m	45.4t	94.6t	8,070kW	118,800kg	16,200m	ガンダリウム合金

あくまで目安でしかないが、それぞれ全機重量／出力は、数値が低ければ実量の電力があり、全機重量／推力の場合、低い数値ならば高い、どちらもkg換算で計算。
※ZZは能動帆士ガンドムZZ、CCAは被動帆士ガンドム、逆襲のシャア、UCは被動帆士ガンドムUC、Sはガンドムセレクション。

Mobile Suit Gundam AGE Mechanic&World

グレートメカニックスペシャル
機動戦士ガンダムAGE
メカニック&ワールド

A4判カバーフ付／定価1,990円（税込）

A.G.という世界、
百年の物語の
モビルスーツたち



Mobile Suit Gundam SEED C.E. Mechanic& The World

グレートメカニックスペシャル
機動戦士ガンダムSEED
コズミック・イラ
メカニック&ワールド

A4判カバーフ付／定価2,600円（税込）

第一次連合・
プラント大戦
メカニックヒ
世界完全ガイド！

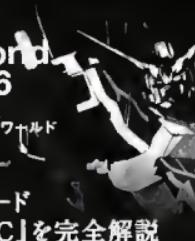


Mobile Suit Gundam UC Mechanic&World ep 1-3 / ep 4-6

グレートメカニックスペシャル
機動戦士ガンダムUCメカニック&ワールド
ep 1-3 / ep 4-6

A4判カバーフ付／定価各1,680円（税込）

宇宙世紀の最新モード
「機動戦士ガンダムUC」を完全解説



Mobile Suit Gundam OO Mechanic

グレートメカニックスペシャル
機動戦士ガンダムOOメカニックシリーズ
A4判カバーフ付／定価各1,680円（税込）

「機動戦士ガンダムOO」に
登場したMSなど徹底解説



グレートメカニック・スペシャル モビルスーツ全集



モビルスーツ全集①
RM-79
ジムBOOK
A4判カバーフ付
定価1,260円（税込）



モビルスーツ全集②
水陸両用
モビルスーツBOOK
A4判カバーフ付
定価1,470円（税込）



モビルスーツ全集③
MS-06
ザクBOOK
A4判カバーフ付
定価1,470円（税込）



モビルスーツ全集④
MS-07 09
ザク2BOOK
A4判カバーフ付
定価1,470円（税込）



モビルスーツ全集⑤
RX-78 ガンダム&
ザクBOOK
A4判カバーフ付
定価1,470円（税込）



モビルスーツ全集⑥
MS-14 タルグ&
ジオナリBOOK
A4判カバーフ付
定価1,470円（税込）

グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

2013 AUTUMN

GREAT MECHANICS.DX26

グレートメカニック.DX26

B5サイズ／定価800円（税込）



ガンダム ビルドファイターズ

ガンダムが挑む新たな領域

- 宇宙戦艦ヤマト2199
- コードギアス 亡国のアキト
- 機動戦士ガンダムUC
- ガールズ&パンツァー
- 革命機ヴァルブレイヴ
- 霊戦機ガルガンティア
- 銀河機攻隊マッシュティックプリンス
- INTERVIEWS
- 荒牧伸志 他



バックナンバーをご希望の方は、お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒162-6540

東京都新宿区東五軒町3-26

☎ 03-5251-4818 (受付)

<http://www.futaba-sha.co.jp/>
(双葉社の書籍・コミック・ムックが販売ます)

2013 SUMMER

GREAT MECHANICS.DX25

グレートメカニック.DX25

B5サイズ／定価800円（税込）



機動戦士ガンダムSEED

DESTINY HD REMASTER PROJECT

福田己津央監督インタビュー

- 機動戦士ガンダムUC
- 宇宙戦艦ヤマト2199
- ガールズ&パンツァー
- 機動戦士ガンダムAGE MEMORY OF EDEN
- 革命機ヴァルブレイヴ
- 霊戦機ガルガンティア
- 銀河機攻隊マッシュティックプリンス
- INTERVIEWS
- 大河原邦男・荒牧伸志 他

2013 SPRING

GREAT MECHANICS.DX24

グレートメカニック.DX24

B5サイズ／定価800円（税込）



機動戦士ガンダムUC

ep.6「宇宙と地球と」

古橋一浩監督＆玄馬宣彦 インタビュー

- 宇宙戦艦ヤマト2199
- コードギアス 亡国のアキト
- ガールズ&パンツァー
- 革命機ヴァルブレイヴ
- 霊戦機ガルガンティア
- 銀河機攻隊マッシュティックプリンス
- INTERVIEWS
- 宮野由悠季／大河原邦男 他

2012 WINTER

GREAT MECHANICS.DX23

グレートメカニック.DX23

B5サイズ／定価800円（税込）



宇宙戦艦ヤマト2199

機動戦士ガンダムUC

- 機動戦士ガンダムAGE
- 進化変形ジャイロセッター
- ガールズ&パンツァー
- TIGER&BUNNY
- コードギアス 亡国のアキト
- エウレカセブンAO



双葉社MOOK
グレートメカニック・スペシャル
モビルスーツ全集⑦

**Z計画&
アナハイム・
エレクトロニクス社製
モビルスーツ
BOOK**

2013年11月8日発行

編集人 二之宮隆
発行人 赤坂了生
発行所 株式会社双葉社
〒162-8540
東京都新宿区東五軒町3-28
営業 ☎ 03-5261-4818
編集 ☎ 03-5261-4869
<http://www.futabasha.co.jp/>
(双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます)

印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 株式会社若林製本工場

※落丁・乱丁の場合は送り双葉社負担でお取り替えいたします。「製作部」あてにお送りください。ただし、古書店で購入したものについてはお返り替えできません。

☎ 03-5261-4822 (製作部)
※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内で利用でも著作権法違反です。
※定価はカバーに表示しております。

©創通・サンライズ
©FUTABASHA 2013 Printed in Japan

ISBN978-4-575-46477-1 C9476

編集
オフィスJB
斎藤幸夫
豊村保行
宮崎左也佳
旭和則 (双葉社)

執筆
河合宏之
星★譽介
市ヶ谷ハジメ
矢吹明紀
南健一郎
やすゆきゆたか
ニック木村

表紙イラスト
森下直規

本文イラスト
森下直規
船越裕

デジラマ
Robographer
Art Director
鶴田裕樹
('ll Products)

Designer
成宮英俊
園田茜
藤居雪子
岡田緑
森原珠音
古敷谷あゆみ
大下哲郎
('ll Products)

スーパーバイザー
山崎努

本文零寫
斎藤武司

協力
創通・サンライズ

Z PLAN

&ANAHEIM TECHNICS

GREAT MECHANICS

双葉社MOOK



モビルスーツ
全集⑦
Z計画&
アナハイム・
エレクトロニクス社製
モビルスーツ
BOOK

U.C.0087-0096

Z 計画 B O O K

& アナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツ

卷之三



Z PLAN &ANAHEIM ELECTRONICS

**GREAT
MECHANICS**
グレートメカニクス
スイッチ版

双葉社MOOK

モビルスーツ
全集⑦
Z計画 &
アナハイム・
エレクトロニクス社製
モビルスーツ
BOOK

U.C.0087-0096

Z 計画 画 & アナハイム・エレクトロニクス社製モビルスーツ B O O K

MSZ-006Z ガンダム、MSZ-010ZZ ガンダム等、Z計画機と
アナハイム・エレクトロニクス社製のモビルスーツたちを徹底解説!

アナハイム・
エレクトロニクス社製MS専門書
一冊まるごと

Z計画機本

RMS-099 リック・ディアス

MSA-003 ネモ

MSN-00100 百人

MSN-001A1 デルタプラス

MSZ-006 Z ガンダム

MSZ-010 ZZ ガンダム

RX-93 ν ガンダム

RX-0 ユニコーン ガンダム

RGZ-95 リゼル etc



卷之三



©創通・サンライズ

定価：本体1400円+税

雑誌6398254
Printed in Japan ©Futabasha 2013

ISBN978-4-575-46477-1
C9476 ¥1400E



9784575464771



1929476014009